
シーフ & プリンセス

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーフ&プリンセス

【Nコード】

N8318K

【作者名】

OGRE - ASHYURA + 1

【あらすじ】

財閥の三姉妹の次女として生まれた少女、清名 聖。彼女は自分の夢を叶える為に家を出て一人暮らしをしていた。そこにちよつとしたハブニングから緋皇 慧十と言う少年と二人で生活することになり……果たして二人はどうなってしまうのだろうか。

出会いは突然に

それは……その瞬間に起きた。大きなスリップ音のすぐ後にガラスが割れる音と金属と金属がぶつかる音が響きその事故は起こった……。それはアタシが原因だ……。

「眠い……。流石に三時起きはキツイかな……」

「うわっ！」

「へ？」

真っ黒いかなり手の込んだ改造がされている大型バイクが交差点を横切ろうとした私を避けてくれたのだ。信号はこちら側が赤で明らかにアタシが悪い。それは確定だが彼は寸前でハンドルを切り直接の衝突を避けてくれたのだ。その彼は……。

「っ……………！」

バイクの運転手の行方を探した。その時にアタシの目に飛び込んできたのは頭から血を流しながら近寄ってくるバイクの運転手である。彼は右目を閉じ右手で頭を押さえながら話かけてきた。ライダーズスーツを着ているその男の子はどう見てもアタシと同一年くらいに見える。それでも……対応が全くちがった。大人というか……この状況でアタシの心配が出来るなんて……化け物？

「おい……。お前……。大丈夫か？」

「そちらこそ大丈夫ですか？ う、腕が……」

これがアタシと彼の凄まじい出会い……。正しくは再開であった……。お互いその時、その瞬間には気付かずにアタシは彼の指示で

救急車を呼んでからこれも彼の指示でとりあえず実家に事故の報告をする。たまたま長期休暇で学校は休みだったから病院に親子共々お見舞いに行った。

「全く娘の不注意ですまない……。治療費は全額こちらが負担しよう……。怪我は最先端の治療方法で治療を加えているから骨折でも数日で回復するだろう。その説明は後から主治医からある」

「あ、わざわざそんな説明まで済みません。ですが……治療費に関してそんな事をしていただかなくても……」

「君は丁寧な性格だね。気にいったよ……。君の明快な判断能力ならば既に見当はついているだろう。……私の名前を聞けばわかる。娘の事とは言えスキャンダルは避けたいんだ。名前は清名 秀造という」

「……清名財閥の代表取締役さん？　そうですか……。わかりました。こちらでも最大限努力します。幸い自分の感覚からだあと後遺症は無いみたいです、さっきの説明から左腕の骨折と額の右側を縫ったただけですみそうです。あ……、出来れば医療費よりはあのバイクの方を……なんとか」

「うん、それは既に手配済みだ。新しいパーツとの交換作業を既に行っている」

父親と彼、緋皇 慧十の会話を聞いてわかった事とアタシが見た彼の容姿はこんな感じだ。身長は175センチぐらいで細身の筋肉質な体形。正直モヤシに見えるくらい細い。容姿は……アイドルみたいに整っているがきりりとした顔立ちをし銀髪の白っぽい瞳で俗に言うハーフとかクォーターの特徴が見てとれた。話を聞いていると彼のお祖父さんが北欧の出身のようだ。そして、進学のためにマンションに移り住むため今日、この街に引越して来たようだ。私も実は今日からマンションに移り住む……ルームシェアする相手と打合せがあったのだがその人とどうしても連絡が付かず困っている

が契約者の父は慧十という男の子と話しこんでいて全くこちらに意識を置いてくれない……。

「すごいですね。骨折したはずなのにもう動かしても痛くない……。あ、あの退院したら一度ルームシェアするマンションに行きたいので送迎をお願いできますか？」

「うむ！ グスン……わかった……。これから頼りにしてくれここで会ったのも何かの縁だ。よろしく頼むよ。君のお父さんのことはよく知っているんだ。何でも何でも言ってくれ！」

彼の両親は既に亡くなっているようだ。アタシの父は涙脆く、すぐに同情する。だが……。今回はアタシは否定出来ない、アタシが起こした事故だから……。それに、彼の境遇にはアタシも涙したほどだ。だから今回の父のお人よしにはアタシも賛同している。見なれぬ白髪の男の子を車に乗せてアタシの住むアパートに向った。

「ありがとうございます。また本宅に後日伺わさせていただきます」
「ってここアタシのマンションじゃん……」

「やっぱりアンタか……。清名 聖さん？ だよな」

「……ということは君がパートナー？ え？ 男？」
「そうなるな」

父親にそれを連絡すると『仲良くしてあげなさい』と言われたアタシ……。年頃の娘を同じく年頃の男と生活させる親が何処に居ようか……。だが、彼も正式に父と話した事があると言っているため手違いでは無い。だとしたら……いや、考えないことにする。

「これから頼むよ。安心して寝込みをどうしようとか言う趣味はないから」

「当たり前だ！」

「じゃ……荷物の整理が有るから手伝ってくれない？」

「あ……。うん、わかった」

衝突した左腕は回復していると言っても折れていて不自由なよう
だ。ここは原因を作ったアタシの出番らしい。箱を空けるくらいは
何でもないらしいがそれを抑えるのに不自由が見てとれる。ギプス
を邪魔そうに見た後にアタシに振り返って来た。

「でもさ、偉いね。金持ちなのに自活なんてさ」

「アタシがそういうのが嫌いなだけだ。それに……。嫁修行はしと
かないとな！ いつかはアタシもどこかに嫁ぐつもりだし」

「まあ、未婚の女性も少なくないしそれは君の自由さ。でも、確か
に片付けの手際は良いね。手は二、三日でギプスは取れるから学校
までには間に合うよ」

「それはよかった……。で、その目はなんなんだ？」

「俺みたいに気付ける奴ばかりとは限らないから危ないし。早朝の
バイトはもう辞めてね。顔はいいからウエイトレスなんていいんじ
やない？ 良いバイト紹介するよ？」

「馬鹿な事を言うな！ なんだあんなバイトをしていると思ってい
る！ 接客が苦手なんだ……」

アタシの容姿も一応説明しておこう。身長はだいたい160セン
チで慧十とは違い生粋の日本人であるアタシは黒髪。長さは肩ぐら
いまでのばしていて目標は健康骨まで。体系は秘密……友人には羨
ましいと言われるがアタシは正直鬱陶しいし邪魔である。

「嫁修行はどうしたの？ 旦那さんの顔が見れない奥さんなんて聞
いたことないけど」

「嫌なところで蒸し返すな……。っと……この制服は。お前も『楼
雅学院』なのか？ 奇遇だな」

「そつだよ。奇遇つて言つてもここからだとし離れた工業系の専門学校くらいしかないでしょ？　俺は俺は普通学級ランクのSに行く。お前は院麗クラスだろ？」

「いや、アタシも普通学級だ。さつきも言つたが金持ちとしてチャホヤされるのが嫌なんだよ。お前には解らんだろつが気持ち悪いのだ。そんな付きまとわれてもな」

楼雅学院はこの地区にある中で最高ランクの高等学校だ。その学校は一般の高校とはカリキュラムや学科が全く違い進路を大きく左右する専門性で売れている学校でもアル。一学年400人で4クラス…100人クラスなのだ。振り分けは簡単目指す所や出身で違ふ。

……説明しよう。

まず最初はこの学校の花形である『院麗クラス』。金持ちのお嬢様と御曹司を集めたクラスで学力のさが1〜10まであるのんびりしたところ。校内での別名が高嶺の花クラス。

二番目に有名なのは『院麗クラス』創設と共に併設された『バトラークラス』。執事やメイドを目指す生徒が集まるクラスで実技教養が大半。美形の生徒が多い事から他校から羨まれているらしい。

ここからは普通の高校にも存在する。『普通学級クラス』。ここはアタシ達を通うことになるクラスで定期、実力、休暇明けの三大テストの結果による学力差によつて5クラスにわけられている。学力はかなり高めで国有数の高学歴者が居るためカリキュラムは他の一般高校とは比にならないほど難しいものである。最後に推薦枠の多い学科で有名な『スポーツ選抜クラス』。名前の通り体育会系の生徒が固まっている。クラス学力は低めだが運動能力と体格はかなり凄い。オリンピックの金メダリストを何人も輩出した栄光の実績が数多くあり全国からその高い壁を超えるため実技派のアスリートが多く集う。

……とこんなところだろう。因みにアタシは『普通学級クラス』の五段階S、A、B、C、DのAだ。実際のランクで言えば二番目

のクラスなのだろう。生徒会や委員会は4の学部から代表が選抜されその中で再び震いかけられる。だいたいは院麗クラスの高学力の生徒が会長副会長などを陣取る。

「ちよつと待て……今Sクラスに行くと言ったな？」

「言っただけど？」

「お前……。そんなに頭よかったのか？ そんな馬鹿な……こんなちゃらんぼらん奴が……」

今は実質的には春休みの状態で学校は長期休暇になっている。今年からアタシも入学しクラスを振り分けられたがこんなに近くにSクラスのメンバーがいたとは……。だが、彼、慧十の洞察力からすればそれも頷ける。

「ありがとう。助かったよ。飯は俺が作れるから安心しな」

「ウツ……。いつから気付いて……」

「最初から。あと明日にはギブスの一番上が取れるからバイト先や学院の送り迎えもまかせなよ。洗濯と俺の部屋以外の掃除をお願い」
率直な感想は物凄い几帳面な男だ。彼の生活リズムには合わせる事は出来ないだろう。アタシがバイトを شدしたのは趣味を継続するためだ。趣味や学業をするにも小金がいる。だから少しは父親の仕送り以外にも資金を作りたいかつたということもあった。

「慧十はどんなバイトしてるのだ？」

「いきなり呼び捨てか……。俺は説明するのが難しいバイトをしてる。それなりに稼げるバイトだがキツイし仕事の量もかなり多めだ……。一応聖が出来そうな仕事もあるにはあるが接客だから無理か……。」

「ふーん。アタシが服を作るための布を買いえるぐらい稼いでるのか？」

「怪我や事故を引き起こさないなら提供しよう。親父さんにはよくしてもらったしな」

彼が来てまだ数時間だから性格がわかっていないし稼ぎ所もわからない。でも、性格は悪くは無いようだ。口調は固いしかなり厳しい性格だが優しいところもある。破廉恥なところも……。

「それから。コスプレするなら今度招待するよ……。俺の店に」

「コスプレじゃない！ 普通の服だ！」

「メイド服やチャイナドレスがあるのは気のせいか？」

「ウツ……」

アタシが家を出た理由……。それは服飾デザイナーに成りたかったからだ。父親には悪いが家を離れて仕事をしたかったし家を継げば自分の好きなようには出来ない。金持ちの柵に囚われたくはなかったのだ。それにしても慧十は不思議な少年だアタシのために稼いだ資金の一部を裂いてくれたし協力までしてくれた。しかもなぜか全てを見透かされている。確かに隠していることも多いがそこまでわかるものなのだろうか。いい例がこれだろう……。

「さらし……。苦しくないの？ 別に胸があるのは悪くないと思うよ。服は全部そのサイズに合わせて作ってるから気になってたけど」

「う……うるさい！ 慧十には関係ないだろ！ 動きにくいし男どもから変な目で見られるし……。これまで良いことなかったんだよ！」

「学校ではそれでもいいけど俺の店に来る時はやめてね……。一応メイクとかも手伝うし。今夜行く？ 飯ついでに」

「あ……ああ、わかった」

乗りで行くと返事をしてしまったが大丈夫だろうか……。昼はそん

な感じでうだうだするうちに終わった。昼食は早速、慧十が作り豪快に炒飯を仕上げてくれた。意外と美味しい慧十が作る料理は手際がよく工程が速いため温かいご飯が食べられそうだ。そして、その後も慧十のバイクの新しいものや何やら家具などのが運ばれ部屋に納まった。その中に特殊な形状のパソコンやギターなどの統一感のない家具が含まれていたのに見事にコーディネートされかなり整頓されている。

「聖！　そろそろ支度するぜ。来いよ、服選んでから髪の毛セットしてメイクして……きりないか。」

「ま、いいや服は聖の親父さんに頼んだし先に盛つとくか？」

身長差は大体頭一つだ。いきなり座らされ化粧や髪の毛の手入れをされていく。十分後にはアタシではなくなっていた……。濃すぎないメイクにメイクに合わせた髪型で統一しドレスまで合わせてくれた。流石に着替えはメモを書いてもらって自分でしたがその後のコーディネートは全てやってくれたのだ。まるでお姫様のようになつてしまった自分が鏡に映るのをうつとり眺めていると慧十の声で現実に戻される。

「あんまりやりたくはないがヘルメットをかぶってくれ！　遅刻気味だ」

「まさかバイクで行くのか？　事故を起こしたあとなのによく乗れるな」

「そのまさかだよ。安全運転すれば俺は片手でも行けるの。それより振り落とされないようにちゃんとしがみつけよ」

区画された道路を走る。街の事を言い忘れていたがこの街はセクターホールというシステムを取り入れ発展した街だ。アタシの父親と同期の仲間たちが開発を促進し店の売上、種類、大きさなどで区

画化し中心の理事会を有するセンタービルである如月が統轄をし商業が発展した中枢型の市街地である。どの店も皆少しでもいい場所に店を構えようと必死なのだ。

「ちよつと！ エアバイクって先に言ってくれないと！ キャツ！」
「これぐらいで驚くなよ！ この先でもっと驚くことが待ってたんだからな！ それと言葉使い戻ってんぞ！」

巨大な店が並びキラキラと光る看板が宙に浮いている。街並みは人気店が並ぶ中心街に変わりネオンなどの綺麗な光は減り次第に落ち着いた雰囲気になりはじめた。石造りの物や木造の料亭などが増えてきてアタシは気後れし始めている。小さい時には父親によく連れて来てもらったが今度は二人でしかも同年代の男の子とだ。デート……いや、断じて違う。慧十には連れて来てもらっているだけだ。あれ？ こういうのがデート？

「着くぜ！ しがみついとけ中に入る途中に段差があつてそこだけ少し車体が浮くからな！」
「へ？ ウワツ！」

石造りの落ち着いた宮殿のような建物の前で止まりバイクで中に入って行った。中でも車やバイクが数台入っていき案内係に誘導されて次々に車庫に出入りしていく。慧十のバイクもタキシードの執事風の係り員が預かり別の方向に運んでいった。

「ここからは仕事柄いつもの喋り方は出来ません。お嬢様……お手を……」

「急になんだよ……慧十。改まられるとは、恥ずかしいじゃないか」
「シッ……聖、ここでは名前を隠してくれ。俺は皇太でお前は慧羅だ……。ここは学院の卒業生や学院の生徒が出入りしてる。名前は

隠せその方がお前にもいいんだ。本来なら『院麗クラス』に入学するはずの人間が普通科に居ること自体おかしいからな」

「あ、おう」

「では、慧羅お嬢様……。こちらへ」

建物の中にはたくさんの施設を取り入れたショッピングモールになっている。この店の企画は簡単で一組の客集団につき一人の執事やコスプレした職員が付き添い接客をしていく形の店だ。アタシはさつきよりも更に気後れして慧十、もとい皇太のエスコートを受けて店を歩いて行く。アタシの見たてではそんな所だ。平時は執事使用らしくイベントがある時はコスプレや内装を変えるイベントクラブ的な要素も含んでいるらしい。アタシの腕に通るしっかりした腕の感触は……。何を考えているんだ。一人で恥ずかしがっていると少しランクの高そうな大柄な男性がアタシの事について慧十……。皇太に問うている。

「社長……。その方は？」

「俺の親戚が紹介してくれた方だ。名前は輝織　慧羅さん。俺が受け持つ事になった新しい娘だ」

「さようでしたか。ではごゆっくりお過ごし下さい。輝織様……」

「あ、はい！」

「慧羅お嬢様……。まずはお食事に参りましょうか」

「お……。おう」

気が狂いそうな感じがずつとしている。何故ならいつも楽なジーンズにタンクトップやパーカー、果てはスウェットのアタシがそれらに比べ露出度の高く豪華なドレスにハイヒールで髪の毛や化粧……。こんな体験は初めてだからだ。しかもまだあつて数時間の男の子とこんなに親しくしているのも初めてだから……。父の主催するパーティーにもつと出席しておけばよかったと今後悔している。

「お嬢様……この食事はバイキングです。何なりとお申し付け下さい。指定のテーブルにてお待ち頂ければけっこうです」

「あ……おう……」

メニューで指定した物を手際よくとり運んでくる皇太を見ているといきなり皇太に似た同じくらいの少女が声をかけてきた。身長は165センチぐらいで皇太に似た白っぽい瞳に少しくすんで黒ずんでいたが彼女も銀髪だ。

「はじめまして、貴方が兄上の初めてのお客さん？」

「兄上つて……妹さん？」

「ええ……。ここでの名前は紫神で本名は雲英です。『この人は私達の正体を知らない……兄上も嫌味な方だ。いまは伏せておくべきでしょうね』」

「お待たせいたしました。ではごゆっくり。紫神様……ごひいきにしていた下さりありがとうございます」

「うふふ。ありがとう。では、私はこれで失礼します」

「ごゆるりと……」

皇太はアタシが食べるのを横に立ちそれとなく見ては確認をとり料理を運んでくる。デザートに入りアタシの疑問がついに爆発した。なぜ皇太は食べないのか？

「なんで皇太は食べないのだ？」

「お気遣いありがとうございます。ですが職務中にはお嬢様や他の御主人様からの命でなければ我々はそのような行為はおこないません」

「そつ……じゃあ皇太も食べてくれよ！自分だけ食べるのは気分悪いし」

「さようですか。では、いただきます」

それからアタシはずっと皇太に付き添われ買い物続けた。しかし、アタシはお金を持っていないのに次々皇太はすすめてくる。そして、アタシも買ってしまう。よく観察していると皇太が金を出している。いくら持っていたのかは分からなかったが買った量からしてかなりの金額だろう。アタシにはそんな資金は無いのだが……。

「この店はデパートのような形ですが他にも娯楽、多種ビジネス、医療、なども完備されています。そろそろ0時を回ります。今日はここまでにいたしましょう」

「うん……」

彼は最後にアタシの誕生日を聞いてきた。アタシの誕生日は五月五日だった。子供の日に生まれたためアタシは男勝りになったのだとよく父に言われる。それを彼に伝えると彼は宝石店に入り何やら注文しすぐに帰ってきた。

「では、帰りましょう」

「うん、今日はありがとう……」

アタシは彼が運転している間に寝てしまったようだ。いつの間にか部屋に帰っていて軽くゆり起こされたあとシャワーを浴びてパジャマに着替えてベッドに潜り込んだ。

次の日

アタシが起きたのは午前10時だった。慧十は既に起きていて勉強らしき事をしている。彼は勤勉で真面目な性格らしい。アタシの体力がないだけかもしれないが彼はかなり体力があるように感じる。

昨日はかなり歩いたはずなのだ。

「おはよう……。よく寝れたか？」

「ああ、あれだけ歩いたからな。そりゃグッスリと寝られたよ」

「よかった。よかったついでに渡したい物がある」

慧十は大きなダイヤのついた指輪とほぼ同じ大きさのエメラルドの着いた指輪を机の上に置いた。彼はダイヤの指輪をアタシに渡すように机の上をスライドさせる。唐草の模様の入った綺麗なデザインの指輪だ……。そして同じデザインのエメラルドの指輪を自分の薬指にはめた。エンゲージリングなのだろうか？ いや、婚約などしていない。

「どういうことだ？」

「あの店……名前はNIGHT-KNIGHTって言うんだ。親父が創って一番お気に入りのお店でさ。意味は名前の通り『夜の騎士』決まった主人を人知れず抱擁するように守るのさ。で、各社員の最初の客にはこうやって誕生石のついた指輪を渡すのがしきたりなんだ。忠誠の証に……。な。俺はオーナーやってたが専属の客はいなかったんだ」

「じゃ……。アタシが最初なのか？」

「そういうこと。指にするのが邪魔ならネックレスにしなやってやるから」

慧十に加工してもらい恥ずかしいが首に提げている。アタシもお礼がしたくてとっさに彼の誕生日を聞いてみた。慧十の誕生日は四月四日だと教えてくれる。彼は店の仕事と勉強を両立させているためすこし疲れがたまっているように見えた。それに何故か最初と……昨日と扱いが変わってきている気がするのは気のせいだろうか。その日の昼は二人で宿題をはじめ教え合いながら素早く済ませた。

慧十は頭がいいと言うよりも回転がいい。アタシが問題を解いている間に次々に解いていき同時に始めたはずなのに休憩用の菓子やお茶を用意しているしまつた。

「何でそんなに解くのが速いのだ？」

「いや、速く解いている気はないんだが……、方針は簡単だぜ？あらゆるパターンの思考を読む事が大切なのさ俺達の生活をしていく上ではな」

「ほう、これでまた勉強になった。ありがとう」

「聖さ、もっと女の子らしくしたら？言葉使いとかさ。せつかくルックスもビジュアルもいい訳だしさ。普通にさらしとか使わないほうがモテると思うけどねえ」

「う、うるさい！小さいころからこういう性格だったんだ。今更そんなことを……」

呼び鈴が鳴りアタシはその場から逃げるように玄関に急いだ。アタシも一応女の子だからああいう事を言われると恥ずかしいのだ。慧十はそんなことお構いなしに次々に聞きたいことを聞いてくる。全く……デリカシーの欠片もない。別の言い方をすれば意志の疎通に壁が無いのだ。また、別の言い方をすれば馴れ馴れしい。

「聖！久しぶり〜！」

「お姉ちゃん！久しぶり！首から何提げてるの？」

「成果お姉ちゃん！那流！なんでこんなに急に……。来るなら連絡してよ」

この二人はアタシの姉妹で姉の成果と妹の那流といい。姉の成果は既に結婚していて極度の暇人。妹の那流は私立中学に通う二年生で春休みの課題を終えたらしく、たまたま里帰り中の姉の車に乗ってアタシの新居を見に来たらしい。二人と天真爛漫な性格でいつでも呑気に行動しアタシが止めても聞かないのが日常。そのくせ姉は

感が鋭く嫌な事をすぐに当てられる。那流は正直で扱いやすい。

「じゃあ、お邪魔しまあす」

「ちよつと！ 待ってよ！」

「あ……。彼氏居たの？ 邪魔しちゃいけなかったかな？」

「彼氏じゃない！」

至って普通に部屋に戻り再び外に出て来た慧十が一度会釈して居間に消えた。その後、二人とも上がり込み姉妹三人の話を始めたのだが話題は大体慧十の事だ。確かに美形で髪が銀色の男の子が男っ気のないアタシの部屋に居れば二人はそれに食いついてくるだろう。

「で、彼のことどう思ってるの？ お姉ちゃん？」

「そうよ、聖……お姉ちゃんには秘密はなしよ。でも彼どつかで見た顔なのよね……」

「それは雑誌でしょう。お茶はご入り用ですか？」

「あ、ありがとう」

「それから、聖さんのお姉さまと妹さんですか？ 自己紹介がまだでしたね。俺の名前は緋皇 慧十です。以後よろしくお願いします」

「こちらこそ、姉の成果です」

「妹の那流です！ お姉ちゃんと付き合っていないならあたしと付き合ってくださいよ！ 今ちよつどフリーだし」

「また別れたの？ あんたこれで何人目よ……」

慧十は終始にこやかにいた。妹の那流が抱きつても姉の成果が聞いている行けないアダルト系なエリアの話しをしても平然と答えていた。正直、彼にはアタシなど普通のルームメイトとしか思っていないのだろう。だが、妹や姉と扱いが違うのもわかる何か親しみのような物が違うのだ。

「じゃあ、私たちは帰るわね！　聖にもいいお婿さん候補が出来た訳だしね」

「慧十さん！　さよなら！　今日のことは考えておいてね！」

二人が帰り午前を終了した事をつける時報が聞こえてきた。慧十が立ち上がり声をかけてくる。白い瞳は最初は怖かったがだんだん慣れが生じて来てもう何のことない。それに……それに慣れると少し彼の全体像が見えて来たから……。

「飯は何がいい？」

「何でもいいよ……食べれば」

「わかった。じゃあ、ピーマンメインの炒め物と白米な」「ピ、ピーマン。それだけはやめてくれ」

「えー、さっき何でもいって言ったよな？」

本当に回鍋肉を作り白米の入ったお茶碗をアタシの目の前に置いた。意地悪い所もあるらしい。彼の観察日記を付ける気はないが……なかなか彼の生体は面白いのだ。

「ピーマンが三種類……」

「いただきます」

アタシは大体のものは食べられるがただ一つ……宿敵ピーマンのみが食べられないのだ。口に入れた時のあの何とも言えない渋みが嫌で嫌で仕方がないから全部避けてしまう。本能だろう。

「やっぱりな……。やると思ったが見事にピーマンだけしかも緑だけ残したな」

「しかたないだろう……。嫌いなんだから」

「ほら白米と一緒に食べよく噛まずに飲み込むと渋みは出ない」

そう言つてアタシの目の前にご飯で包んだピーマンを突きだしてくる。ここまで来ると流石に食べない訳には行かない。恥ずかしいだが、悪い気もしない。

「仕方ない食べてやるよ」

「まったく、世話の焼けるお嬢様なことで」

笑いながら次々に口に入れてくる。アタシは赤ちゃんに戻った気分だったが何故か嫌ではなかった。彼の笑顔は……温か何故かそれがみれた時のアタシも笑っていた気がする。その後残りの春休みの機関にも数回NIGHT-KNIGHTに二人で行った。人気店らしくたまたま姉や妹と遭遇することもあったが楽しかった思い出の一つだ。慧十とであつて数日、アイツは入学式当日に誕生日を迎えアタシより先に16歳になった。そしてクラス分けでは早速別のクラスから始まってしまふのだ。

時差の恋のキューピッド！？

慧十とアタシが同棲？　を始めて数日が経過した。ついに学校も始まっていろいろと忙しくなっている。クラスが別れているがSクラスとAクラスは実は隣でよく顔は見るのだが少し遠い。だが慧十は休み時間に話しかけて来ることはない……。クラスの男子と話していることが大半だ。最近少し寂しいがそれも一時だった。放課後には慧十が迎えに来てくれる。少し恥ずかしいが嬉しくもあるのだ。最近はよくこんな感情になる……。何か暖かい気持ちに。

「そつえば聖ちゃん是谁とオリエンテーションやるか決めた？」

「オリエンテーション？」

「嘘お！　そろそろ気にしないといい男の子は皆取られちゃうよ」

「で、何をするの？」

「簡単に言えばスタンプラリーかな？　パートナーと一緒に回るのよ。まあ、だいたい女子はSクラスの緋皇君狙いかな？　内容は毎年違うから分かんないけどね。スタンプラリーなのは確定だよ」

「フーン……。アイツそんなに人気なんだ」

教室の入口がざわめいた。入って来たのは噂をしていた慧十だ。まっすぐにアタシの所に歩いてきて父親からの物らしいメモとそれに関係するらしいカードのような物を置いていく。慧十は帰りに教室にいるように耳打ちして帰って行った。彼が教室に入ってから出て行くまでにおよそ一分間。その間だけ男子の乱雑な喋り声も女子生徒の割高な話し声やマナーを考えないギャル系の生徒の馬鹿笑いも全て……。物音全てが止まり彼の室内用の革靴が立てるコツコツという音以外は……。止まった。

「帰りは教室で待ってて」

「あ、おう」

彼はとても上品な動きを取る。そんな動きを見ていると皆空気が止まるのだ。啞然とする竹華をアタシが気にせず封筒に入っているらしいメモを出しておられている物を広げる音を口火に男子は喋り出す。そのすぐ後にギャル最後に竹華を含んだ女子。彼女等は慧十に見とれていて我を忘れていたが……気付いたららしい女子生徒の面々から質問攻めにあつた。慧十の人気を浮き彫りにするには十分すぎたようだ。

「聖ちゃん！　なんで緋皇君と話してるの？」

「どつという関係なの！？」

「やっぱりオリエンテーションも緋皇君狙い？」

その声に通り返えるだけでも大変だった。アタシとしてはなぜそこまでアイツが人気なのかはわからないが話は合わせておいた。確かに美形でルックス、スタイルも良好で男子の中でレベルが高いことは認める。でも、性格はかなりひねくれている。だからアタシとしては少しくらい顔やスタイルに欠点があつたとしてもそちらを選ばべきだと思うのだ。

「大変だったねえ……。聖ちゃん」

「うん。慧十のヤツは何も考えずに来るからなあ」

「へえ……やつぱり下の名前で呼ぶんだ。なんか面白そうだし今度聖ちゃんの家に行つていい？」

「え、あ、うん。いいよ」

「うん、今度帰りに寄るね。私の家はお母さんもお父さんも単身赴任中だしお兄ちゃんもいないし」

さつきから話しているこの子は笹瀬　竹華という娘で最初にアタ

シに話しかけてくれたからそのまま仲良くしているのだ。彼女は小柄でかわいらしい。アタシもこれくらいだと良いのになと思った。これくらいで胸も平均より少しあるくらいで……。それくらいがいい。アタシは普通くらいがうれしい何事にも……。あ、けして欲が無いわけではない。でも、普通くらいがいい。

「竹華は慧十に興味あるの？」

「無いといったら嘘になるけど恋愛感情は無いよ」

「じゃあ誰？」

「そんなこと言える訳がないじゃん」

放課後にアタシはそのまま竹華と話ながら慧十を待っていた。そこに慧十が同じ位の身長の子を連れて歩いて来た。清閑な顔立ちのスポーツ系の男子だ。しかし、スポーツ選抜クラスのクラス証を付けておらず付けているのは普通科のクラス証だった。彼も美形と言えは美形だが慧十のタイプとは違うスポーツ系のカッコよさだ。

「待たせたな。聖、行くぞ」

「あ、ちよつと待つて」

「じゃあね！ また後で竹華！」

「うん！」

その時、慧十に促され後ろにいた男子が竹華に話かけた。その瞬間に竹華の表情が変わり戸惑ったようなあいまいな笑いを作った。顔は赤く耳にまでそれがうかがえる。アタシは直ぐに気が付いた。竹華が好きなのはこの男のようだ。名前が解らないが部活は髪の毛が濡れているから水泳部なのだろう。

「笹瀬さん清名さんの家に行くの？ よければ送ろうか？ 俺には脚もあるし」

「へ？ え、そうなの？ ありがとう」

男の方も明らかに緊張と恥ずかしさから固まっている。清純というか純情というか……そんな男は周りに意識を集中させられないため慧十がアタシのために紹介してくれた。ホントに泳ぐために産まれて来たような名前だ。正直……驚き。

「コイツは魚街 泳って言うんだ。で、一応ある条件のもと俺達の家に連れて行くことにした訳さ」

「じゃあ……仕事関係か」

「ああ、ちよつと理由があるが俺が面倒見ることにした」

そんな話を竹華と泳の前で話ながらアタシ達はグラウンドの横にある駐輪場のバイク置き場まで歩いた。

「やっぱりそのスポーツタイプのバイクはお前のか、泳」

「そういうフル装備の大型もお前のやつだったんだな。慧十」

慧十の後ろにアタシが乗り魚街のバイクの後ろには真っ赤になった竹華が乗った。学校から見て慧十と聖の住んでいるアパートは北側にあり小さいが傾斜が大きい山がある。そこを抜けると直ぐに居住区が見えてくるのだ。アタシは都会はあまり好きではない。だから父親に無理を言っ山向こうの中規模居住区に住んでいる。

「着くぜ！」

「わかった！」

手を振りながら合図をしアパートの近くでスピードを落とす。そして直ぐに着いた。

「へえ……。ここか私の家に結構近いね。」

「そうなの？アタシ達の部屋は最上階の一番広いやつだよ。服もあるし泊まってく？」

「いいの？」

「慧十さえよければね」

「俺に振るなよ。俺は泳を泊めるつもりだったがな」

結局、魚街も竹華も泊まることになった。魚街は昔からの慧十の知り合いで相談したいことがあり来たらしい。竹華も同じだ魚街の名前を出すだけで顔が真っ赤になる。そういう竹華の態度から直ぐにわかってしまうのだ。

「でも、ビックリだよ。聖ちゃんが実は緋皇君と同棲してたなんて」「まあ、成り行きなんだけどね。確かにアタシは慧十のことは嫌いじゃないけど正直何か釣り合わないさ。アタシと慧十」

「そんなこと無いよ。だって緋皇君は指輪までくれたんでしょ？」

「なんで指輪のことを……」

「やつぱり！ってことは彼相当なお金持ちの息子じゃん！」

「だから、アタシじゃ釣り合わないのさあ……」

そんな話をしながらアタシと竹華は盛り上がっていた。アタシが作った服の話やアタシ自身の話、主に胸と慧十との関係などと学校のオリエンテーションのについて沢山話した。

「しっかし久しぶりだな。慧十、お前と会うのは二年の全中ぶりか？」

「そうだな。俺が水泳を辞めたのがその頃だからそうだろう」

「で、聖さんとは付き合ってるのか？」

「いや、向こうが慣れてくれるまでは付き合わないつもりさ」

「ほう。だがよ、今回は俺の相談を聞いてくれるんだよね？」

テレビゲームでシューティングをしながら、最初は慧十とアタシのことを話していたらしい。アタシ達はその頃は慧十からもらったダイヤの指輪について話していた。そして居間に四人で集まり次の週にまで近付いたオリエンテーションの話をし慧十の押しの不振感からアタシも気づいてしまった。どうやらこの二人は知らないだけで両思いらしい。知らないとは恐ろしいことだ。

「慧十は誰かと行く予定は有るのか？」

「俺は聖と行くつもりだったけど」

「ふえっ！いいの？アタシなんかで！」

「……………和みますなあ」

「うん、和むわねえ」

「ちよつと二人とも！」

「そうだ忘れる所だった。泳はこのあと仕事の割り振りがあるからついでに笹瀬さんを連れて来な。今日はみんな私服だしあんまり目立たないはずだから」

「わかった。これから頼むよ」

「ああ、一応家庭の理由ってことでシフトは普通のランクに入れておいた。学校の連中に気どられるなよ」

「わかってるよ」

慧十の案内で四人で店の裏手に行き従業員用の駐車場にバイクを置いて二人を案内した。今日のイベントは『一般庶民になってみよう』らしい。この店の客は大抵どこかのお嬢様や御曹司であまりそういう服装をしない人が多い。

「ホントにここ緋…ごめん。夜井君の店なの？」

「ええ。その通りですよ」

アタシたちは広いホールの側面に連なる店の一角にある喫茶店で話している。アタシ達四人の服装はかなり派手でそれぞれが際立っている。慧十は黒を基体とした服装をしていてそれに対する用にアタシは白を基調にしたミニスカとパーカーだ。魚街は紺色のシャツに黒っぽいジーンズ、竹華は薄い緑のワンピースの上に白いジャケットを着ていてジャケットの下の方に緑の唐草が刺繍してある。

「皇太さん？ 俺も言葉使いを変えないといけないんですか？」

「当たり前だ。それから笹瀬さんの誕生日を聞いておけよ」

「わかってます」

「二人で何をコソコソしてんだ？ 慧十！ アタシには秘密は無しだぞ！ あっ！ 聞かなかった事にする気だな！」

喫茶店で話した後に慧十はアタシを連れて他のエリアに行った。もちろん、竹華と泳は同行し他の所に行ったようだ。

「やっぱり気づいてたんだ。皇太もあの二人のことに」

「当たり前だ。俺はアイツにそのことで相談されてたんだ。それにバイトのことも絡んでたからな」

皇太がニヤニヤ笑いながらカタログを見ている。今、いる店は前回、慧十が指輪をオーダーしていた所だ。そこにタイミング良く泳からメールが届いた。確かに魚町の性格なら解りやすい気もする。うん……。確かにおおちゃくだ。

『七夕』

この一言が書かれたメールが届き慧十が呆れたような声を出して直ぐに受け付けに歩いて行った。アタシは何かはぐらかされてるよ

うで気に入らないがそのままついて行つた。

「ふう……………。全く横着なヤツめ。さあてやるかあ」
「何をするんだ？」

その頃の泳と竹華は…………。

「ごめんね。俺、水泳しか出来ないし趣味がなくてこんなとこに連れて来ちゃったけど」

「いいの。気にしないで。私も懐かしいの…………。昔ね、私も水泳やってたから」

彼らはショッピングモールでいろいろと買っていた。そして時間は過ぎ夜の0時を回り慧十とアタシは作業を終え取りあえず二人と合流し家に帰った。そして朝に…………。

「聖…………。ちよつと協力してくれ」

一言呟くとアタシの前にちよつと顔を重なるような形で立っていた。つくづく思う…………。この男は相当な策士だと。アタシまで使ってくるのだ。人の気持ちも知らないで…………。

「……………」
「……………」

お互いを見て真つ赤になっている二人をよそに慧十はクスクス笑いながらアタシの目を見ている。あまり感心は出来ないけど…………。でも、二人にはいい刺激になるだろう。アタシの事を考えてくれないのはどうかなと思うが…………。

「さて。明日は学校だぜ？ 両家の親にも許可取ったし真下の部屋に移る準備しときなよ。二人とも」

「どういうことだよ！」

「ごめんね。魚街君、私がお願いしたの。家は両親ともアメリカに単身赴任だしお兄ちゃんも結婚して家を離れちゃったから。寂しくて」

ここでも策士、慧十が一枚かんでいるようだ。竹華が少々演劇じみたことをしていたから魚街の方は完全に騙されて？いたが結果的には上手く行ったのでよしとしたところだ。アタシは慧十に策略の一部として使われ少し腹立たしいが二人きりになるまでは我慢しよう。

「よし。二人とも頑張つてな。俺が協力出来るのはこれが最後だから」

「ああ、ありがとな。今回もお前に世話になつちまったがこんど借りは返すからな」

「それから“これ”はオリエンテーションの後で渡しな、それが一番いいと思うし」

「何から何まで悪いな」

そう言つて慧十は階段を上がりアタシ達の部屋に帰ってきた。少し不機嫌なアタシに気付いたらしく更にニヤニヤしながら横に座った。策士というがここまで来ると嫌がらせでしかないと思う。いろいろやられはするが……ここまで来ると……。

「どうしたの？ まさか朝のことでそんなに怒ってるのかい？」

「ばつ馬鹿！ そんなわけあるか！」

アタシは後から気付いた。完全に慧十のペースに乗せられている

ことに慧十が策士だということは重々承知してた。なのに……。またしてやられてしまったようだ。はあ……………。

「じゃ、今する？」

「ふえっ！？ なっとななな何を！」

「キス……………」

「そんなっ……………へっ？ 顔近いよ……………」

次の瞬間アタシは慧十にデコピンされ目が覚めた。そして憎らしい一言を最後に笑いながらその場を離れて行った。アタシはそのまま顔を赤くしたまましばらく固まっていた。

「可愛いね。聖は……………」

憎らしいがその策略にはまってしまった敗者には何もいう権利は残されていなかった。アタシは少し落胆も覚えながら首に提げているダイヤの指輪に触れて一言、慧十に聞こえないようにせめてもの抵抗をした。

「馬鹿……………」

そして、一日が円満に終わりついに新しい一週間が始まった。この週は“パートナー争奪戦”と呼ばれていて各自配られたネームプレートをパートナーと決めた相手に渡しに行くのだ。アタシはもちろん受け身状態で待っている。あの策士はすぐにアタシの所に来ると踏んでいたからだ。しかし、昼放課まで待つても来ないのだ少し不安になったが理由はすぐにわかった。策士も水攻め……………いや、人の壁に合えば外に出られないようだ。

「相変わらず凄い人気だねえ。緋皇君、あれは教室を出られないよ

うにするバリケードにしか見えないね」

「うん……。少しほっとしたかも」

「やっぱり聖ちゃんは緋皇君のことむがっおお！ ひひりひゃん！
やへへよ！」

その先の言葉を言わせないようにしながらアタシは竹華の口を覆った。そして、放課後にアタシのところに来た。少し疲れた様子の慧十にすることは一つ！昨日の仕返した。

「ねえ……。慧十！ アタシが怒ってる理由……。わかるよねえ？」

「プレートだろ？」

「そう……。じゃあ何か償いをしてよ」

「いいよ」

アタシもからかうつもりで慧十の首に腕を回し背伸びをして顔を近付けた。その時に少し油断などしなければ……。うん、油断なんてしていなければ……。

「バレバレだよ。聖……！」

「いてっ！」

またもデコピンをくらいアタシが負けてしまった。しかもアタシの手の平にプレートを置いて反対の手を取ったと思ったら今度はその手にキスをしてきた。アタシの理性と精神がついて来ないのがとても悔しいが……。敗者にはいう資格はない。三回目だ……。そろそろ正直になってもいいのではないかと思う。

「聖ちゃん！？ ……お邪魔だった？」

「いや！ 全然！ これっぽっちも！ 大丈夫だから！」

慧十はなんのフォローもせずにただニコニコしている。最近はこの四人で帰ることが多い。アタシ達と同じマンションに住んでいる二人だから交友も多いしよく遊びに行ったり来たりしている。今日はアタシが竹華の家に泊まり魚街がアタシ達の家に行くのだ。

「でも、緋皇君って大人しく見えただけっこう大胆だね」

「慧十は何も考えてないただだよ。アタシなんてずっと慧十に乗せられてるしさ」

「確かに策士だよねえ。でも、あんまり女心はわかってないよね……彼」

「確かに」

その頃の慧十達は……。

「ハックシュッ！」

「風邪か？」

「いや、下の階で噂されてんだろ」

「そうかもな」

そしてアタシ達。

「竹華はなんか進展あったの？ 魚街とさ」

「ううん。これと言って無いかも、彼が遠慮しちゃって私の部屋に来てくれないし」

「なんかさ……。いきなり話題とんだよね？ 取りあえず告白したかされたか無いの？」

「？……。うん、私も受け身だし泳君も受け身だからあれから進まなくて」

もう一度慧十達に……。

「ハックシユイ！」

「これで確定だな俺達の噂してるな下の階では」

「違うないね。さあ集中しないと死ぬぜ！」

「大丈夫だつて泳……お前よりへたくそなヤツはあんまりいないから」

「……………」

更に日が進みオリエンテーション当日。内容が発表された。スタンプラリーなのは本当に当たっている。校内にあるチェックポイントでスタンプを集めゴールした順位を競う物だ。アタシはあまりこういう物が好きではない。慧十はかなり得意そうだがなにがお題かわからない以上不安なところがあるようだ。

「ねえ、視線が痛い」

「そうか？ 柔らかい視線ばかりではないが暖かい視線も多いと思うが？」

それもそうだ。三年生から一年生まで慧十の人気は高いらしい。竹華の情報では三年生の先輩の告白を断つたらしい。それ以外にもいろいろな情報を持っている竹華からかなり情報を手に入れた。今日のオリエンテーションの内容まで。

「聖ちゃ……ん！ いたいた！」

「竹華！ どうしたの？」

「オリエンテーションの内容を手に入れたよ！」

「はあああ！？」

内容はレジャーのようなものだったが必ず仕掛けがある。通るのは広大な学園の敷地内を駆け巡るのだチェックポイントは5つで順

番は自由に回っていいらしい。

「なら。進路は決定だな。場所から考えて運動とかではないらしいな一番近いところから潰して行こう」

「じゃあ、本校舎、武道館、課外塔、日の目灯台、正門かあ。けっこう歩くね」

「しょうがないさ。だが近道は出来る」

号令と共にスポーツ選抜の体力のあるチームが走って行く。その頃アタシ達一向はあることを逆手にとり車庫に向かった。

「急がば回れってな。行くぞ！泳！」

「ああ！後ろ二人は頑張って付いて来てくれよ！」

アタシ達は留意事項の中に乗り物のしよう禁止が書かれていないことを利用し道を皆が使う道をそれて走ったのだ。そして我等が天才慧十が問題を難なく解いてくれるから割合スムーズに一発目はクリアした。

「次は何なんだよ！」

「さあな！　だが二番目からは走りはしないが体育関係が含まれる」

二番目は意外と難なくクリアした。二、三年野球部が固める守りをパートナーと一緒に崩すのだ。

「ほお。これなら行けるな。泳！　準備はいいか？　女性陣がゆつくり走れるようにでかいの飛ばすぜ！」

「何でお前はそんなにキザなのかねえ」

野球経験はないと言う慧十。しかし、綺麗な弧を描き五階建ての校舎の屋上に乗せてアタシを走るように促した。

「綺麗にいったねえ。全くアイツは何者なんだか」

「そうねえ。彗星のように現れて消えて行った。伝説のスイマーか」

「ふう……。そうなんだよって……。なんで知ってるの!？」

「私も二年前までやってたのよ。水泳を」

次は竹華と泳のペアが挑戦した。バッターは竹華が勤めランナーは泳だ。竹華は小柄で頼りないくらい幼い少女だ。見た目は……。

「いつくよお!」

「わかった!」

ギャップが恐ろしい。この竹華の運動能力はよくできる男子なみだ。慧十の弧の更に上を描き校舎を抜け反対側にあるプールまで飛んで行く。

「やっぱな。五区の女王はだてじゃないか」

「何それ!」

「あとから説明してやるから今は我慢しな」

次の課題は慧十がクリアしてくれた。校舎の屋上に構えた数個のエアガンの内一番狙撃には向いていないはずの拳銃をとった。しかも、何もゴーグルなどの補助具を何も着けず一番遠くにあつた風船を撃ち破った。

「はあ……。おかしいよな。あんなのは」

「確かにね。アタシもアイツの人間らしからぬところには驚かされてばっかよ」

竹華もなんとかクリアして第四チェックポイントにきた。どうやら順位は高めらしい。体育会系の連中が多いが調理室でかなり苦戦していた。アタシ達も見た瞬間に絶句したがこのオリエンテーションが一日かける意味がわかってきた……。普段授業では出来ないことを評価するのがこのオリエンテーションの目的だ調理室の各ブースは白い壁で仕切られ回りを確認出来ない。そこから推測し慧十が竹華に何か囁いている。そしてアタシに向き直り直ぐにブースに入った。

「やっぱりか。これは材料から料理を当てる競技、さあてと俺が全部やるから」

「ありがとうございます……。こんどから練習します」

「取りあえず隣に合図しておいて」

隣も同じようにこちらに合図をしてきた。そして料理の完成もほぼ同時だったし審査も同時に終えそのまま通過した。入れ替えのうちに次々にこの難題をクリアしようと現れるペアを後ろに最後のチェックポイントの灯台に向かった。

「行けよ！ 計画は完璧に遂行してこそだ！ 失敗しては意味がないからな？」

「サンキュー！ じゃあ行くな！」

慧十が速度を緩め二着でゴールに入った。一位から順に自由行動だ。泳は慧十に指定された場所にいき慧十の指示を待っていた。

「ねえ。竹華は中学の大会はどこまで行っただの？」

「名前……。うん、私は一年の時に全国に行って……。その後に怪我しちゃって二年前に引退だよ」

「何位？」

「優勝だったよ。懐かしいねえ。あの頃は話しかけようとしても恥ずかしくて何も言えなかったの」

「もしかして……。五区の女王って……」

「そう。今は違っけど私だよ。今更だけど私ね泳君のことが好きなの」

「え……。……。ごめん。思考回路が……」

「やっぱり……。だめ？」

「そういうことじゃなくて！ 嬉しくてなんか……。そうだ！ 渡す物があつた」

慧十とアタシは海岸の上にある一段高い崖の上から見ていた。思わず納得してしまつたがこの甘い状況を見ているアタシは赤面せざるを得ない状況だ。その後は……。

「渡す？」

「そう。渡すものだよ。慧十の店にはしきたりがあつてね。なんか慧十のお袋さんが始めて慧十の親父さんの店に行った時に親父さんがプロポーズをしたんだとさ。誕生石の指輪を渡すのがそれからのしきたりらしい。だから清名さんもダイヤを持ってたのさ。慧十の誕生日は四月四日だから。でも、交換するのはアイツが勝手にはじめたらしいが」

「でも、こんな高そうな指輪……」

「大丈夫だよ。アイツが給料くれたしその点に関してはね。オレ達も交換しない？」

「うん……。嬉しい」

アタシが目をそらそうとすると慧十がアタシの頭の上に手を置いて話かけてきた。

「見てやれよ……。親友だろ？」

「~~~~~っ！ はあ……。わかったわよ」

こうやって自分が恋をする前に友達の恋を成就させるのも恋愛小説のようで悪くないな……。と思ったアタシ。二人はその後には幸せそうな生活をしている。アタシは見ていただけで少し羨ましいが相手が居ない以上なにも進まない。アタシも早く見つけなければと思ってしまう常日頃だった。

自分に正直に……

オリエンテーションが過ぎてアタシは慧十といつもと変わらない生活をしていた。ただ、最近は慧十と家ですごすことが多い。アタシの部屋に慧十がいたりアタシが慧十の部屋にいたりする。それにたまにアタシが起こす事件も面白いらしい。その他にも変化がありアタシの中では慧十は友達以上恋人未満のエリアにいる。けど、アタシ自身がとんでもない方向に突っ走ってしまうことがありたまにその枠を越えてしまうのだ。日常の中にはそういう要素が多く含まれていて慧十は相変わらずアタシをからかって楽しんでいる。

「で、調子はどうなんだよ？ 竹華」

「うん！ 聖と慧十君に負けないくらいラブラブだよ！」

「だから、アタシ達は付き合っていないから……」

「えゝ？ でも知ってるんだよぉ？ 慧十君にむがんあ！ やめふえひよ！」

「その先はNGワードだから言わせない……」

「ぷはあっ！ だってホントのことじゃん！ この前の事故？ もさ」

「竹華……。お前慧十の策士病が移ったか？」

「俺を病原体みたいにい言うなよ……」

「けっ…慧十！ あわわわ……」

「『わかりやすいわね。聖ちゃんって……慧十君』」

「『そうでしょう？ だからからかい概があるんですよ。』」

今日は慧十の店に遊びに行く予定だ。しかし特にイベントはなくまたもドレスだ。少し気がめいる……。だが、何故か楽しみだ。学校ではアタシと慧十の関係を疑う人も多くなってきた……。同棲くらいバレても問題ないがそのあとが怖いからあまり詮索はされたく

ない。そして、アタシの立場を守るために策士、慧十は店を上手く使い始めたのだ。

「慧羅お嬢様。ようこそおいでくださいました。」

「うん。時間もあるしまた来ちゃった。皇太いる？」

「はい。少々お待ちください」

わざと学園に出入りしている生徒に見せつけるのだ。別人のように見えるアタシを見れば誰もがこの『輝織 慧羅』が実在する人物とみるからだ。そのためにわざと自分の正体をあかして今では学校で一番の人気の男子だろう。アタシはその男と一緒に生活している訳で……。

「お待たせしました。お嬢様」

「うん」

「最近はこのシステムに慣れてきたご様子でなによりです」

「へへ、皇太のおかげかな？」

「ありがとうございます」

そこに竹華と泳が現れた。慧十は綺麗に一番上までボタンを閉めネクタイをし服装を整えたほうが似合う。だが、泳はどちらかと言うとラフなほうが似合うようだ。ネクタイを緩めボタンの一番上をあけ上着のボタンは全開だ。

「またか……何度注意すれば気が済むんだ。ボタンは閉めてネクタイもちゃんと整えろ」

「げっ……！ 見つけた！ ヤバ……」

泳は慧十に頭が上がらないのだ。アタシの目はそんなことよりも竹華の方に釘付けだ……。アタシはあまり露出は好まないのだが今

夜の竹華はかなり大胆で派手に決めている。そこに竹華が近寄って来て悪戯にアタシに耳打ちした。

「フフフ。そろそろアタックしないと他の娘に持ってかれちゃうかもよ……。彼、最近はこの店のオーナーだっことが人気に拍車をかけてるみたいだし。アタシが聖の恋敵ならほっとかないよお。慧十君のこと」

「ばっ馬鹿！ アタシはこれっぽっちもそんな気は……」

事實は気になる。だが告白のきっかけは無いし何故かモヤモヤしたものが遮ってアタシを止めているのだ。早くしなければいけないことはわかってるのに……。その夜は慧十の妹の雲英やアタシの姉の成果と妹の那流にもあった。そして今日は金曜日だ。直ぐに引き上げて家に帰り居間のソファに腰掛けてチョコレートを食べていた。

「ふう。なんであんなに露出してて平気なんだろうなあ？ 慧十はアタシが露出してると嬉しい？」

「俺は聖と要られればそれでいいさ」

「ふーん。で、今回は誰からのラブレター？」

「三年の先輩だよ」

慧十は少し肩を落としたがその時のアタシには何故か理解できなかった。アタシは最近流行りのドラマを見ては涙を流し慧十に同意をもとめている。その後事件が起きた。アタシが注意していれば起きなかった事件なのだが……。その事件は前回も同じような開きで起きている。

「慧十お！ この瓶に入ってるのってジュース？」

「見ない事にはわからんが……って言う間もないか」

「慧十も飲む？」
「頼む」

アタシは気付かなかった。この瓶に入っていたのがお酒でアルコール度は低いもののアタシはお酒に弱く前回起こした事件もお酒が絡んでいる。お酒入りのチョコレートを口にしてしまったが最後アタシの記憶はない……。

「はい。これね」

「ありがとう。お前は早く寝ろよ？最近体調悪そうだしな」
「いいじゃん、金曜日と土曜日ぐらいさ」

そう。飲んでしまったが最後、記憶はないはずだった。

「ヒック……。はぁ……。ねえ、慧十お！アタシってそんなに魅力ないの？」

「は？お前何を言って……。まさか！」

「もお！はつきりしてよお……。アタシのこと好きなの？それ以外のの？」

「まったく、酔っ払いにいう言葉はない！」

「にゃにおお！いつも何考えてるかわからないヤツのくせに！このムツツリスケベ！」

「……………」

ここまでの記憶は曖昧だがこの後から明確に覚えている。慧十は何故かお酒に強く酔っているところなど見たこともない。それなのに……。アタシは肩を押され記憶がはつきりしてくる。慧十の整った美形の顔は……。どちらかというとテレビに出てくるアイドルに近いかもしれない。

「後悔しないよな？」

「へ？ ……何が」

「もう口を開くな……」

前はアタシの記憶がないから竹華に聞いたがこの前は慧十に迫って行ってキスをする直前に慧十によって眠らされたらしい。だけど今回は記憶がはつきり残ってしまった。慧十がアタシを押し倒して顔を近づけてくる。付き合っているのならこれは甘い夜という事で許されるのだろうか……。アタシ達はまだ……。

「ちょっと慧十！」

「ぷっ！ やっぱりな。こんなじゃダメだ……。笑いが止まんないや。それもう飲むなよ」

「ふえ！？ あ、うん」

完全に酔いが覚めた。慧十の灰色と白が混ざったような色の瞳が数センチの所まで近付いて来た。それだけでも……。そちらによつてしまいそうだった。別に香水やそういう芳香系の物を使っていないのにいい香りのする慧十……。ここまで来ると流されてしまいそうだ。

「早く寝ろよ」

「うん、おやすみ」

慧十は店の売上の整理などをしている。パソコンではなく手書きだ。綺麗な字で綴られたその帳簿は少し黄ばんで汚れていたが綺麗な装飾がしてあった。何なんだろう……。一応は聞かないことにしたが……。気になる。あれはお父さんからもらったのだろうか。実は……。あれをアタシも見たことがあるのだ。

次の日

「どうした？　なんか変だぞ……」

「『バレバレなんですけど』」

「ねえ……」

「な、何でもない。泳君って今日は非番なの？」

「へえ……やっぱり器用だよねえ」

42

「ん……。ありがとう」

「どういたしまして。早く課題終らせろよ？」

「ひぐつ……」

慧十の性格は今でもよくわからない。厳しかったり優しかったり……ときに可愛いなど沢山の顔がある。そしてアタシは昨日の慧十の言葉が気になっていた。

『こんなんじゃないダメだ……』

少し心が痛いはまだ何がダメなのかわからない。それにその前の『後悔しないよな？』もかなり気になる。

「ねえ、慧十はアタシの何がダメなの？」

「いきなりなんだよ……。俺がいつ聖がダメだって言った？」

「昨日の夜に……」

「あれか……。まあ、確かに説明しないとわかりにくいかな。あれは「どういうこと？」

慧十が細かい堀込をしながら答えてくれた。

「何がダメかと言えば空気の物かな？ あれだと俺が聖を襲ったかんじだろ？ だから嫌だったのさ。俺は全てを聖の思うままにつて決めたのさ」

「……………。よかったあ」

「よくねえよ。これから絶対にお前はアルコール禁止な」
「気をつけます」

アタシは決心した。告白まで行かなくても昨日の続きをすると。何故かと聞かれればアタシにもわからない。だけど、そうしたい。

夜になるのを待ちアタシは作戦を実行に移した。

「慧十！」

「どうした？ ……うわっ！」

慧十は見た目は細身だがかなり筋肉質でガツシリしている。まるで兵役に行っていたかのようだ。だが、けてそういう訳ではないらしい。その慧十を押し倒すのは一苦労だ。そこでアタシは不意についてソファに座ったところを狙った。

「おい、おい……。昨日とは逆か？ 俺は別に後悔しないけど聖はどうしないよな？」

「昨日は生殺しにされて寝着けなかったの！ そのぶんの責任とつてよ」

「責任か。それくらいならいいだろう。だが、言っとくが俺は一切お前に手を出してないからな」

「うん。アタシが出した」

結局慧十の上に乗った状態から普通にキスをするだけでアタシは飛びあがった。恥ずかしいのとか嬉しさのような気持ちがありその後は何を言われてもアタシは慧十と顔を合わせて話すことができない。

「聖！ 出てこいよ！ 飯だぞ！」

「うっ……。持って来て……。部屋の前に置いておいて食べたらまた置いとくから」

恥ずかしくて死にそうなアタシだった。決意した時にはあまり感じなかった感情が次から次へと湧き出てきた。制御もつかないし整理も出来ない。

「にやあああああ！」

「大丈夫かよ……。聖のやつ」

波乱を含んだ非日常的な休日を通じたアタシ達は学校では普通に過ごしていた。ただAクラスで新しく出来た親友と呼べる友達には何故か慧十と別れるようにすすめられた。彼女は慧十のことを知っているようだ。

「え〜！ 慧十ってあの緋皇 慧十のことだったの？」

「そうだけど。なんで？」

「アイツはダメ！ アイツは絶対ダメ！」

「何でよお！ アタシは慧十君と聖はかなりお似合いだと思うんだけど」

「ダメ！ ダメ！ ダメ！ ダメ！ アイツの正体知ってるの？ どの出身かって聞いたら身震いするわよ！ アイツは……」

「大林 美雪。大林組の一人娘でAクラス次席、口煩い批評家で俺の幼馴染みの一人にして現在二年の小森 息吹先輩に片思い中の一途な女の子、その先は言っではいけないエリアんだけどなあ」

「アンタ後で首洗って待つてなよ？ 西極流の極みを味合わせてあげるか……。って最後まで話を聞けい！」

「聖。今日はバイクの所にくれ理事長に呼ばれてるからな」

「なんかしたの？」

「いいや……。この猪突猛進を助けた時のお礼状が大林組から来たらしくてな」

「ふん！ 助けなんかいらなかったのよ！ あんな奴らに」

何やら盛んに毒を吐こうと試みている美雪に対して至って普通に

返している慧十。アタシは土曜日の事件からまともに顔が見られない状態が続いている。因みに泳はAクラスにはあまりいないが今は竹華のお供で竹華の後ろにいる。そして、慧十の視線がアタシに戻って来て直ぐに手をふり自分の教室に帰って行った。

「聖！ 気を付けろよ！ アイツの正体を知ったらホントに度肝を抜かれるからな！」

「うん……。わかった」

このように慧十に口喧嘩で勝てる者はそう居ない。アタシも結局慧十に負けいつも負い目を見るからそんな命知らずなこととはしない。だけど喧嘩ご紹介で接しなければ慧十は優しい奴だ。アタシの都合に合わせて動いてくれる。最近は買物などにも付き合ってくれしあんまり口に出して言えないことも頼めば条件付きでやってくれる。例えば宿題とか……。だけどわからないのは慧十の中でのアタシの位置だ。

「慧十？ アタシってさ慧十の中だとどのくらいの位置に居るの？」
「急に变なこと聞くなよ。そうだな……。しいて言えば大切な人かな？」

「ん……」

慧十の言うことはたまにアタシを暴走させる。アタシは出会って数週間前のこの慧十という少年無しではもう生きて行けない気がする程に彼にのめり込んでいた。性格がこんなひねくれて正直に物を言えないアタシだけど実は……。本当は……。

「慧十！」

「こら！ それはダメだ。早い、アルコールは早い！ 早すぎるから止めなさい！」

「問答無用！ 気分がいいから飲むの！」

「やめてくれ！ 後の処理がっ……。やりやがった……」

「慧十お！ 寝よ……」

記憶が曖昧になりその先の記憶はない。だがアタシは自分の部屋に寝ていて慧十は居間で疲れたように昨日アタシが開けたボトルを空にした状態で寝ていた。アタシがまたも暴走したのが原因で慧十を疲れさせてしまった。それなりに楽しかった気がするから結果オライ！ って感じで済ましたアタシでした。

.....

次の日

.....

慧十は何やら怒っていたが気にせず今日も登校した。最近、まあここ2日ほどアタシは慧十にもらった指輪のペンダントを首から下げ人に見せるなどはしないが常時つけている。この学校は異文化尊重だか何だか知らないが過度に行き過ぎや非行がなければ指輪、ピアス、ペンダント、その他アクセサリーやペイントも数個のルールさえ守れば使ったり体においていても問題ないのだ。アタシもそれを利用し慧十からもらった指輪を首に提げている。

「慧十？ どうした？ 顔色悪いぞ……」

「聖？ 昨日の記憶の最初の部分と最後の部分を繋げて考えてみな」

「ごめんなさい……。調子に乗りました。以後気をつけます」

首筋に慧十の中指が触れアタシは背筋を伸ばした。慧十必殺の嫌がらせだ……。アタシに対してはけっこう大胆なところまで進めるようにつてきた。

「ちょっと！ やめてよ！」

「お仕置きだよ。昨日は大変だったんだから……。聖が酔っ払って、そのあと部屋に連れて行くの」

「うん。またアタシ何か恥ずかしいことしたの？」

「全力で阻止したよ。何をしようとしたかはNGワードだから言わないがな」

そのまま下駄箱に向かい今時、見ることは珍しい物をまた見る事になった。

「またか……。相変わらず凄いな」

「まあ、嬉しくないけどな」

そういつてアタシが下駄箱をあけると……。

「ふーん。人のことは言えないだろ……」

「ハハハ。ホントにあんまり嬉しくないな……。まさかアタシまで」

竹華の情報では“慧十とアタシが付き合っている”という噂が消え人氣が急上昇したらしい。その他にもフリーだなどと背鰭と尾鰭、それに加え、学力のことも加わり更に腹鰭がついた感じた。全く嬉しくないしむしろ迷惑になっている。

「おはよ！ 聖と慧十君！ 今日も早いねえ」

「そっちの魚街夫婦もいつもどおりテンション高いね……」

「理由はやっぱり人目を避けるため？」

「ああ、俺はともかく聖は騒がれると面倒だしな」

「いや、あんな紙の束が毎朝あるなら慧十とチャホヤされたほうがいいかも」

「キヤー！ 聖さんが問題発言！ 慧十君はどうなの？」

「聖に任せるよ。まあ、俺も手紙でコソコソされるよりは面と向かってのほうが楽だしな」

「と、言っておられますが聖さん？」

竹華がここぞとばかりに声に抑揚を付けて実況をはじめた。アタシは正直に言えたらいいのに言えない。と心の中で何回も呟いていた。

「むう……」

露骨に顔に出たらしい。たまたま近くを通りかかっていた美雪まで来てしまった。彼女は身長は小柄だが女子にしては筋肉質でかなりパワーがある。拳法の達人で諸に攻撃を受ければ大柄な男子でも一発でノックアウトだろう。

「何をしとんじゃあ！ 緋皇 慧十お！」

「いきなりハイキックは無いでしょ？」

美雪が放った蹴りは慧十の手で楽々止められ彼はすぐに足から手を離していた。

「くっ……。また、アンタは聖をたぶらかしてんの？」

「は？ 別にたぶらかしてはないだろう。俺は聖に任せるし、それ以上のことは求めてないつもりだが？」

「にやああああ！ フワアア………」

慧十がものを言う度に恥ずかしくて仕方がない。慧十はアタシを待っていてくれるのにアタシは全然はつきりしていない。これまで慧十が来てから大変だったり恥ずかしいことは沢山あったけれど退屈だったり悲しかったりしたことは一度もなかった。なのにアタ

シはずっと慧十を待たせている。どうしたら……。

「美雪ちゃん。おいたはその辺にしといた方がいいよ。親友の清名さんは完全に困惑してるし、まわりも気にする。ここは俺に免じて落ち着いてくれないかな？」

今話題に入って来て美雪を止めたのは小森 息吹だ。二年のスポーツ選抜クラスでもトップクラスの生徒であだ名が“鉄人”文武両道を座右の銘にし二年の主席だ。ちなみに慧十は一年の主席。

「ありがとうございます。息吹さん」

「なに、礼を言われる程のことじゃない。俺はお前に剣道部に入っ
て欲しいだけだからな。下心丸出しだから改まっていわれると困る」

そんなこんなでアタシの心中は穏やかではない。伝えたいのに伝えられないもどかしさで沈みきっている。授業も手に付かず食欲もあまり湧かない。ストレスばかりがかさなり日に日に疲れが目に見えてきた。そんな生活が続きついに6月も終わり7月初旬学期末テストが始まるころに更なる危機がアタシに訪れた。ライバルと言っているのかは別にしてアタシに戦線を布告してきた人間がいたのだ。名前は夏海 扇華といい、院麗クラスのお嬢様だ。アタシはいつたいどうすれば良いのだろうか。そして慧十はどちらに付く？ アタシの生活はどうなってしまう運命はどうなって行くのだろうか。

ロストシーフ…姫様の恋心

一学期期末を終えアタシは少し慧十と近付いた。ある意味で少し不安にもなったが結局はいつもと変わらない日々を手に入れたのだ。アタシが勝手に悩んでいるあいだに行動力のある敵が現れアタシは正直言つて闘えるほど強くもないし度胸もなかった。それが原因でアタシは大好きな人を傷つけてしまった。だから、アタシも心に決めた。

いつか……きっと伝えようと。

「聖、悪い知らせよ。ついに一人院麗クラスのお嬢様が実力行使に手を付け始めたわ。まずいわ……相手が悪すぎる。なんでこんな時に……」

「……………」

そう、その人の名前は夏海 扇華。院麗クラスでプライドが一番高いと有名でしかも超大金持ち。ただ一つ珠に傷なのが馬鹿だということだ。いくら金があっても本人の性格や特徴、気質は変えられない。それが諸に出た形となっている。

「で？ それをアタシにどうしろと？」

「慧十君取られてもいいの？」

「取られてもって言うか……。慧十が望むならそっちのほうがいいんじゃない？ お金持ちなんですよ？」

「はあ……。わかった。じゃあ慧十君の思いを裏切るんだね……」

もう、その話は終わり！」

「うん……」

正直に言えばかなり混乱した。これまでこんなことはなかったし考えたこともない。それに相手は実は顔見知り……。かなり気まずい雰囲気の中かで更に声のトーンを落として竹華が聖に声をかけた。

「聖……。まだ気づいてないの？ それともあなた私があなただの正体に気づいてないとも思ってた？」

「じゃあ……」

「うん。大分前から知ってたよ。オリエンテーションの直後くらいに気づいて調べたの。そしたら貴方がヒットしたから」

「バレてたんだ……」

衝撃の事実が二つ明らかになりアタシの困惑は深まるばかりだ。まずは慧十のこと、次にアタシの正体が……。バイクに乗っている時に勇気を持って聞いてみた。

「慧十……。アタシのことホントはどう思ってるの？」

「……。大切な人って前に……」

「嘘。だったら何でアタシに対してそういう素振りを見せないの？」
「……………」

慧十が黙り会話がそこで途絶え、アタシは納得がいかないままずっとムツとしていた。慧十はうつ向き加減で視線を落としてずっと口を開かない。いつもの少し怒った感じとは違い悲しさが強い表情で見るからにテンションが低そう。

「アタシ一度家に戻る……。頭、冷やしてからの方がはなしやすそうだし」

「わかった」

この騒動の原因はアタシの心境の変化だ。慧十が大切な人になれ

ばなるほどに苦しくなった。そして、今回の敵が出現したと言う現状で慧十の対応が曖昧だったことに対してアタシは完全に切れた。だからと言って慧十と縁を切る訳ではないが少し溝が広がってしまった。そして、夏休み。7月中旬から八月終わりまでの間、慧十とは合わないと決めてアタシは一度、実家に帰った。それから数日後にあまりに唐突過ぎて驚くことも出来ないことが起きた。敵、もとい。夏海　　扇華が訪ねてきてアタシを自らの家に招待したのだ。

「久しぶりね。聖……」

「なに？　アタシ今あんまり機嫌良くないんだけどさ……」

「そんなに怖い顔しないでよ。今日、ここに来た理由は簡単よ。一週間家に来ない？」

「は？」

「ま、私が貴方を呼ぶのにはちょっとした理由があるけどね」

この性悪女……扇華は勝負を持ちかけてきたのだ。一週間、慧十を信じてアタシは慧十に関連した事象を全て切り離し生活する。その途中で慧十と接触したり連絡をとったらアタシの負けという嫌な勝負だ。だがアタシが勝てばこれからは一切慧十との関わりを持たないと言った。何故かアタシはその勝負にのってしまっただけから後悔した。絶対に無理だから……一週間も合わないなんて。自分で決めた期間はそれよりもかなり長かったが実家に帰って姉や妹に刺激されてわかった。無理だ。

「わかったわ」

「じゃ、乗って」

慧十もマンションを一時離れ実家に帰っていた。こちらは誰も兄の態度には触れない。触れていくのはお祖父さんくらいだ。慧十はたまにマンションに帰りアタシが帰って来ているか確認していたよ

うだ。

「兄貴はどうしちまったのかねえ」

「わからないわ。兄上は元々口数は少ないお方だった上に感情も面に出さない人だったから……」

「それはわかってるよ、姉さん。でも最近輪をかけて暗いぞ？」

「剣ちゃんはあるまり触れないほうがいいわ。また喧嘩するし」

「……………」

兄妹間でもかなり遠慮があるようだ。アタシ達には関わりのない話だが慧十はかなりまいっている。こんなことをしていても無意味だとわかっていたがなぜか動けない。アタシは扇華の家のアタシ用に用意された部屋ですつと針を持って刺繍や細かい所の縫い付けをしていた。アタシの学園、楼雅学園には夏休みの宿題はない。正確には成績不審者や志願者のみが夏期補講には参加する形だ。だからアタシは悠々と好きなことをしていられる。ただ一つをのぞいては……。

「聖！ 私はちよつと出かけて来るから」

「うん、ゆつくりしてきなよ」

予想はついた。どうせ慧十の所に行くのだろう。慧十は夏休み中は店に入り客を持たずに事務室にすることが多いと既に携帯電話を通して魚街から連絡が回ってきていた。事務室はよっぽどのことがない限り入れない部屋だった。慧十は学園の生徒が多い時間帯になるとよく逃げ込み姿を隠すらしい。

「聖！ ホントにいいの？ 賭けをするのはいいけどさ……聖の勝率が低いことくらいわかってるでしょう？ 私ね、最近聖が考えることがわかんなくなってきた。確かに慧十君も受け身姿勢

で腹立たしいのはよくわかるけど……」

「ごめん……。今慧十の話をしないで……。なんか、空しくなってくるからさ。アタシなりに整理をつけようとしたけどさ、もうどうしたらいいかわかんなくなってきた。穴が塞がらない感じ……」

「結構、重傷だね。わかった！ あと2日我慢しな、そしたら私がすぐいくから。私さ……。実は成績不審者の赤紙貰っちゃって今補講の休み時間なんだ。」

「気をつけなよ……。あれ三枚貯まると留年でしょ？ アタシも2日我慢してみるよ。そしたらなんか整理つきそうだし」

「そのいきだよ！ 聖の新作の服楽しみにしてるからさ。あと泳から業務連絡。なんかお店の女性スタッフ用の服の案件が欲しいらしいよ」

「わかった。考えとくよ」

竹華と話すことで少し気が紛れた気がする。アタシも少し考えすぎだったのだろう。だけど根底にある慧十にキスをした時のモヤモヤはまだ残っている。何か記憶の奥にある霞がかかったところに本当の答えがありそうだ。そんな時は服を作る。考えて悩むなんてアタシらしくない。だから思いついたデザイン画をノートに書いて行く。それが行き詰まったら本を読む。それで浮かばなければテレビ、それでも出ないなら外へ、最後は……。

「只今！ 聖！ いる？」

「いるよ……」

嫌なヤツが帰ってきた。アタシの怒りの元凶だ……。煩い、傲慢、強欲の3拍子に馬鹿が加わった扱い難いやつ。まだ慧十が逃げていることに気づいていないようだ。おまけにアタシに同意を求めようとしてくる。信じられない……。

「慧十さんはいったいどこに居るんでしょうかねえ。聖は知らないの？」

「勝負してる相手に教える人はいないと思うけど？」

「そ、それもそうね」

「あ、そうそう。明後日あたりに竹華が来るからそのつもりでお願いね」

「わかったわ。準備しておく」

慧十の動向などの情報は竹華から逐一入って来る。店での情報も泳から竹華を介して入ってくるからそのてんに関しては大丈夫だ。問題は扇華の動向だ。このよくわからないお嬢様は気紛れに行動するため悪い彼女にとっていいことが起こることは少ないが時々大逆転的事象が彼女に訪れることがある。アタシはそれを避けるために手を打たなければならない。

「アタシはだいたいこの部屋に居るから用があるなら来て。ただし、話し相手は無しだよ。絶対喧嘩になるから」

「フンツ！ そんなことはわかってるわよ。でも、諦め早いわね。

勝負は終わりにする？」

「だからさ、話さないで……腹が立つからさ」

「わかったわよ」

その頃の慧十は……………。

「何かさゝ最近の店長暗くねえ？」

「確かに！ でもさ、理由何だろうなー。あの人が落ち込むって相
当な理由だぞ……………」

「違いねえな。魚街なら知ってるかなあ」

「聞いてみるか」

スタッフの教育係りもしていた慧十があまり機敏に動かなくなり、彼が持っていた人気が落ちた分売上高も落ち始めた。そして一騒動起きた。魚街が慧十につかみかかっているのをスタッフの一人が見ていたのだ。彼の名前は笹瀬　松、^{しょう}慧十が最も信頼を置くスタッフの一人だ。そして、聖の姉の成果の夫でそういう繋がりを持っている。

「おい！　慧十！　いつまで中途半端にしてるつもりだよ！　聖さんが可哀想だろ！　人の時は悠々としやがって！」

「……………」

「黙ってんじゃねえよ！」

「……………　や……………　した……………　から」

「聞こえねえよ！」

「約束したんだ。聖がアイツが覚えてるか知らないがな」

「そんなもんで……………」

「二人ともそこまでだ」

松が二人の仲介として話題に入ってきた。その後ろにはドレスを着た女性がいたが松は体格がよく大柄なため隠してしまい顔や姿は確認出来なかった。

「会話から察するに緋皇さんの恋人に関する話題ですか……………。ならもう少し待った方が良いでしょうね。緋皇さん」

「笹瀬。なんでお前が知ってるんだ？」

「知ってるも何もないわ。松は私の旦那だし私、成果は松の妻。知らないはずないじゃない」

「成果さん！」

「最初から聞かせてもらっただけどあなたも一途ねえ。なに？　10年前の話かしら。あの子は多分覚えてないけど……………あとでアタシが細工しとくわ。多少暴走するだろうけど暖かい目で見てあげること。」

それから決してすぐに追わないこと。わかった？」

「理解はしました。しかし、実行はできるかは分かりません」

「やっぱりね。まあ、せいぜい気をつけることね。あなたは焦ると注意が散漫になるから」

「何がどうなって……」

松が魚街の肩に手を置き囁いた。慧十の目には久々に光が戻り前を向いている。そんな彼を見ながら成果は真剣な眼差しで慧十を見つめていた。

「俺たちはわからなくていいのさ。あの二人がわかればな」

「俺に知る権利は？」

「ない」

慧十は一度マンションに帰り掃除をした。そして、成果の言う通りに一言伝言を残し部屋を出ようとした時に呼び鈴がなり玄関にいき戸を開けるとそこには扇華がいたのだ。それを見るとため息をついてから慧十は靴を履き外に出た。

「どうしたの？ この前断ったはずだけどさ」

「決まっていますよ……慧十さん。実力行使です」

アタシはその頃、雲英が運転するバイクの後ろに乗っていた。かなり荒い運転で正直うんざり利したが姉に言われたため従った。どうしようもなく脳天気な姉だが実はかなりの策士で頭がキレるやり手なのだ。

「そろそろ着きますから！」

「わかった」

その方向は行きたくなかったがそんな状況下ではない。玄関とアタシのマンションに着き階段を上がっていく。そこで嫌なヤツとそして慧十と鉢合わせした。

「あら、聖じゃない。勝負はどうしたの？」

「知らないわよ！ アタシも連れて来られたただだし」

「でも、条件はさ慧十さんに会わないこと。しかもまだ二日しか立つてないのよ？」

次の瞬間に扇華が見せ付けるように取った行動を合図にしたようにアタシは階段を駆け降り雲英がいるマンションの出入口付近まで走った。そして、雲英が言葉をかける前にヘルメットを被りバイクでこの場をさるように告げた。

「出して……」

「え、もういいの？」

「出して！」

バイクは急発進し見えなくなった。扇華は慧十に抱きつき背伸びをしてキスをしたのだ。そして、とっさに聖を追うために走ろうとした慧十の腕を掴み声をかけたのだ。

「行かないで」

慧十はあまり怒りを露にするタイプではないがこの時ばかりは違った。静かな声だったが厳しさを含み少し低くなった声で相手に話をし最後に睨み付ける様にしたあとで階段を降りて行った。

「ふざけるのも大概にしてくれ。そんな条件で勝負とはいいい御身分だな。そんなヤツとは付き合えないし、俺は聖を待つと決めた。だ

から俺は行く。じゃあな」

バイクにキーをさして飛び乗り慧十にしては乱暴な運転をして道路を走って行く。その頃聖たちは……。

「ヒッグ……ヒッグ……。もう嫌……。なんで？ アタシが何かしたの？なんでアタシにだけ……。」

慧十が探すであろうルートを全て避けていく道を雲英に命じ、アタシ達は黙って走って行く。その間に沢山の店に出入りした。目的は時間潰しとうさ晴らしをするため。ゲームセンター、ファミレス、カラオケ、テーマパーク、海岸線など思い付く場所を全て……。こんなことしても無意味だということはわかっていた。だけど、そうしないと心が潰れちやいそうで悲しくて……。最終的にアタシ達はマンションに帰ってきた。慧十が居ないことはわかっていたため直ぐに部屋に入ろうとした、その時部屋のポストに便箋が入っている。姉、成果の字だ。

『貴方が迷っているなら読みなさい。迷っていないなら迷うまで封を開けないこと』

「どういうことだろ」

「さあ、でもとりあえず中に入りましょうか。もう外も暗いですし」
「うん」

その頃、慧十は……。

「何が策士だ……。自分だってこんだけ人をかくらんさせる技があるくせに」

スーツではなく私服の状態で髪をなびかせながらバイクを走らせていた。今は海岸線に向かって走ってる。人気のない道路でかなりスピードを出して走っていく。慧十のバイクはエアバイクと呼ばれるエンジンの動力は水素爆発なのだ。クリーンなバイクという意味でエアバイク。それはかなりスピードが出るためプロのレーサーや慣れた人しか乗らない特注品だ。それに更にスピードを上げた状態で股がっている。事故を起こせば即死物だ。

「そろそろか。もう八時……家に帰ってるか。いや、雲英もいるしそれは……」

いきなり現れた無点灯の車に追突され転倒した……。ヘルメットをかぶっていなかった慧十は諸に頭を打たないように手で頭を守ったままガードレールに衝突し意識は朦朧としていた。車は直ぐに走りさり追跡は不可能だ。そして最後に残った力で携帯電話を使い119を押し『海岸線10番地灯台前』と話して気絶した。

「全く、慧十のヤツは！アタシの気も知らないで！」

「まあ、まあ。聖さん少し落ち着いて……」

その頃、アタシ達は家で騒いでいた。お酒などのアルコールは全て慧十が管理されているため炭酸ジュースで我慢していたものの今は悲しさより怒りのほうが強い。本当に分からないのは何故慧十が『受け身姿勢』なのかだ。そして、慧十の頭ならそろそろ帰って来ていてもおかしくないと思っていたし来たら愚痴の雨を降らせてやろうと思っていた矢先に……。

「聖！ 探したわ！ 今すぐに来て！ 早く！」

「竹華……。どうしたの？ 血相かいて……」

「話は後！ 早く！」

「まさか兄上に何か……」

「……」

アタシはそこに座りこんでしまった。慧十に何かあったのは確か
でしかも竹華の様子からするとかなり深刻だそして竹華が雲英に説
明してることを聞いてさらに血の気が引いた。

「車にはねられたらしいの！ 手で頭への直撃は避けたみたいだけ
ど間接的に後頭部を打っていて救急車が迅速に動けたけど……危険
な状態……」

途中から声が聞こえなくなった。頭が痛い、目の前が霞む。アタシ
のせいで慧十が傷付いた。アタシのせいで。

「聖！ 早く！」

「……。行けないよ……。慧十に合わせる顔ないよ。だって……」
その瞬間に竹華が口を開きかけたが雲英の手のほうが一瞬早かった。
聖の頬を打ち珍しく怒声がとんだ。

「甘ったれないでよ！ 誰のせいも何も今は関係ないの！ あの人は
こんなことじゃ死なないしそんなことは気にしない……。だけど
アンタが来なかったら兄上はどう思うと思ってるの！？」

「そう……その通りよ！ 行くわよ！」

「急げよ！ あんまり状態が良くないんだ！ 血も足りてないし……」

「……」

「え！？ 泳！ それどういうこと！」

「兄上はA B型のRH-です。希少な血液であり居ないのです。
兄妹と言っても腹違いの私は普通のO型で弟の剣一はA型のRH-
……。お祖父様も剣一と同じ誰も居ない……」

その時、姉の成果から聖の携帯電話に電話が入り直ぐに竹華が出た。

「もしもし！ 聖？」

「竹華です！ 聖ちゃんが喋れる状態ではないので私が出ました。」

「聖を連れて来て！ その子もA B型のRH - なの！ 私と那流のだけじゃまだ足りないのよ！」

「え！ わかりました！ 今すぐ行きます！」

アタシは無理矢理立たされ直ぐに雲英の運転するバイクに乗せられて病院に向かった。気持ちの整理なんてする時間は無い。数十分後にはアタシは慧十の隣に寝ていた。処置は既に終わっていたが人工の血液循環器はまだついていていた。アタシの右の手首から取られた血が袋に入れられ慧十の左の手首にチューブ伝いに流れて行った。その後はアタシの記憶もない。どうやら貧血で気を失ったらしい。

「聖……。聖……」

姉が揺り起こす気配がする。どうやら日付は変わっているようだ。アタシは右手の手首に包帯を巻かれた状態で慧十の隣で寝ていた。上体起こす。まず右側を向くと目に入ったのは壁よりの椅子に座ったまま寝ている魚街、次にベッドに寄りかかって寝ている竹華と那流。正面には姉の成果に父と母、更に誰かわからない男の人と美雪がいる。左側には反対にある慧十のベッドに寄りかかって寝ている雲英。次にお祖父さんと知らない男の子。そして、穏やかな寝顔をしている慧十が見える。散々迷惑をかけたが結局何事もなかったかの様にことは過ぎた。そしてアタシはまた迷い始めた、慧十とこのままどうするのかを。

「『迷ったら開けてみなさい』か、今なら開けてもいいかも。でも

何が入ってるんだろ……。けっこう軽いけど」

中には違う筆跡の綺麗に整った文字でこう書いてある神が入っていた。

『僕は待つてる。君が追いついたと思うまで、いくらでも待つてるよ。十年前のあの日から』

とそして中からは所々切り取られた写真が出てきた。片方はアタシでもう片方は切り取られていた。だが幼いながらにキスをしているのがわかる。その写真の裏にも字が書いてある。

『君は嘘をついた。アタシは進めない。君に置いていかれたあの日から。アタシは進めない。だからアタシはアナタを……。君を待つ』

こちらはアタシの字だ。少し癖のある斜めがかった字だ。これは中学生の頃に書いたらしい。日付が書いてある。そして、アタシは……。その時のアタシは勘違いして解釈した。この写真に居るはずの少年がアタシの初恋の人で慧十はそうではないと。

「慧十？大丈夫なの？」

「ああ、成果さんの忠告は聞いておくべきだったな……。ホントに跳ねられたし。それから聖、ありがとう。俺に血を分けてくれて」

「改まって言わないでよ……。恥ずかしいから」

「そうか。じゃあ早く退院して聖に店に連れて行ってやんないとな」
「うん。お願いね」

慧十は右手の骨折と大きな打撲傷にこれまた大きな切り傷があった。本人は箔がついたと笑ったがそれでまた敵が増えるのではと不安だ。右腕が完治したら退院できるらしい。今は七月の終わりだ。

アタシは退院していてもおかしくないのだが姉の計らいでまだ慧十の隣にいる。そして慧十と約束をしていた。夏休みでの3日間だけアタシだけの慧十になってくれるように。そして、アタシの初恋の人を探すのを手伝うこと。この二つを約束してアタシの7月は終わったのだ。大変だったけど少しいいことのあった夏休みの思い出になって……。

夏休みに賭けを

慧十が退院して数日後。アタシと慧十と魚街夫婦、つまり泳と竹華はアタシの家の別荘にいる。小さな離島が転々としているこの周辺は自然が豊かで夏休みなどに遊びに来るには持ってこいのレジャー施設だ。清名家の敷地は極めて広大らしい。アタシはいちいち気にしたことがないため来て観察してみると確かに広い。

「すごいな。俺、初めてこういうところきたよ。綺麗な森と海に豪華な建物、うん……やっぱりすごいよ」

「アタシもあんまり気にしたことないから知らなかったけど確かに広いね。海に行けば釣りも出来るよ。アタシは釣ったことないしわかんないけど……。あと海は水上バイクと素潜り、海岸遊びくらいかな？森は昆虫採集、時期がずれるけど果物狩りかな？」

「俺ならレジャーの施設にしちまうだろうなここ。これだけ豪華だと言葉もでないよな」

「言葉が出ないと言ってる割には普通に出てるじゃん慧十君……」

まずは一週間分の着替えと荷物類を建物に持っていった。使用人の皆さんは極力送り込まないように父親にお願いしてあるためだいたいは自分達で物事を片付ける。慧十や泳は軽装備で薄手の服を持ってきていたためかなり軽い。一方アタシ達女子軍は少し張り切りすぎてかなり重い。そして今はアタシより弱々しい体格の竹華が音を上げた。

「泳！手伝って！」

「そう来ると思ってたよ。ほら思い方貸せよ。持つから」

慧十は無言でアタシの荷物を持ってきてくれた。最近また身長が伸

びたらしく慧十の背中が大きく見える。姉がくれたヒントの写真と紙のことについて考えながらアタシは慧十の右腕を見ていた。完治しても亀裂のようなものが残ってしまったらしい。そして歩くこと10分程で白い洋館にたどり着いた。綺麗なシンメトリーで広い玄関に大きなホール。二階にも数個部屋があり札がかかっていた。中央で二つに別れた階段の奥は上がって右が慧十とアタシの部屋、そして左が竹華と魚街の部屋、部屋の内装も綺麗だ。広い部屋に荷物を置き一階にある食堂に集まった一同。

「何をしたいか投票！まずは場所から決めよう！」

竹華を筆頭に魚街、アタシ、慧十の順に言い始めた。

「海！」

「同じく！」

「アタシも」

「……どこでもいいぞ。楽しければ」

賛成多数で海に行くことになった、というより最初にあれだけ綺麗な海を見せられれば行きたくなるのも当然だ。各々が部屋で着替えて日焼け対策で女子二人は上にTシャツや上着をきて外にでた。案の定だったが泳、竹華は競泳仕様の水着だ。慧十は普通のトランクタイプの水着でアタシは……。

「ウワアオ！！慧十君！後ろ注目だよ！」

ビキニだ……。竹華にハメられ正直者のアタシはまんまと策略にはまり……。

『聖はさあゝやっぱり慧十君が言うようにスタイル良いし顔も可愛いからさあゝもっと大胆に行くべきなのよ！宝の持ちぐさね。ってことで買いに行こう！私が選んであげるからさ！大胆に行こう！』

『ちよつと竹華!』

『やっぱりねえ。羨ましいよ……。Fはあるよねえ絶対さあ。こんな隠しておくなんて勿体無いわよ』

『……………もうどうにでもなつて……………』

かなり派手な……というより際どい黒のビキニを着る羽目になった。魚街は竹華に攻撃され見てはいないようだ。慧十は和やかな視線をずっとこちらに向けている。露骨に出ているアタシの反応が面白いらしく更にニコニコしている慧十。

「この変態!そんな舐めるように見ないでよ!」

「いや。恥ずかしがり方が可愛いからつい……」

そんな会話をしながら歩いていくと既に白っぽい砂に変わっている地面のなかで傘を広げシートを敷き荷物を置いている使用人らしき人達が頭を下げて若い二人を残してその場から離れていった。

「ねえ!慧十君は水上バイクの運転出来るの?」

「バイクと操作が同じならできると思うが……」

「だって!聖!行つてきなよ」

「へ?」

「いつもの要領で行つて来なつてことだよ!私たちは泳いでるから」

慧十はこの前、事故に巻き込まれたばかりなのに興味津々といった雰囲気で使用人が案内する方向に行つてしまった。そして、アタシと一番年齢の近い仲のよいメイドさんに背を押され結局は乗る羽目になった。

「お嬢様!せつかく緋皇さんが遊びに来られているんですよ?行つ

て来なくちゃ損ですよ！あんなに格好いい人が彼氏なんて羨ましいことこの上ないんですからね？」

「そりゃあ格好いいけどさ……ってなんで名前知ってるの？アタシまだ一回も名字は言ってな……」

「そりゃあ有名ですよ！彼氏さんつまり緋皇さんは今、経済界で……」

「お姉さん。その先は言わないでください。一応みんなには秘密にしていますから。お願いしますよ？」

「は、はあい！わかりました！」

それこそ目からハートが出そうな勢いの彼女をよそに、慧十はもう一人の使用人から説明を受けすぐに乗りこなしていた。スピード調整やブレーキなどの方法をすぐにマスターし船着き場に横付けして話しかけててきた。

「慣れれば意外と簡単だぜ！」

「さ、お嬢様も乗ってください！早く！」

先ほどの若いメイドさんがアタシを急かし遂にライフジャケットを着て慧十の後ろにいつものように乗った。水着なのが少し落ち着かないが慣れればホントに楽？ではなかった……けして楽では。

「ちよつと！慧十スピード上げすぎ！落としてよ！」

「まだまだ上がるんだけどな！」そう言って更にスピードを上げる慧十の顔はいつになく楽しそうな表情をしていた。アタシも楽しいその顔を見ながら和むだけなら楽しいが……。

「キヤー！」

その頃、波間の辺りでその光景を見て和んでいる二人組。そこにさ

つきの若いメイドさん、名前は読みにくいですが可香菱　江利子
さん、が竹華達に話しかけた。

「あの二人楽しそうな顔してるわねえ」

「あの……。お姉さんの名前は？」

「私？私は江利子。清名家に奉公して二年のメイドのヒヨコちゃん。
三年前に採用してもらって一年研修して今に至るってわけ」

「へえ……。メイドさんって大変ですね。ここに居るってことは楼
雅の卒業生ですか？」

「うん、だから御主人様にここへ行くように言われたの。親しみあ
るでしょ？竹華さんは普通クラスね？で、泳君はスポセン？」

「いえ、俺は普通クラスの水泳部です」

「じゃあ部活は後輩か」

そのような話をしながら慧十とアタシが左右に動くのに合わせて首
を動かしていた三人。その後、慧十とアタシは船着き場に戻り砂浜
に戻った。

「大丈夫かよ？」

「あんな運転されたら大丈夫な人はいないと思うけど……。アタシは
慣れてるからこの程度ですんでるんだからね？」

「でも、凄いやね。慧十君は。水上バイクにも乗れるんだ」

「え？アタシの言葉はスルー？」

「コイツは人間じゃないからな」

魚街がカラカラと笑いながら慧十の昔について説明し始めた。慧十
はかなり転校が多いらしい。魚街がいた中学では二年生の間にしか
いなかったのだ。だが、その間の中間、期末、実力の三大テストで
一位をただの一度も逃さなかったらしい。その上、魚街が一番速か
ったはずの水泳の短距離でもあつという間に魚街を抜き二年生にし

て全国大会一位をかざり三年では出場はなかったそうだ。

「と言う訳さ……。そういえばまだ理由は聞いてないが？何で三年の総体は出なかったんだよ」

「アメリカに居たからな、その頃は……。それ以上のことは言えないが日本には居ないから総体出場は不可能ってことさ」

「家の理由か？」

「まあな」

そういえばアタシの初恋の人もいつかは解らないがいなくなったらしい。慧十に聞いてみるとけっこう気軽に……。

『実は近くにいるかもしれないぞ？その写真の表の日付は俺達が幼稚園にいるくらいの年齢だからな。で、身長もその頃はあまり変わらないはずだし』

などと言ってくる確かに脱線はしていないが±1歳はあり得る話だ。だがそれは江利子があっさり解決してくれた。

『あれえ？お嬢様あ？その写真はもしかして卒園式の時のですか？』

この何気ないひとこととかなり人相が絞り込めた。卒園式で胸に花を付けるのは卒園生だけ。写真の切り取られている部分は綺麗に首から上を切つてある。その頃のアタシが自棄になって切つたようだが胸には確かに花を付けている。考えるのはそこまでにしアタシも水遊びに加わった。

水のかけあいは正直、幼稚な気もしたが始まるとかなり楽しい。

慧十は素手で小魚を捕まえて小さなバケツに入れていた。そのあとスキューバダイビングで何故か銛と網を持った慧十が自分の気に入った魚を捕まえて来た時には江利子さんともう一人の使用人さん以

外はみな絶句した。もちろんアタシも……。

ビーチバレーはアタシと慧十ペアが圧縮！陸に上がった魚に負ける訳がない。次に江利子さん提案のビーチドッチボールは……。うん……、痛かった。

そんな感じで一日は早く終わり日が落ち始めたため別荘に帰り着替をして食堂に集まった。

「明日は皆何したい？」

「うん……。私と泳は貝拾いに行こうって話をしてただけど」

「うん！いいねえ。だったら二手に分かれようよ。アタシと江利子さんならいい場所知ってるし」

「やった！アタシ達のほうに江利子さん付けてよ」

「うん。わかった」

使用人が二人だけで他のメンバーが居ない理由は簡単。慧十がいることだ。何故かアタシの父親は慧十に絶大な信頼をおいている。そういうえばよくよく考えてみると彼の正体が一番の謎だ。竹華の情報検索能力でも全く解らない。姉に聞いても笑っていながら『貴方が気づくまでは解らないわよ』と言って教えてくれない。店の人にもそれとなく聞いても解らない。それをまず知りたかった。

「竹華さん準備はいい？」

「もちろん！」

二人が厨房に入りお手伝いとして江利子さんともう一人の使用人さんが入って手際よく料理を仕上げて行く。慧十がどんなジャンルの料理ができるのかは知らないが竹華とかぶらないようにしているようだ。アタシは慧十に教えてもらい白米の炊き方と味噌汁の作り方ぐらいは覚えているし出来るがそれしかできないため待機チーム入りだ。魚街は論外のように、並べられていく料理をしげしげと見な

がら座っている。

「でもよ？何で慧十は何でもできるんだろっな？」

「確かに気になるけど誰もその事実は知らないよね？」

「さあて……。二人とも！俺の噂はいつでも出来るが温かい料理が食えるのは今だけだぞ？」

「そうそう！私が調べてわからないことを聖と泳じゃ調べられる訳ないからさあ……」

落ち込んだ様子の竹華の裏から江利子の声がした。それはかなり突飛なことだが竹華はそれに食いついていき何やらこそこそ相談している。

「竹華ちゃん！あとで相談したいことが有るから泳君を連れて来てね！」

「はあい！」

食事が終わると直ぐに三人は居なくなつた。その時はアタシも慧十も何を企んでいたのかはわからなかつた。実はこれからの予定を変更する手はずだったようだ。元々この洋館には別館がありそこは本館とあまり変わらない設備がある。そこで何かをするらしい。

「ねえ。慧十……。あの三人はいつたい何を企んでんだろ」

「わからんが予想だと竹華さんと泳が別館に移るんだろ？」

「それならつじつま合うね……。そういえば約束覚えてる？」

「ああ、『三日間だけアタシだけの慧十になつて……』だろ？正直聞いた時はびっくりして言葉も出なかつたさ……」

「その割にはけっこう念を押してたよね？アタシもあの二人に便乗して少し慧十をハメるつもりでいたのよ。言ってから気づいたけど三日間で何をしようかってさ……。で、考えて見て出て来た答えは

なんか普通すぎてつまらなかったの……。だからアタシも少し違う自分を演じて慧十に悪戯しようかって思ったわけ」

「ふーん。じゃあ、それは俺に対抗してるってこと？」

「うん。だって慧十は全然自分を出してない感じがするもん。まだ二重にも三重にもベールが包んでアタシが慧十の本当の心に触れない感じ」

「わかった。楽しみにしてるよ」

やっぱりアタシは嘘をつけないらしい。顔が真っ赤になっているのがわかるくらい火照ってきた。逃げるようにその場から自室に逃げ込み直ぐに座り込んだ。混乱はまだ収まらない。その夜、夢で見て思い出した遠い昔の記憶。アタシはホントは誰が好きなんだろう？。「はあ、こつもピツタリ予想が当たると少し悲しくなるな。向こうのアホさ加減に……」

「そう？アタシは慧十と二人きりでいれるから嬉しいけどなあ」

早速アタシは違う自分を演じてんいる。これまでとは違い少し積極性を上げたアタシ。竹華によく教えてもらった通りの甘え方をしながら不本意ではあるが露出の大きな服をきている。今日の午後からはもう一人の使用人さんは本家に帰るため悠々と時間をすごした。江利子さんはこれから別館の二人の世話をするらしくあまりこちらには来ない。

「確かに穴場だ。これだけ綺麗な貝がある場所もそうないだろうな」

「いくらでも拾ってつていいよ。アタシは小さい頃からここによく来てたから貝はたくさんあるし」

「ああ、遠慮無くもらってくよ」

慧十は持って来ていたウエストポーチから大きさの違う袋を数枚出して種類や大きさごとに分けながら詰めていく。作業が終わると慧

十は立ち上がりアタシに合わせて歩きだした。

「ねえ、手……繋ごう?」

視線を前に向けたままアタシは慧十の手を探り当て手の甲をなでながら呟いた。いつもよりも大胆にしているつもりでも性格までは変えられない。慧十が手を握ってくれた後はやっぱり顔が真っ赤になっっていたようだ。

「早いね……時間が経つのってさ。もう夕方だよ」

「確かに早かったな。今日は戻ろうか」

「うん」

二人で砂浜に座って話していた。先に慧十が立ち上がってアタシを起こしてくれたあと、すぐに首の後ろへ腕を回しキスをした……。慧十はさして驚く素振りは見せなかった。優しくアタシの背中後ろに手を回し抱きしめてくれる。少し筋肉質な腕だがその時は柔らかかった気がする。

「何でこういう時も柔軟に受け身姿勢で受けちゃうの?それじゃあつまらないよ」

「さあな、それが俺なのかもしれないぞ?相手に合わせて形を変える」

「……。まあ、いいか。アタシが慧十に負けなければいいだけだし」
「果たしてそんなことが出来るのかな?」意地悪い微笑みだが明るさはある。夕食は無理難題を押し付けたつもりだったのにあっさりクリアできてしまった。でも、アタシが少し自分に正直になっただけでかなり進展した気がする。そして、慧十が例の初恋の相手の話題に触れた。

「そう言えば聖のその写真の男の子さ一応どこの出身かまではつきとめるのは簡単なんじゃないか？その幼稚園の園証に見覚えはない？」

「そりゃあ……。アタシの行つてた幼稚園だし覚えてるよ……」

「その子も同じなら名簿に載つてると思ふんだ」

「それだ！…… って言つてみたけどさ。今は慧十に集中したいの！初恋の人のことは今は言わないでよ。アタシだってこれでもけつこうサービスしてるんだからさ」「確かに。いつもならそんなに露出してない気がする」

そこはにこやかに言うセリフでは無いだろと思ひしたがこれが慧十の表の顔なんだと諦めたアタシだった。夜の8時を回り慧十は何やら楽しそうに貝殻に細工をしている。少し大ぶりの貝殻をナイフやヤスリで形を整えながら削り出して最終的には何かをはめ込む物になった。それをさらに珊瑚や小さな貝殻を使い装飾しコルク板の上に幻想的な造形ができた。

「それ何？」

「指輪を貸しな……。で、ここにはめる。取る時は裏から指を入れて押し出す。我ながらよく出来たよ。あとで速達で送つてもらつてもりだから楽しみにしてな」

「でもさ。慧十の指輪が入る所が無いじゃん」「心配するな後から仕掛けの説明してやるから。指輪も俺のデザインだから出来ることだけだな」

アタシだけの慧十の1日目は終わった。次の日は近くの街に行くつもりだ。この辺りは静かだが少し人里に降りると賑やかな商店街が現れる。アタシはそこが好きだった。けして都会ではないけど賑やかで活気のあるその街が。

「確かに良い所だな。活気があつて何より街の皆さんが元気だ」

「もあ……。今日は視察に来た訳じゃないんだからさ！アタシとデ
ートなんだからそういう言葉言わないの！」

「悪い……。つい癖でやつちまうのさ、だけどこの街なら学ぶ所は
多そうだな、こんど見繕って留学生を送り込むかな」何故か流れに
乗ればあんまり恥ずかしくない慧十の手を握って歩いていく。この
街の発展にはアタシの父親が一枚かんでいる。自治会に発展案など
を提供して促進を促したらしい。アタシはよく知らないけどアタシ
が通るといゝんな人が声をかけてくれる。慧十がいてもお構いなし
に……。

「お嬢様！えらく久しぶりだあ！隣の人はいいい人かい？」

「久しぶり！おじさんも元気だね！二年も経つたるのに全然変わっ
てないもん」

「いやあ。嬉しいこと言ってくれるねえ。お嬢様は別嬪さんになら
れて！見違えちゃってよくみないとわからなかったよ。これ持って
きな！リンゴだよ！」

「ありがとうございます」噂が広がるのはかなり速いアタシが来て
いるのがすぐに街中に知られていた。商店の店主さんから出店のお
じさんやおばさん。果ては小学生や中学生にまで知られている。だ
けど大抵の人は言うことは同じだった。

「お嬢様！久しぶりですね。その人はいいい人ですか？」

嬉しいけど正直恥ずかしい。アタシが主導権を持っているため慧十
は素直について来る。たまに立ち止まっているが直ぐに追いついて
きてアタシの話をきいてくれる。

「慧十はどこか行きたい店はある？」

「まあ、あるとしたら道具と料理用具が欲しいな。あとは無い」

「じゃあ案内するよ。大概のものはあるからゆっくり見てってよ」

「自分の家みたいなものいいだな。まあ、いいけどさ」

アタシと慧十はその日一日楽しく買い物をし和やかに過ごした。周りの人達からいろいろな物をもらったりしながら街を歩いた。夕方に一度別荘に帰り荷物を置いて再び歩いて行つた。そして、入つて直ぐの出店のおじさんが慧十を捕まえて何やら袋を渡して出店をたたみ帰る準備をしている。慧十が少し手伝っているのを近くのベンチに座つて見ていたアタシ。暫くすると慧十が帰つて来た。

「どうしたの？」

「あのおじさんの奥さんが聖につてこれ。くれるつてさ。あとは明日の夏祭りに来てくれとさ」

「へえ、楽しそうじゃん。行こうよ」

「ああ。あのおじさんには大役を頼まれたしな。四人の内の二人で

……」

「は？」

その後も少しぶらぶらし別荘に帰つた。アタシは袋から綺麗な模様の浴衣を出して一度着てみた。ぴったりだ。慧十の方は買った物の整理をしながらこちらを見ていた。袋の中にはもう一着衣装がありこちらは男物のようだ。ここぞとばかりにアタシは慧十に押し付け着てもらふことにした。

「似合うじゃん！」

「そうか？なんか男衆が足りないらしくてな。断りきれなくて……で昼間に俺がもらつてきたのが魚街夫婦用で今着てるのが俺ら用らしい」

「じゃあ竹華も来るんだ！」

「ああ、ついでに泳もな」

その夜ははつきり記憶に残ってしまった。浴衣をたたみ、慧十も神

輿の担ぎ手用の服を脱いでシャワーを浴びて部屋にいた。何やら日記らしき物を書いてゐる。その手元にはエメラルドの指輪がありライトの光を反射してキラキラと輝いてゐる。アタシは勇気を持つてドアをノックした。

「慧十？まだ起きてる？」

「ああ、ドアの隙間から見てたからわかってるだろ？」

「むう……。しょうがないじゃない、見えたんだから」

「フフ……。そういえば気付いてるか？自分の言葉使いが変わって来てるの」

「うん。誰かさんに気に入って貰うためにね」

その後はアタシが慧十に近づき背伸びをしてキスをした。大分前や昨日とは違い少し長めにした。アタシはやっぱり赤面しているようだ。直ぐにドアの前まで小走りに退いていきドアの前で慧十に向き直った形を取った。

「おやすみ！」

「おやすみなさい」

最後に慧十が何かを呟いた気がしたが聞こえなかった。そのまま部屋に帰りアタシは直ぐにベッドに潜り込んで目を閉じた。

「おやすみなさい……。プリンセス」

次の日

昨日よりも熱気に溢れた街は更に活気付いている。商店街の各店も店長を中心に揃いのはつぴを来て盛大に売り出しをしている。午前

は自治会の集まりはなく午後から集まるらしい。アタシ達四人と江利子さんは街をぶらつきながらはしゃいでいる。特に魚街夫婦と江利子さんが……。

「聖い！おいでよお！いろんな物が安くなってるよ！」

「はい、はい……。今行くよ！」

「おーい！慧十お。こっちに面白そうなの沢山あるぜ！」

「わかった……わかったから」

楽しいがこのままだと夜まで体力が持たない。昨日は慧十にキスをしてしまったせいでドキドキしたままで寝着けなかったアタシ……。

「皆！特に慧十君と竹華ちゃんは体力残しておかないと大変だよ！お昼には祭が始まる儀式があるんだから。『弓取り』は今年の豊作と大漁を祈願する大切な儀式だから失敗は出来ないのよ？」

「はぁーい」

「わかってますよ」

そう、あたしと泳君は弓取りの矢取りが役目。海に立てられた的と山の上にある神社の方向に向けられた的が割れるかで豊作大漁を占う儀式。大役は慧十と竹華だ。弓矢で的を射抜くのはこの二人。近年は誰一人としての的に当てる者は居ても射ぬ抜いた者は居ない。的を射抜けるか期待がかかっているのだ。

「……」

「なに？珍しく緊張してるの？慧十君」

「これだけ沢山の人の前で始めて弓をひくんだからな。緊張しなかつたらおかしいだろ？」

「あれ？慧十君って人間だったっけ？」

「顔が見えないからって解らないと思うなよ？声真似は意外と上手

かったけど流石に誤魔化せないぞ。聖……」

「やっぱりバレてた？でもさ、少し意地悪するって言ってたからいいよね？」

「フフ……。じゃあ、もつと驚くような悪戯をこつちも考えておかないとな」

遂に始まった。慧十が岡の的、アタシが海の的を狙い合図と共に矢を放った。

『おおおおおお〜！』

慧十が放った矢は的の数メートル後ろにある木の幹に刺さっていた。アタシの放った矢は的と共に波に揺られている。

「アイツらやりやがったよ。数年ぶりにだったか？」

「うん、さすが愛の力かな？やっぱり慧十君の正体はわかんないけど昔に面識があるみたいなのよねえ」

「じゃあさ。どっちかが気付いてないってことじゃない？」

「確実に聖だけだね……」

「だよなあ……。あの天才が変人が忘れるわけないしなあ」

「俺のことか？その変人ってよお」

「げっ……」

その後は二つの神輿が広場でぶつかりあい天災がふりかからないように祈願しながら。

「でもさあ、二人とも凄いバランス感覚よねえ」

「江利子さん！？いつの間に着替えて……」

「貴方達が盛り上がってる時にこっそりね」

「……………。でも、ホントに二人ともよく落ちないよねえ。慧十も

魚街君も楽しそう」

「そうだねえ」。聖も混ざって来たら？」

「無理言わないでよ」

夏休みの最高の思い出になった。残りの滞在期間も楽しかったし江利子さんと暫く会えないのは寂しいがアタシ達は自分達の家に戻って来た。夏休みが終わる頃に慧十が作っていた指輪の造型が送られてきて最後の仕上げと言った意味がやっとわかった。詰め込める指輪は一つではない。これまで慧十が作っていたものが全て詰め込まれ左右の均衡が美しい飾りは今は居間の飾り棚に置いてある。それを見る度に思い出す。あの夏の思い出を。

体育祭に策略家

夏休みが終わりアタシ達は再びもとの生活に戻った。今は慧十が経営しているnight-knightへ行くことがさらに増えたしアタシは周りの客や店員からも既に常連扱いになって、出入りしている小店の数もかなり増えた。だけど、相変わらず本名は明かさず偽名で通っている。それに慧十のはからいでアタシはnight-knightの従業員の制服をデザインしたり服飾関連の仕事をまわしてもらってそれなりに稼げるようになった。そんな中でアタシには来て欲しくないけど毎年来てくれる行事が今年もやって来た。

「体育祭かぁ。嫌だなあ……」

「そんなこと言わないでよ。私が唯一輝ける日を……私は運動しかできないんだからあつて欲しいなあ」

「無駄話はしない。泳も起きろ！お前ら夏休み明けのテストが赤紙ギリギリだったんだからな？自覚しとけよ？」

「誰のせいだと思ってるのよ。全く」

「何か言ったか？」

「いえいえ！何でも！」

夏休み明けにテストを行い結果を見るとみな悲しいまでの結果が帰ってきた。一番勉強してはいないはずの慧十は堂々の学年一位をとっているのが腹立たしい。……が認めざるを得ないのだ。アタシは精神的にまいっていたがなぜ竹華や泳まで？

「慧十……。ここどうやって解くんだ？」

「ここはこの公式を使ってここをこう代入すると……こうなるから。そうそう……そうなるんだ」

泳に教えている慧十を眺めていると竹華がアタシを小突いて話かけてきた。

「そう言えばそっちの進展はあったの？」

「何の？」

「慧十君とのことだよ。決まってるじゃん」

「何も無いよ。慧十は相変わらず受け身だしアタシは今は模索中心だから進展はなし」

「じゃあ、お姉さんの手紙は？」

すぐに慧十が竹華に注意を入れたが泳の質問攻めに合いそちらに向き直った。

「そっちも行き止まりだよ。かなり絞りこんだけど流石に五十人から絞るのは無理があるかな？」

「協力しようか？」

意地悪そうな笑みを浮かべ竹華がアタシの顔を見てきた。竹華はなぜか慧十とアタシが付き合うほうが都合が良さそうだがアタシは出されている姉のヒントを潰さない事には納得が行かない。

「三人とも休憩にしよう……。集中力のかけらも無いみたいだしな」

「ふう！ やつと終わりかぁ！」

「間違えるな……。泳。終わりという訳ではないからな。あとお前はこのあとシフトが入ってただろ？ 松と交代して来いよ」

そう言えば竹華のお兄さんの笹瀬 松さんはアタシの姉、成果と結婚しておりアタシと竹華は血のつながりのない姉妹のような関係なのだ。慧十がお菓子や飲み物を用意しにキッチンに向かった時にアタシは竹華に幼稚園の時の名簿を渡した。

男女合わせて百人弱、ここから絞り込むのはかなり難しい。本人に

会うことはまず出来ないから絞り込む方法が無いのだ。

「ねえ……聖さあ一番今近くにいる人を忘れてない？もしかしたらさ……あの策士慧十君だから実は幼なじみかもしれないよ？彼はよくわからない所が多いし……前から気になってただけなんであんなに慧十君は聖のことをよく知ってるのかねえ？」

「は？、慧十がアタシのこと知ってるなら。それならすぐに……。あ……。確かに無いことはないか。だけど名前の中に緋皇なんてなかったよ」

「じゃあさあ……名前が変わってるのか？」

「どういうこと？」

「聖、名簿をよく見てないでしょ！ここに『慧十』って名前の男の子が居るでしょ？」

「ホントだ……。『東雲 慧十』と『荻原 慧十』か……。どっちかが慧十っていう可能性もあるかもしれない訳ね。」

「まあ、違つかもしれないけどね……。名前のバリエーションは無限だし」

「でもさ。どうやって確かめるの？」

「直接聞いてみたら？」

「慧十がそんなに簡単に自分のことしゃべってくれたことあったの？」

そう、竹華は情報通で調べたいと思った情報はこれまでは全て手に入れてきたらしい……。が、慧十の素性はわからないといつもぼやいている。ネットやお得意のハッ○ー自慢、情報通信で仕入れたネタも胡散臭さいため信憑性にかけるらしく、未だ有力な情報はないようだ。あるとすれば美雪のもつ真実のみだが彼女の情報は彼女が慧十を嫌っているので聞こうにも聞けない。

「一番の謎か。私たちはともかく何で聖にまで秘密にするのかしら

ねえ」

「さあ。何か後ろめたいこととか企みがあるんじゃない？」

「もしかしたらさ。雲英ちゃんに聞けば……」

「それもダメだったよ。アタシが聞いたことがあったけど結果的には聞き出せなかったし少しもそんな情報を漏らさないから全く意味がなかったの」

「兄妹揃って策士で抜け目ない怪盗みたいな奴らか。また面倒くさいね。あとの手がかりは聖の遠い記憶かなあ」

「どういうこと？それ……」

「当事者の一人だって自覚ある？」

そのあとの丸一日中、テストの復習課題をやらせられ慧十のお小言をくぐり抜けアタシ達はみなストレス解消のためにn i g h t - k n i g h t でレジャールームを使用し騒いだ。ボーリング、ダーツ、トランプ、ビリヤード、バスケットほかいろいろ。慧十は終始携帯電話で誰かと連絡をしていた。そういえばアタシ達はあることを忘れていた。体育祭のことを。

数日後

.....

「聖、明日から少し俺に時間をくれないか？体育祭のことに話がある」

「え……。別に構わないけど」

その日の放課後、n i g h t - k n i g h t にアタシと慧十以外にも数人集まった。メンバーはいつものメンバーに新たな二人が加わった。

「よう！今日は俺も客扱いでいいんだよな？慧十」

「聖い！待った？」

「ああ、今日は客扱いでいい。あとは二人がくれば問題無いが……片方に不安が残る……」

「緋皇か。招待感謝するぞ」

「ふん！何でアンタなんか招待されなければならないのよ！緋皇

慧十め」

「俺の店じゃ不満か？なんなら先輩に秘密を暴露……」

「やめーーーーー！」

これでメンバーが揃った。そして、ただ一人この六人の中で二年生の小森 息吹が体育祭について説明してくれた。

「ふむ。やはり個室と粗茶が落ち着くな……。では説明しようか、体育祭については一年のオリエンションと同じように内容は毎年変わる。そこでその竹華嬢に依頼し諜報網を張ったところ」

「そ、情報収集は任せて！今年は人数不特定の生き残り戦らしいね、だけど武器なんかは今の時点ではどうなるかはわからないらしいよ」

「と……言うことだ。で、我らはこの六人で参加するつもりだ。問題は泳と竹華嬢の配置と配置などがある。だが、我らが軍師が最良の策を練ってくれた様だから聞いてみようかのう」

「わかりました。まずは俺……。息吹さんから説明があつたように軍師とオペレーターを担当する。次に聖、大将と弓を使った遠距離射撃を担当。息吹さんと大林は突撃兼攪乱を担当してもらう。最後に泳には装甲迎撃担当だ。ちなみに竹華さんはそのまま観諜を担当してもらう、あとは個々に書類にして配布するから見ておいてくれると軍師としては楽になるから助かる」

的確な割り振りが行われ慧十が個々に厚さに違いがある薄めの書類の束をアタシ達に配ってくれた。その後はみな解散し家に帰るはず

の息吹と美雪、仕事に戻るために竹華を連れて行く泳、泳にエスコートされ遊びに行く別竹華、皆別々に行動を始めた。がここに……。

「聖……もしかして、まだあの変人に興味あるの？」

「慧十のこと？」

「決まってるじゃない！」

「なんで慧十のことそんなに嫌うの？」

「嫌に決まってるじゃない！人の弱みを握って見返りを求めるなんて！だってアイツ自分の素性を隠すために……」

「ために？」

「私の秘密を……」

「秘密を？」

「もしかして息吹先輩のこと？」

「ひ、聖……どこでそれを……まさか緋皇が！」

「見てればわかるよ」

「『相手の好意に一番気付いてない人にいわれた……』」

何やらうなだれているこの大林　美雪は実はブラコン気質が強いお兄ちゃんっ子のようだ。しかし、一人っ子のため兄や弟などはいない。その影響で近所に住んでいて兄の様にしただっている息吹に好意を持つのは当然と言えば当然だと思う？アタシはあまり気が進まないが当人達がいいならいいと思うことにした。

「まあね。アタシは絶対に口外しないし二人だけの秘密にしとくからさ、落ち着きなよ」

「本当か？小指にかけるか？」

「はい、はい。二人とも危ない話はそこまでにして今日は帰りましょうかね」

「え、なんで？」

「とりあえず、聖と大林、俺以外のメンバーはとっくに帰っていることと入口で息吹さんが待ってるからだ」

「うん。じゃあバイバイ！」

「うん！それから緋皇　慧十！聖に手え出すなよ！」

「はい、はい……」

一年の生活も既に折り返しにかかっている。少し寂しい気もするが月日が経つのは早い、これは楽しい証拠なのだろうか。授業の時間は相変わらずかなり遅く感じるが……。それに釣り合わない休み時間の短さにいらつきを覚えながら学校生活を送るアタシだった。

「遂に来たかあ……。この日が『体育祭』……。なんとも言えない脱力感が来るし気は進まないなあ……。それにしても竹華は元気だねえ」

「確かに。でも、彼女にとって最大限輝ける日なんだから今日くらいはいいんじゃないか？」

「誰もダメだなんて言っていないよお。アタシが苦手なだけだからさ」

アタシ達六人は今回のチーム分けでは最小のチームだ。最大はかなりの大所帯になったらしく数は知れない。ただ、一年から三年まで合わせて千二百人弱で小さな軍隊並の数がある全校生徒が割り振られているため相当数になっているだろう。

「流石にこれだけ数が違うとすぐにやられちまうんじゃないか？百人と一人だぜ？」

「だから俺が居るのさ。それに武器の数は圧倒的にこちらが上だしな」

慧十が生徒会という立場を利用して学校に出した条件はこれ、『武器の対比制』。これは人が多くなればなるほど武器の配給が人数ギリギリになり少なければ少ないほど武器の数を増やし指定した武器を配給してもらえするという制度だ。それに加えバイクの使用許可を

押し、引き、宥め、透かし、無理やり認めさせた。

「泳！一当てやりに行きたくないか？これだけ上玉がそろつてるとよお、ブツばなしたいよな？」

「おう！俺も行きたくてウズウズしてたよ」

「なら俺も混ぜてくれないか？そろそろお前の器量を見てみたいしな」

「いいですねえ。では作戦に組み込みます」

アタシ達女子三人に慧十から連絡が入った。因みに通信機は我が清名グループの新作で慧十に頼まれたため父親に許可を求めたところ『緋皇君に使い心地などのモニターをしてもらうから喜んで貸そう。レポートにまとめて渡してくれ』とのことだった。

「女子三人は屋上で待機してくれ。大林、笹瀬の両人は聖の警護だ……頼むぞ」

「了解！」

「聖のためなら仕方ないわね」

慧十達は校舎内にいる敵を殲滅しに行ったらしい。学校が支給してくれた武器は大きく分けて三種類。エアガン、スポンジ武器、回避用花火。用途は簡潔で、しかも上手く使えば戦闘に困ることのない兵器の数々だ。そして、その場退場になるルールはたったの二つだけしかも簡単。手首に付けているバンドにあるビーダマだいの大きさの球を奪われること。大將が奪われるとそのチームが失格となりその場退場となる。もう一つは指定された武器や乗り物以外は使ってはいけないこと。これだけが過酷なことにはかわりない。

「俺と泳で左右を固めます。息吹さんは道の中央を無理矢理突破してください」

「了解した。俺が突き入りその隙に敵を倒すのだな？」
「その通りです。では頼みます！」

そのころのアタシ達女子軍はというと。

「そういえば慧十君と美雪ツチって幼なじみだったよね？」

「ああ、親が知り合いの腐れ縁だ。保育園と中学が一時期同じだったからよく覚えてるよ。あのデリカシーのない馬鹿のことは！」

「私がその嫌ってる理由を当ててあげようか？」

「ほお……。お竹がねえ……。当ててみな！」

「好きな人を当てられパシりにされたかそれをネタになんかを要求された。あ、あとさあ。クラスの連中に暴露したとか」

「もう。ありったけ言ったよね？それさ……。一つじゃないから。って美雪？」

「全てあたりだ……。あの緋皇はアタシを辱めたんだ！挙げ句の果てに詫びることもせず姿を二度も消したんだぞ！」

「殆ど自業自得な気がするけど……。気のせい？」

美雪や竹華と慧十の昔話をしていた。その時、アタシの記憶に一つだけ浮き上がった奥底に封印していたような悲しい記憶。小学生の時に誰かが引越して行ったようだ。思い出したのは『アルバム』の一言だった。

再び慧十達。

「快勝だったな！慧十！」

「序の口さ。これから外の大軍団を全滅させるつもりだからな」

「それでこそ我らが軍師だ。で、どうするつもりなのだ？」慧十は二人と帰ってくるなり作戦実行を告げた。作戦はいたって簡単だが一回のミスも許さなかなり危険なものだ。

「本当に突拍子もないことを考える……。俺達がやられるかもしれないリスクまで考えているとは」

「ま、緒戦は相手が馬鹿だから通じる手でしょうね。息吹兄はどこから行きたい？右側？左側？」

「今更だが高校生になってまでその呼び方が……」

「嫌だったの？」

「嫌ではないから好きにしろ」

「ヤリイ！息吹兄大好き！」

慧十の作戦は簡単で小学生でもおもいつくような作戦だ。まずは囷の二人が敵の大隊に突っ込み注意を引き大将や敵の策士の注意を後方からそらさせることが重要になってくる。次に慧十と泳がバイクで乗り込み、囷の二人を回収して敵の中心を引つ掻き回すのだ。その間に奇襲を仕掛け大将のバンドからボールを奪い逃げる算段になっている。

「こちら竹華。スタンバイ」

「こちら聖、スタンバイ」

「突撃小隊、両人ともスタンバイ！」

「了解！ミッションオペレーションコンプリート。副策は本部より個々に通達する。皆、健闘を祈る！」

「了解！」

美雪と息吹が行動を開始したと同時にいきなりの予想外の襲撃に合い慧十に通信が入った。

「こちら突撃小隊。目数不明の大隊が接近！敵が多すぎる！スポーツ選抜のメンバーが多数確認できる」

「現状は把握した。今から俺がそいつらの注意を引きながら進撃し

てくる敵の大將を撃破する。それまで保たせる」

続いてアタシ達にも通信が入った。

「こちら本部。隠密小隊、聞こえるか？作戦を少し変更する！竹華は敵の右舷に刺撃を仕掛けろ。ある程度削ったら退避して隠れていろ。聖は竹華のサポートだ」

「了解。奥様は私が守っておくからさ！」

「……………」

慧十がバイクでがもう一つの大軍団の後ろに回り奇襲を仕掛けた。その間に泳が正面突破を試みる。アタシ達は慧十の指示通りに動き敵の衛兵を削っていく。校庭のと真ん中で向かってくる敵を次々に返り討ちにしている息吹と美雪。その後……。

「何でバイクが！？ギヤアアアアア！来るなあ！」

泳が前方の敵を退かせ慧十が大將の陣の後ろからジャンプして大將の陣に飛び込んだ。次にスポセン中心の大軍団の大將の目前でドリフトしひるんだ瞬間にボールを奪った。

「玉は頂戴した！」

「まじかよ。アイツ……本当にやりやがった」

「泳！急げ！」

「お……おう！」

慧十達が敵の大軍団の真ん中を突っ切って未だ終わらない熾烈な戦闘の最中を突き進む。バイクは少し改造を加えておりかなり攻撃的な作りになっているため敵は攻撃すらしてこない。横にガトリング砲を装備しているためそれを利用し前方の敵を銃撃していく。

「大林！こつちだ！」

「息吹先輩！」

二人の運動能力はかなり高い。慧十がスピードを緩め横付けすると美雪はするりと乗りすぐに発車した。そのすぐ後ろを泳と息吹が追う。そして受け取った武器でボールを狙い次々に敵を倒す。敵もバルカン砲やマシンガン、各々の持つ武器を使いバイクを狙って攻撃してくるがプロではないためタイミングを外し味方を撃っている。

「慧十？まだ？」

「竹華さんが準備出来ているなら直ぐに実行してくれ。ただ、無理をしないでくれよ。全員生き残って勝つことに意味があるんだ。頼んだぞ」

「うん。了解しました！」

ここで更に慧十が予定を変更し泳と息吹は敵を引きつけ本人達は敵の本隊を目指し突き進む。アタシと竹華はかなり苦戦してはいたが慧十が注意を引きつけてくれたためなんとかボールを奪うことに成功しクリアした。

「とつたあ！」

「竹華！逃げるよ！」

「うん！」

その時、あまりよろしくない状況にみまわれたアタシ達。アタシ達よりも規模は大きいが小型精鋭タイプのチームに囲まれ奇襲を受けている。回避出来る状態ではないしはつきり言えば絶体絶命の状況だった。

「やっぱりハイエナが一番いいかもな。作戦としてはよ」
「くそっ！」

そこに……。

「ホアリアアアアタタタアアアア！」

聞き取りづらい独特な声を張り上げ敵を薙ぎ倒したのは美雪だ。次に慧十が薙刀を構えて殴りつけ始め、敵は自分達が奇襲をしているところに奇襲を受けて完全に度肝を抜かれている。

「覚悟は出来てるよな？」

「フフン！私にかてるかしら？」

慧十と美雪の加勢で完全に敵を打ちのめし快勝を記した。屋上に戻り竹華と泳、他のメンバーで話しをして過ごし競技時間が終わった。多少の襲撃はあったものの軍師に格上げされた慧十の作戦で見事に返り討ちにし全員無事に乗り切ることができた。

「終わったねえ……。体育祭？」

「戦争だったな。見ろよ手足にペイントボールの色がついてるぞ」

「また、厄介なことだ……」

エアガンの弾として発射されていたのはペイントボールだ。体に当たって破裂すると色が付く仕組みで服に付いたりすると落とすのはかなり大変だろう。アタシはクリーニングに出すと決め込んでいたから気にしてはいない。

「泳！帰ろー」

「ああ、先に帰るな……って慧十は？」

「バルカン砲を外してた。すぐ来ると思うよ」

タイミングよくバイクで慧十が現れ直ぐに学校の敷地を抜けて公道を走り抜けていく。バイクで帰っている間にアタシは竹華の言っていたことを考え決心した。マンションに着きバイクを降りて階段を上がりながら聞いてみた。

「ねえ……。慧十。そろそろアタシには慧十の正体を教えてくれないかな？」

慧十はいつもと違う少し強い明るさを含んだ微笑みを浮かべながら階段を上って行く。それについて行くようにアタシはすぐ後ろを登る。そのあと慧十は鍵で戸を開けすぐに中に入った時に……。

「キャッ！」

「早く入って……」

慧十は戸をすぐに閉じてアタシに迫りながら流暢に英語をしゃべり始めた。

「Sorry .

ごめん……

I can't tell you my real .

俺の正体は明かせない

But I can give a hint .

だけど、ヒントは出せる

listen carefully! it is last hint .

よく聞いて！これが最後のヒントだから

『I'm waiting for you .

俺は待つてる

When you can catch up me.」
あなたが俺に追いつく事ができるときまでI believe…….

You can catch up me.」
俺は信じてる……。あなたが俺に追いつけることを。

「慧十？今……」

意地悪い微笑みに変わっている慧十は扉にアタシの片手を押さえつけ口を塞いだ。混乱したままのアタシに呼吸を整える間も与えずに二回目のキスをした。

「ん…………ハア…ハア…………」

「英語訳が出来ればそのまま答えになるよ。頑張って解いてくれ」

そのまま、奥にある居間に向かい更にその部屋の奥にあるキッチンに入っていく。アタシはその場に座り込み少しの間放心していた。だが克明に記憶に残った例の文章が頭の中で響きすぐにアタシを現実に取り戻した。それでも足は小刻みに震え言うことを聞かない。

「バカ……。何でこんなふうにして中途半端に止めてくのよ」

その後なんとか立ち上がり壁伝いに覚束ない足取りでソファに座り深く寝ついてしまったようだ。

「うーん……。今は……十時か……。十時!？」

「そういうこと六時に家に帰って来てその後は記憶の濃いあたりを経由して、ソファに座ったあたりまでは記憶があるのかな？」

「慧十!何で起こして……」

「早く飯食って寝ようぜ。明日は祝日だって言っても聖にはやることがあるしな」

「……………」

その日はすぐに終わった気がした。疲れもあつたが緊張に満ちた一日だった気がする。

「なんであんなに意地悪なのかねえ」

「そりゃあ策士……もとい、軍師だから先の先まで見据えてムード満点のゴールを迎えたいんじゃないの？」

「あのねえ……………」

「で？慧十君の暗号は？」

「いや、英語だからなんとか頑張ってみるよ」

「そう。頑張りなよ」

最終的には慧十に流されっぱなしの一ヶ月になった。でも、英語とはいえ始めて慧十からのヒントが来たのだ。最初で最後ではあるがアタシは満足した。そして、自分の英語のできなさには……………。もう考えたくもない。一応、少しずつ進む解読はまだ一ヶ月はかかりそうだ……。話は変わるが最近、慧十の顔色が悪い。どうしたのだろうか、確かに最近慧十は多忙な毎日を送っている。倒れたりしなければいいが……。

姫と怪盗紳士の正体と……

慧十が急に倒れアタシが看病をしている。アタシは慧十がどれだけキツイ生活をしていたかを知っている。生徒会、店、勉強、を全てこなしているから……。間近で見るとわからないことも多いが最近では遠近二つの距離から見ることができるようになった。アタシはこれからどうすればいいのだろうか。

「コラ！慧十！寝てなきゃダメじゃない」

「仕事は山積みなんだ。できるところでもやっとかないと……」

「病人が何をバカなこと言ってるのよ。いっとくけど慧十の体調が治るまでアタシも学校行かないからね！」

「おい……それは」

医者の話だと二、三日で回復はするだろうが無理は禁物らしい。過度な披露が体機能を崩しそれでも無理に動かし続けた結果だそうだと父親まで見舞いに来て差し入れをした後に更に仕事を増やして帰って行った。

「ねえ、それ何？」

「パーティーの招待状らしい。清名グループ創立百周年記念パーティーって書いてある」

「出るの？」

「もらったしな。一応行くつもりだ」

「……………」『あのクソオヤジい！』」

その夜、慧十はよく寝ていた。疲れの程度は相当らしい。昼間少し話した後からずっとこうである……。

「よく寝るよなあ。アタシと慧十が逆の立場なら襲つてるところだよ……。全く、軍師が何の防備もせずに寝るなんて感心出来ないなあ」
それでも起きない。普通より大きな声を出しているはずなのに起きない。見た感じ狸寝入りしている訳でもなさそうだ。

「大丈夫……だよね？」

慧十の寝込みに悪戯することにした。いつもやられっぱなしはアタシの性分には合わないのでもいつもの借りなどと呟きながら一度二度、頬をつつき起きないことを確認して慧十にキスをしベッドに潜り込んだ。

「はれっ？……慧十？」

「聖？悪戯ならもう少しましなやつを選んだほうがいいと思うぞ？」
朝起きると見事に気付かれていたらしく、アタシの復讐は失敗に終わった。その軍士慧十は次の日から学校に復帰し見事に生徒会長をつとめている。今は文化祭の草案をまとめるのに苦労しているようだ。そして、それは慧十にとってはどうでもいいことらしくあまり関心を見せない。

「ですから！この時間は我が院麗クラスの演劇を見せるために……」
「いや！ここは普通科のライブだよ！会長もギター引けるから……」
「いいえ。ことしこそはバトラーに見せ場をください！我々ほど目立たない生徒達は……」

「なんの！我々スポーツ選抜も部活の紹介をしたいのだ！頼む会長！なんとか！」
『会長！……』

因みに今しているのは各学部がしたい大まかな議案でクラスの出し物は別々にある。そして、アタシは何故か慧十に乗せられちゃったり普通科クラスの生徒会常任理事をしている。慧十が作り上げるシステムには驚かされるがこれは本当にびっくりする案件だったらしい。

「第一に……。院麗の皆さんにも今回は学校の費用で動いてもらうことになるので大きな機材や道具を使うなら諦めてください。

次に普通科クラスはライブをしたいと言ってましたがメンバーや組数などを事前に理事に伝え僕に通していただかないとそれは難しいです。プログラムなどにも狂いがですから。

第三に、バトラーの皆さんの案件については学校のメインホールを使う必要はないので他の会場を用意します。その後は僕がバトラーの理事と話あって決定したいと思います。

最後にスポーツ選抜の部勧誘についてもバトラー同様にメインホールを使用しないといけない意義が全く見えないため却下します。

ですが、スポーツ選抜の皆さんのために僕の友人が一肌脱いでくれたのでこれまで通りに正門の中央道を利用した物を使っていきたいと思います」

アタシや他に三人各クラスから選抜された『理事』というフィルタのような仕事を使い各クラスとのリンクを深めたのが今年の大きな変化。加えて大会議室を利用した代表説明会などがあり小さな事業所よりも確立された運営指針に基づき動いている。

「しかし、それでは毎年の伝統が……」

「僕が皆に見て欲しいのはお金の使い方ではなくどのように効率よく作業をこなしているかです。院麗クラスの皆さんに備わっている力を信じているからこそです」

「会長！普通科のライブはどうするんですか！」

「落ち着いて下さい。まずは参加チームの名簿を作り次に曲目など、それをもとにプログラムの形成をしていく……これがベストでしょう」

「あのお……。お恥ずかしい我々バトラーには案件も何も……」

「皆さんには大いに働いてもらいますから安心してください。まずは会場係としてたってもらいます。駐車場などにいる安っぽいものではなく気品のある態度でお願いします。バトラーの出し物には中庭にカフェテラスを開いてもらいますのでそのつもりで」

「俺達は？」

「簡単ですよ！ユニフォーム姿を見せながらその辺をうろつけばいいんですから。皆さんはその世界では名の売れた選手の方々です。だったらスポーツマンシップを見せる志のある空気を感じさせることが大きなアピールになります。必死に勧誘するより見てくれるやる気のある来訪者を捕まえたほうが効率的にもいいですし」

つくづく思うのは商社の社長や管理職、現場の指揮者顔負けの指揮力と影響力。これが彼、緋皇 慧十の武器のようだ。厚い人望に加え良好な顔立ち、人当たりは少し不安だが高校生とは思えない。

「院麗の皆さんには体育館の全面使用許可を出します。あとは機材なども一応は予算内で当てはめてみてください。出来なければ最大限の譲歩はします。あとこれはサービスです。出演者は衣装を統一した形で各自で揃えて構いません。皆さんにデザインなどはまかせます」

「ありがとうございます」

「ライブの案件は？」

「出演チームにバラつきがあつてまとめるのが難航してます」

「そっちは僕がやつておきましょう。あとの飛び入りや幕間の時間合わせもお願いします」

「了解」

次々に指示が飛ぶと慧十がパソコンを使いいつきに書類整理を終らしてバトラークラスの理事と各所の配置やカフェのメニュー等を文書化し配布した。

「わかります。人数は三百人弱居ますから交代の要員はいくらでも出来ますそれにカフェも和、洋などを分けるのも良案でしょう」

「わかりました。では私達も頑張ります」

「会長。俺達は何をすれば良いんだ」

慧十が文書を作成しながら答えている。アタシはさつきからつつ立つてただけで何もしていないためだんだんと悲しくなってきた。

「スポーツ選抜の皆さんはパソコンの使える方々を中心にビラ作りとマネージャーさん達に声をかけておいて下さい。部活の見学なんかも視野に入りたいので」

その日の会議が終わりアタシはトボトボと廊下を歩いていた。自分と大好きな相手の実力の溝を見せ付けられ軽いショックを受けている。前から慧十が何でも出来ることは知っていたが……。

「聖……。」

Can you finish?

「

「まだ、少し疲れて休憩してるとこ」

「じゃ、悔しいだろうけど時間切れ明日、土曜日にある清名グループ創立百周年記念パーティーの時に半分の答えが出てくるよ」

廊下を歩きながら慧十は残念そうに言った。そして、その半分がわかった時点で慧十から答えを教えてくださいと約束してくれたのだ。確かに悔しいが少し時間がかかりすぎた気もする。

………
次の日

「これだからアタシはこういうのは嫌いなよ。政界の大物に大会社の社長に社長婦人、娘や息子、それに大物俳優や監督。堅苦しいし皆周辺を気にしすぎなのよ」

「しょうがないだろう？お前が今は清名グループの後継者なんだから出席するのが道理だろう。それに緋皇君もそろそろ来るはずだしな」

「慧十が？」

「知らなかったのか？彼は緋皇財閥の御曹司だぞ？」

「それ、ホントに？」

「嘘をつく必要が何処にある？」

アタシの本家は豪邸だ。あんまりこういう建物は好きではない。ダッ広い庭に机をだし料理を乗せてある。だが、その冷めたアタシの空気も彼が来ると直ぐに変わるらしい。

「お久しぶりです。秀造さん」

「君こそ元気そうで何よりだよ。東雲　慧十君」

「は？」

「おや、また開いてはいけない箱を開けてしまったか？」

アタシの頭のなかで何かがつながった。同時に慧十の存在が徐々に更に大きなものになっていくのを感じた。

「ヒントの答えは、『俺は待つてるよ。聖が追いついてくるまで』」
「じゃあ……。慧十は知ってたの？アタシの初恋の人が自分だって」
「ああ、だが少し自身がなかっただけさ。追って来てるのが見えな
いから俺は嫌われたんじゃないかとね」
「……」

父親が近くから離れると同時に話しかけて来た慧十の顔を見ることが出来ないアタシ……。そして、再び慧十が言葉を足した。

「追って来てるはずの相手はさ、自分の行く末までみてずっと先にいた。だから次は俺が……。俺が追いかける番だ」

アタシの目を見て話を続ける慧十の顔を見れなくなり始めた。まっすぐな目を。

「お姉ちゃん？どしたの？いつもみたいにもっと騒いでよ！」

「パーティーは終わったし今はそういう気分じゃないの」

「おかしい……。絶えっ対おかしい！お姉ちゃんがこんなふうになる理由はただ一つ！」

アタシの妹の那流は単脳で猪突猛進型の性格をしている。直ぐに隣の部屋で父親の晩酌の相手をしている慧十の腕を掴み自分の部屋に連れ込んだようだ。

「慧十さん。お姉ちゃんどこまで行きました？」

「言っている意味が複数あつて理解に苦しむがそれは俺と聖の関係のことかい？」

「そうです。気付かないんですか？お姉ちゃんの素振りを見て……

絶対！絶対！絶対！絶対！絶対！絶対！気付いてますよね？」

「じゃあ、この写真の裏を見てみなよ」

慧十が見せたのはアタシが自棄になつて切り取つた写真と慧十が持っている実物だつた。

「もしかして……」

「理解した？」

「はい。二人ともどうしようもなく一途ですね」

その頃のアタシは父親に呼ばれ慧十の代わりをしていた。

「聖、緋皇君から過去は聞いたか？」

「え……。ただだけ」

「そうか、じゃあ。彼と結婚は考えてないか？」

思わず100%オレンジジュースを吹き出しそうになつたアタシに父親が更に言葉を次いだ……。

「これは食後のジョークとか余興とかではない。真面目な話だ……。聖も十六歳になった。わかっているだろうが姉の成果は駆け落ち同然で結婚した。まあ、はつきり言えば止めはしなかったが。そろそろ決めておきなさい。あとは彼から過去を聞いておきなさい。いずれかはわかるがそろそろ慧十君にも波がくるはずだしな」

意味ありげな言葉をいい父親は慧十の所に行くように指示し妹の那流を呼んだ。

「慧十？」

「呼んだ？」

慧十は屋根裏にいた。月を見ながら何か小瓶のようなものから大きな氷の入ったグラスに液体を注いでいる。それを飲みながらこちらに視線を移した。

「答え教えてよ」

「わかってるよ。今夜は俺もアルコール回しとく気分だし飲みながらでいいか？」

「別にいいよ」

かなり壮絶な過去を持っていた。両親は小学校に上がった頃に飛行機事故で死亡。その頃父方の祖父母は既になくなっていたために母方つまりは緋皇家に引き取られた。そのせいで引越しも多く離れなくてはいけなかったらしい。

「今となつては昔の話さ。で、聖が飛び出して来て俺と再開したわけさ」

「むう……。あの時の話はなしにしてよ」

「そんなに恥ずかしいことじゃ無いと思うが？むしろ俺は聖に追い抜かれた気がしたくらいさ」

「何で？」

「自分の夢があつたから」

「それだけ？」

「俺に取ってはそれだけじゃないのさ。いくら努力して力を付けても目指すものが無ければ意味がないのさ」

アタシは目を見開いていた。自分の遙か彼方の先を走っていると思
っていた慧十からいきなりアタシの方が優れていると言われしかも
真っ直ぐ目を見て云われたからだ。

「……………」

「どうした？」

「慧十はずるいよ。少しは人のことも考えて動いてくれないと」

そこに姉の成果と那流がやって来た。慧十が挨拶すると那流が慧十
の背中に抱きつきアタシに話しかけてくる。

「いいなあ、結局はお姉ちゃんがさきだったね。慧十兄様！こんな
不束な姉ですがよろしくお願いします！」

「ちよつと！那流！」

「私からも頼むわ。この男っ気のない子を幸せに……………」

「あのさ……。二人ともそんな先のことを……………」

「キヤー！先ってことはそのつもりなんだ！」

「ハハハハ！」

初めて聞いた慧十の高らかな笑い声。アルコールが入っていること
も関係しているがそれでもアタシや姉、妹もつられて笑い出した。
その後は一階にみなで二次会らしきパーティーを開き夜半まで続い
た。

……………
数日後

……………
文化祭前日に慧十はアタシに図られたことに気づいた。

「すみません。ライブのプログラムに何故俺の名前が？」
「ああ、昨日の夜に清名さんから連絡があつて緋皇君と二人で締め
の校歌の演奏をすると。何か変更することがありました？」
「……………。いや、問題ないです。それより院麗クラスのリハーサ
ルに行くので魚街に来るように伝えるください」
「わかりました」

院麗クラスの演技派が揃った舞台。それは私立の劇団にも及ぼうか
という実力を持っている。アタシは携帯電話で慧十に呼び出されそ
ちらに向かう。途中で水泳部のユニフォームとマネージャーのジャ
ージを着た魚街夫婦に出会い合流した。

「凄いねえやつぱり本物を見てきた人たちは違うのかなあ」
「だろうな。一流になるなら一流の物を盗まないと」
「慧十はどこだろ？」
「聖？旦那さんをすぐに見つけられないようじゃまだまだだよ？」
「でもよ？ホントにどこだよ」
「アタシの予想舞台裏」

そのとき背後から少しくもった慧十の声が聞こえて来た。

「ハズレ…………早くどいてくれよ」
「慧十？どこ？」
「泳凭れるな！」

どうやら扉の後ろらしい。扉は厚く重い、その横にいた慧十は上手
いこと扉の裏に隠され出ようと押し返していたようだ。だが、実は
扉は泳によって押さえつけられておりいくら慧十でも同じくらいの
体格の男子を扉ごと押し退くことは出来なかったようだ。

「悪い悪い……。慧十が居るとは思わなくてな」

「で、話って何なの？」

「そうそう、そういえば奥様とライブに出るらしいじゃない」

「ああ、今回はその話をするために来てもらった」

流石、軍師。アタシの意思を壊さずに上手く泳と竹華を混ぜ込んだようだ。ライブは全部で4組みでるらしい。そして、竹華と泳が了承しチームを結成した。

「ねえねえ。アタシはピアノできるけど竹華と泳君は何をするの？」

「私はクラリネットが出来るの」

「俺もそうは見えないがサックスがいけるぜ」

「で、バラードや調子を落とす場面で俺を利用する訳さ。別に管楽も出来るが……」

「じゃあさ。聖はキーボードいける？」

「うん」

「慧十君はベースでアタシがパーカス、泳はさ後は何が出来る？」

「俺だつたらベースを二人で俺と慧十、キーボードが聖ちゃん。パーカスは竹華がベストじゃないか？と思うぞ」

ロックやジャズなどもやるらしい。その他にも慧十とアタシの二人、竹華と泳君のユニットだけでやる部分を作り出しプログラムを慧十が再編した。しかしそれは役員の他の生徒意外誰にも配布されず当日のお楽しみになって軍師の策略が見えて来た。

……
次の日

天気は快晴、風も爽やかで気持ちがいい。慧十が 指示した通りにことは進み仕事が特にならないアタシ八校舎の更奥にある小さな丘の芝生が生えている場所で寝転んでいた。秋を誘った風は今は少し肌寒いが日が照ってくれたおかげで暖かい。

「十年か……」

慧十にもらったダイヤの指輪を日にあてながら眺めていると見覚えのある男子が近づいて来る。泳だ。

「いたいた。慧十が探してたよ」

「え……。アタシは仕事はないはずじゃ」

「慧十はバトラーの連中の指揮をしてるよ。変わんないよな、アイツもさ。ホントに不器用でまどろっこしい」

「え？慧十のこと？」

「ああ、アイツは人の感情が読めない訳じゃないんだ。照れ隠しとか思いやりとかが先に出て自分の意思を消しちまう。だから、できるだけアイツには積極的にぶつかって欲しい。元が受け身なヤツだしな」

「で？泳君は 何を言いに来たの？」

「慧十の伝言と竹華の意思と俺のアドバイス」

結局は流されるままに時間が進みアタシは慧十にエスコートされ院麗クラスの演劇の視察をしバトラー、執事メイドクラスのカフェテラスの様子見などをしながら久しぶりに二人で人前を歩いた。文化祭ということもあり一般の人も多い。そんなとき

「なあ、緋皇の相手って輝織さんじゃないか？」

「え？どこどこ？ホントだ！」

「マジで？あ……。確かに輝織さんだな。そう言えばさ、俺たちって誰一人としてあの人のこと知らないよな？」

「聞いてみればいいだろ？」

「俺はオーナーと張り合うのは無理。全てにおいてあの人に勝てると言つか近くにいることさえできない気がする」

「……………。みんな同じさ」

「どうした？赤石、佐藤、飯沢？」

「オーナー！？」

慧十がこの文化祭を通して実現したかったことそれは、『推薦枠』の導入だ。地域の有力者にうったえるために利用するのに効果的らしい。ライブや劇場は生徒の生き生きした姿をみせる段階にしかすぎない。恵まれない意欲のある学生をより多くこの学校に導きたいらしい。

「オーナー……。そんな壮大なこと考えていたんですか」

「私も初耳よ」

アタシは未だに素性を隠しているため言葉使いも少しずらしている。

「輝織様はいつオーナーと知り合ったんですか？」

「私は姉の紹介で緋皇君と知り合ったのそれ以上は聞かないでね。一応、私にも理由学校あるから」

冷や汗ものだ。慧十は笑いながら紅茶を飲んでいる。

「じゃ、三人とも頑張つてな」

「はい」

「わかりました」

「頑張ります」

再び院麗クラスの演劇に戻った。巷で有名な劇団が行う演目をアレンジして行う。『オペラ座の怪人』などがよい例だ。

「また、甘い恋愛を使ったもんだ。次が『オウガバトル』だからかなりギャップがある」

「だからさ、批評はしないの！みんな一生懸命なんだから」

「一生懸命なのはわかるが少し順番がな」

時間が経つのが早い午前中にふて寝をしていたがすぐにアタシ達の出番がきている。

「はあ、慧十を驚かしてびっくりする顔を見ようとしたのに自分が緊張して固まってるよ」

「確かにプログラム見た時は正直びっくりしたが本番になればどうってことはないな」

「うー……。結局アタシがまた負けたのか……」

「そういうことになるな」

慧十のいう通り始まりますしまえはどうってことはなかった。まずはアタシと慧十のピアノとバイオリン。その瞬間に大きなざわめきが熾きたが直ぐに演奏を始めみな静まった。オープニングは割合緩やかでバラードに近い洋楽だ。次に他のバンドがロックで入り、三番目に竹華と泳がそれぞれクラリネットとサクソでユニットを見事に決め盛り上げた。次に音楽教師とその友人に竹華が加わったクラリネット五重奏を聞き次にアタシ達のロックが始まった。

「ああ、楽しかった。ふふふ」

「久しぶりだったな二人で何かしたのは」

「そうだね。あゝあもう終わりかあ」

「そういえば聞いてなかったな俺が御曹司で緋皇財閥の跡取りだつて知ってた？」

「正直、面食らって整理が付かなかった。けどこれだけはわかる。

慧十は慧十だよ」

その夜7時半まで後夜祭を楽しみ各々帰宅して行った。片付けは外においてあるテラスよりの机と椅子、あとは細々した機材やゴミなどだった。それも残りの生徒で終わらせアタシと慧十は最後まで残り生徒会室で仕事をしていた。

「慧十さ。もしアタシと結婚したらどうするの？」

「家をでて二人で暮らすか清名家に婿養子に入る」

「……………」

聞いたアタシが恥ずかしくて固まってしまい少しの間沈黙が続いた。慧十は優しい微笑みを浮かべたままパソコンの画面上に出てくる文字を確認し保存した後すぐに電源を落とした。そしてアタシが進む少し後ろを歩いているのだ。下駄箱付近の廊下を抜け職員室に鍵を戻し靴に履き替え駐輪場に向かった。慧十の何気ない行動を観察することが楽しくてしょうがない。最近の楽しみは日記に慧十の観察記をつけることだ。だが、彼との距離が縮まるに連れ少し問題が大きくなって行った。そして冬休みに遂に火種が燃え移り聖と慧十に向くのだった。

怪盗と待ち姫の未来

アタシが理事長室に呼ばれた。体には全身が氷ついたような感覚がする。教室を出るとすぐに人気のない廊下に白銀の髪に細身の体躯の男子生徒が歩いているのが見える。その少年が振り向き話かけてきた。慧十だ。慧十の少し悲哀を含んだような声が聞こえ更にアタシは氷ついた。

「バレたみたい……。俺も聖もな」

「……………。これからどうなるの？」

慧十が歩幅をアタシに合わせて歩き、無言のうちに理事長室についてしまった。慧十がドアをノックすると中からすぐに返事が帰ってきた。

「緋皇 慧十君と清名 聖さんですね？アナタ方には事情があったようですが二人とも財閥系の企業の出身です。今月をもってアナタ方二人には院麗クラスの上層課程クラスに入ってもらいます」

「一つ質問してもいいですか？」

「どうぞ」

「告発者がいるはずでしょう？誰ですか？」

待っていたかのように奥の部屋の扉が開き二人の生徒が広い応接間のような部屋に入ってきた。一人は見覚えのあるイヤな顔、夏海扇華でもう一人はアタシが知らない男子生徒だ。抑揚のある関西弁で喋りかけ慧十に向けて嫌な視線を当てている。

「久しぶりやな？緋皇慧十……。何年ぶりやろなあ。十年前からか……………」

「黙れ……下種が」

「おお！怖い怖い」

「久しぶりね聖」

「……」

アタシは初めて慧十の迫力があり凄みの効いた声を聞いたきがした。アタシが見ているのに気づくとすぐに慧十の顔が元の顔に戻り理事長に一礼して扉に手をかけアタシを促しすぐにその部屋から出ていった。

「……」

「慧十？」

「済まない。取り乱したな」

「う…うん」

その日の授業や休み時間に慧十に話しかける者は誰一人としていなかった。いつになく厳しい顔立ちに無口だからだ。アタシには優しく接してくれているがそれでもかなり怖い。

「家に帰ったらことの真相を話す……心して聞いて欲しい」

「え？……うん」

竹華や魚街にも不信感があつたようだが魚街が竹華を止めていた。慧十が本当に怒りを見せている姿のようだ。お調子者の魚街ですら警戒するその雰囲気のアタシもキツかった。マンションにつき部屋に入ると慧十がアタシに向き直り話してくれた。

「アイツは俺の宿敵の息子なんだ。俺の両親を殺したのはアイツの親父。大坂 公康だ、そして成り上がりの親父が気に入らなかった他の財閥の会長や社長はみな口裏を揃え揃いも揃って親父、東雲

慧夜の財産を奪っていった。今のお袋の爺ちゃんに助けてもらえたのはあの店だけだ。俺は努力を惜しまなかった。全てを取り戻すために」

「……でもさ。慧十のお父さんがあの大坂って人に殺されたっていう証拠は……」

「ある。だが十年経っちまった。だから俺はアイツ等から全て取り返すことを目標に生きてきたのさ」

「ねえ、アタシに協力出来ることはないの？」

「気持ちだけで十分だ。それに俺も命を狙われてる。だからあんまり姿を見せなかったのさ。そんで十分に力を付けたからそろそろ俺の正体を経済界に見せつける時が来たわけさ」

いきなり慧十はアタシを抱いてくる。少し力が入っていて苦しいが嫌ではなかった。そして長い間その状態のあとアタシに向かって話しかけてきた。

「俺は聖に頼みたいことがある。俺を待っていて欲しい」

「へ？」

「俺がいることで聖に辛かったり危険な目には遭わせたくない。だから、俺が行くまで待っていて欲しい。あくまでもこれは聖の意思にまかせるから」

「……うん。待ってる。慧十ならすぐに来てくれるって信じてる」

慧十は微笑み彼の指輪をアタシに預けるといいアタシのネックレスに通してくれた。そのあとは慧十が受けた院麗クラスへの移行についての説明を詳しく話してくれている。彼の話では今月までは普通科の現在のクラスにいていいらしい。それまでに学会側にはカリキュラムの整理があるらしいがアタシと慧十は院麗クラスの中でも上格に位置する上院クラスに転進するようだ。院麗は4クラスに分けられ上院クラス、中院学力クラス、中院クラス、下院クラスに別れて

いる。

「俺達は家の実力も学力も院麗クラスでは相当高いはずだ。だから今だ五人しか生徒の居ない上院に入るらしい」

「院麗クラスもクラス分けがあつたんだね……ただの金持ちクラスかと思つてた」

慧十の話では選別は格差社会の縮図らしい。上院は大金持ちか中院クラスの財力に相当高い学力があれば入れるらしい。

中院学力クラスは上院には入れないがそこそこの学力のある者が集まるクラスだ。

後の2クラスは権力や経済力、学力に比例した順位付けで決められた下位ランクの生徒達で構成されている。下の二つのクラスが四分の三以上をしめておりあまりいいバランスではない。

「そつといえばお父さんから聞いたただけどさ。再来週の週末にパーティーがあるらしいんだ招待状は……。あつたあつた。慧十は参加するの？主催は……あれ？東雲　慧十！？」

「まあ、主催者だしな。最近、俺が会社を立ち上げたのさ。元親父の会社の重役や社員を全員雇用し秀造社長にも共済を依頼した。それに爺ちゃんの会社も共済を組んで今や日本でも有数の大企業さ。そして、それが今回の餌になる訳だ」

「どういうこと？」

慧十はかなりの策を用意していた。アタシの家は代々の家系があり潰されることはないが慧十の一族の会社となると話は別になるらしい。周りの重鎮企業はこぞつて慧十の会社を潰しに来るだろうということだ。ところが慧十の共済の相手はここだけではない。まだ隠している状態だが日本剣道協会、大林組、日水連、アメリカの自動車メーカーやヨーロッパの周辺を牛耳るデザイン業各社が慧十に協

力しているのだ。その秘密はNIGHT-KNIGHTに秘密がある。と……ここまで説明してくれた。株を買って買収行動を起こした所に他の大企業から逆に買収をし潰してもらうという算段だ。

「改めて思う……。凄いね」

「いや。凄くはないと思う。親父の知り合いの息子にことの真相とグループ結成後の利益を教えたただだからな」

「で？アタシは清名家としてパーティーに出るけどどうすればいいの？」

「ずっと愛想を振り撒いてくれればいいよ。あの大坂　環に目をつけられないように」

「……。わかった。やってみる」

今月は十一月だ。アタシの父親がアタシに対しての御見合いが来たと saying ていた。父親は正直に言えば形式だけでいいと saying ていたためアタシは正直ホッとしている。なぜなら相手は慧十の宿敵の大坂　環だったからだ。確かにルックスや学歴はいいが性格がイヤだった。

「お初にお目にかかり光栄です……。大坂　環と言います」

「清名　秀造とこちらが娘の聖です」

この男はズル賢いように感じる。慧十は確かにそれなりに頭はいいし奇策を使うがそれでも正攻法で向かっていくだろう。だがこの環と言う男には気を抜けない不振感のようなものを感じた。確かに慧十が嫌う理由もわかる気がする。

「聖さん？そんなに緋皇のことが好きですか？」

「フフフ……。どうでしょうね？彼は軍士、アタシの心内を読んです。アナタもそれなりにあるのでしょうか？そういう所が」

「聖さん……。アナタも相当頭がキレるらしい。ならお家のために

この俺と結婚する方が得になると思いませんか？」

「どうして？」

「おや、俺を試しているのかな？清名家は幕末の開国時に起業し今や巨大な財閥になっています。しかし、緋皇家、東雲家は最近、成上がった極小かつ歴史、権力のない家柄でしかない。それに嫁いで先のない人生を歩むより俺の会社の社長婦人になった方がいいと思うのですが？」

清名グループは確かに開国時に父方の祖先が作り上げた大きな会社だ。しかし、その会社は戦後に一度解体され百年前に再結成されたもの、アタシはあまり自分の地位に関しては考えたことはない。それに興味もない。だが、流石にここまで慧十のことを馬鹿にされると腹立たしい。それでもグツと我慢し慧十に言われた通りに軽く流した。

「アナタも面白い人ですね？私は清名グループを継ぐとは一言も言っていないですよ？今日のところはこれぐらいにして扇華を口説いたらどうですか？アナタとならお似合いだとも思うのですが」

父親は近くから心配そうに見ていたが安心したようにアタシから目をそらした。本家の正門からリムジンがいなくなり閑散とした門扉の近くに慧十の大型が止まっていた。本人もそのすぐ近くで何やら雑誌を読んでいる。アタシに気づくと雑誌をサイドアタッシュに入れたバイクのスタンドを倒し近づいて来る。

「どうだ？あの下種野郎の手応えは」

「最悪よ。占め殺してやろうかと思った！」

その会話を聞いていた父親が慧十を招きいれ中で話始めた。慧十は何やら父親に物凄い提案をしたらしくいつになく驚いた顔をした。

「しかしなあ。失敗すれば本家を失うんだぞ？それでもいいのかい？」

「その時はその時で何とかしますよ。剣一だって馬鹿じゃないですし」

「だがなあ……。いくら君が現世の貴公子だったとしてもだよ？相手との対比は五分と五分だ。確実に勝てるものではない」

「戦に“確実”はありませんよ。それに雲英の婚約者にも協力を仰ぎました。ここが大きな分かれ目でしょうね。重鎮改革派の仲間が親の代から離脱してくればかなり戦況は楽になります。そろそろ雲英達が来る頃です」

確かに慧十のいうとおり二人乗りのバイクから降りたうちの一人が玄関で呼び鈴を鳴らした。ヘルメットをとって顔を確認すると確かに雲英だった。

「すみませ〜ん！」

「いらっしやい。雲英さん」

「秀造社長！すみません御身自ら……」

「いやいや、気にすることはない。で、そちらが……。婚約者の方ですか？」

「はい。自己紹介して」

「一角　正純と言います。以後よろしく願いします」

アタシは慧十と話せず実は退屈していた。せつかく和服に着替えているからもつと見て欲しかったのだが仕事が絡むと少し人が変わる慧十には何を言っても無駄だ。

「一角財閥ですか……。確かに重鎮中の重鎮。でも何故アナタはこちら側に？」

「先輩の影響を受けたからです。先輩の店では僕のように素性を隠

している社員ですら分け隔てなく仕事を与え相応の対価も与えてくれます。ですが、今までのように地位や権威が力として成り立つならばこれは既に出遅れ状態でこれからの経済にはついて行けません。なぜならアメリカやユーロ圏では既に実力や手腕のある人が指導者として動いています。馬鹿の御曹司などは次々に排除され努力し力を付けた物が這上がってくる。そんな社会にすれば経済と他のバランスも保たれるでしょう。それに僕も馬鹿の御曹司とは一緒にされたくないですし」

「ハッハッハッ！君もなかなか言うな！なら彼と共に国内で同土を探したまえ。私は国外で当たってみよう」

「ありがとうございます！」

正純と慧十が中から出て来てアタシと雲英に声をかけてきた。雲英は慧十より少し黒ずんだ銀髪をしていて光の当たり加減によっては紫に見える。ライダースーツを来ている彼女の姿はモデル宛らの体系をもろに見せ付けている。女のアタシでも惚れ惚れしてしまうような美人だ。

「聖！待たせたな」

「ごめんよ。雲英」

「ホントに遅いよ！でもさ……正純君だっけ？いくつなの？」

「僕ですか？今年で14です」

「ふえ！？そんな早くから婚約できるの？」

「婚約だけならな」

そこに更に慧十が呼び付けた剣一という少年とアタシの妹の那流が加わり話はいろんな意味でヒートアップした。

「なんだよ！兄貴！休日くらいゆっくり寝させてくれよ。あれ？雲姉もいるし……今日は総会じゃ……むげがんぎ！ぐばあああ！」

「気にするないつものことだからな」

「……………」

そう、雲英ちゃんは実は14歳にして女暴走族、レディース…“燕”の総長をしている。巷では有名ならしいが本名は誰も知らないためわからないらしい。因みにあだ名は“銀鬼”。

「ふあああ……。騒がしいわねえ。あれ？お兄ちゃんがいる！何で？」

「俺が居ちゃいけないか？」

「あああああ！なんでアンタが！まさか！まさか！まさか！兄弟なのお！」

「……………」

アタシも慧十に弟がいたことは知っていたがそれ以上は知らなかった。実は那流と同じクラスらしい。

「で、雲英？お前等の準備はいいのか？」

「大丈夫よ。兄上を頼る時は相当困った時くらいにするって二人で決めたの」

「これからお兄さんと呼ぶことになりましたがよろしくお願いします」

「そんなに改まらなくていいよお。どうせ慧十のことだし直ぐに…」

…あつ…………すみませんでした」

「うん、よく止まったな…………次言おうとしたら……………」

「……………」

生唾をのむ音がもろに聞こえたらしく周りの四人は興味津々のようだ。

「なんでアンタがここにいるのよ！」

「兄貴に呼ばれたんだよ！文句あつか？」

喧嘩する程仲がいいとはまさにこのことだろう。そこへ更に魚街夫婦が加わりいよいよ収集がつかなくなった。明日は日曜だからいいものの次の日が平日だったらこうもいかなかっただろう。たまにはと雲英の誘いがあり緋皇邸に行くことになった。

「聖。ほら……メットは被っておけよ」

「うん。ありがと」

バイクが四台。

慧十のエアホーンS・44型

魚街のロードスター・フルスポーツ

雲英ちゃんのイーグルハンター・CA型

剣一君のオウガ・2000型。

全てスピード性能や型が改造されており運転は容易ではないが運転手達は気持ちよさそうに風を切って公道を抜けていく。途中から脇道に入り慧十の案内で小さな丘をいくつか過ぎると和風の大きな壁が見えてきた。慧十が左手を上げ後ろにスピードを下げる合図をし皆緋皇邸にバイクで正面玄関から入って行った。

「すげえ……。慧十、お前さ。ホントに御曹司なんだな……」

「まあな、だが俺は一応この家は継がないつもりだ。この剣一が継いでくれるさ」

「兄貴……なんで」「俺が一番信用の置けるやつはお前だ。だがな、そういうヤツは少し遠いところに配置した方がより強みを出してくれる。だからお前は本家の跡継ぎなんだ」

「……」

「で、この義弟は俺のライバルで泳は俺の親友さ」

歩きながら慧十の話を聞いていた剣一と魚街、正純はすこし真剣さを帯た顔立ちだがすぐにいつもの顔立ちに戻り緋皇邸に入った。

「わあ！和室だあ！」

「畳のいい香り」

竹華がここに着て初めて口を開いた。慧十とアタシのことを見ているようだ。

「やあ、皆さんお揃いで」

「只今、爺ちゃん」

「おお、慧十か。清名の若から話は聞いておる。遂にこの日本の経済の中枢で全面戦争を始める気じゃな？」

「その話はまた後で、今は客を連れてるからな。今晚は宴会でいいよな？」

「騒げ！騒げ！ハハハ！子供は元気が一番じゃぞ！」

そんなこんなでアタシ達は皆、緋皇邸に泊まることになった。カレンダーを確認すると月曜日が休日になっていることがわかったのだ。部屋は二人一組だ。約二名文句を言ったが慧十に沈められすぐに納得したようだ。その夜はアタシは那流と同じ部屋で寝ていたが那流が居ないことに気づき外にでた。すると意外と簡単にみつかり少し拍子抜けしたが少し話声がしたので聞耳を立ててみた。

「なんでアンタは学校では東雲なんて名のつてるのよ」

「本当の名前は東雲なんだよ。まあ俺は覚えてないが諸事情があるらしい」

「ふーん。アンタさんなんですって学校で女の子に話かけられてるのにあんなにそっけないの？」

「好きでもない奴らなんか興味無い」

姉として妹の性格は熟知しているつもりだ。こういう時の那流は実は相手に興味ありだがいえない俗にいう“ツンデレ”なのだ。一度

慣れてしまえば那流は猫のように甘え出すタイプである。

「じゃあ、誰に興味あるのよ」

「お前の姉ちゃん」

『ええ！アタシ！？』

「ダメだよ。お姉ちゃんはお兄ちゃんにぞっこんだから」

「姉妹つてにるもんだな。兄貴のいうとおりけっこう鈍いなお前さ」

「な！！どついう……ん！！……」

『うわあ……。大胆……。ってちよつと待て？アタシは今遠回しに馬鹿にされたのか？』

「……っん！ぷはっ！いきなり何すんのよ……」

「言葉で言えないことは行動で示すタイプでね。俺は」

「アナタもそっくりじゃない。ひねくれた正確に大胆不適な行動で……。お姉ちゃんが落ちる訳だよ。ホントに怪盗はだてじゃないのね。人の心を鷲掴みにして持っていく」

その時、音もなくアタシの背後の襖が開き口と腕を押さえられ引きずり込まれた。実はそこは慧十の部屋でアタシがいるのに気付いて直ぐに手を打ったようだ。

「慧十！ばっ馬鹿！どこ触って！」

「少し騒ぐのをやめてくれないか？聞こえないだろ」

「むう……」

剣一君は慧十とは真逆の性格で何も包み隠さずに突き進むタイプのようだ。

「行動で示してくれたのはいいけどさ、それで私が悲鳴でもあげたらどうする気だったのよ」

「考えなんてねえよ。俺は兄貴のあの慎重さが大嫌いだ。まどろっ

こしいことは嫌いでね、直球勝負。悪いか？」

「何よ。それ……まあいいわ。私のファーストキスを奪ったことは許してあげる。これから私を幸せにするならね」

「兄貴の言う通りか……」

「は？」

「ムードは考えろよ……だとさ」

「フフフ！流石、軍士慧十兄さん。必ず私を社長婦人にしてよ？」

まったく、この兄弟ときたらと心の中で思っているアタシだった。結果的に那流もやつと安住の地を見つけた訳だからいいことにしよう。

「ねえ、慧十。アタシもして欲しい」

「キスか？」

「うん……」

夜はまだまだ長い。慧十の部屋は本当は魚街がいたはずだったが結局は各カップルでそれぞれの部屋に別れて寝ることになった。那流もどうやら剣一君を連れ込んだようだ。アタシは慧十にキスをしてもらったあとは彼に抱かれまどろみ寝てしまったようだ。

「おっす！皆」

「魚街の兄さんは元気だなあ」

「剣一は少し疲れたみたいだな」

「ふう、皆さんおはようございます」

「あ、雲英ちゃんおはよう」

面々が顔を揃え帰る準備をしている。そのあとはそれぞれのバイクに乗り送って帰る組とそのまま帰る組で途中で分岐した。

「慧十……。冬休みはどこか行きたいことがある？」

「特にないが……。どうした？」

「ん、またアタシ達の別荘に行こうかなって思っただけ」

「山か？」

「うん」

「じゃあ、ボードが必要か」

そんな話をしながら帰り来週のパーティーに備えるアタシ達だった。最近竹華の影響からか露出も気にならなくなり毛糸にコーディネートしてもらうのが楽しみの一つになりつつある。

数日後

「ようこそおいで下さいました。お集まりいただいた皆様に東雲

慧十社長からお礼と挨拶がございます」

「今日、この会場にお集まり頂いた皆様に感謝の言葉を申し上げます。加えてこれからの経済発展のため……………」

正直、長い。だが普通はこれくらいらしい。やっとよくドラマとかでやっている乾杯のシーンのようなことをするようだ。

「では！これからの発展に！」

『乾杯！』

慧十の言うとおりアタシは愛想を振りまくことだけで精一杯だった。場慣れしていないせいか疲れも激しい。慧十は剣一君に司会と進行を任せ要人と話している。そして、アタシに気づいたらしく話を切り上げこちらに歩いて来てくれる。

「大丈夫か？」

「大丈夫……じゃないかも」

床は柔らかい絨毯でアタシの靴はヒールの高いピンヒール、服は動きにくいぴったりするドレス。動くだけでかなり辛い。今は慧十が助けてくれるから大丈夫だがいつまでもそういう訳にはいい。

「緋皇さん？その方は？」

「清名財閥の聖さんです。今回は秀造氏のご都合の関係で妹の那流さんとともに出席されているのです」

「そうでしたか。では、お二人ともごゆっくり」

アタシの目が点になっているところに那流が現れた。こちらは普通のハイヒールに裾の短めのドレスでキュート感のあるデザインだ。どちらかと言うと大人びた感がある。剣一君はいつもは滑らかに流している前髪を後ろに倒している。慧十はいつも通りの髪型でいるためあまり代わり映えはしないがタキシードを着ているのを見るのは久しぶりだ。

「まったく。お姉ちゃんはパーティーに出なさすぎ」

「お兄ちゃんも甘やかさないの」

「ハハ……。だけど足挫かれても洒落にならないしな」

「むう……」

「二人とも。義姉さんをそんなにいじめない」

アタシと慧十はnight-knightにいる時とさして変わらない時間を過ごした。帰る時には足も大分楽になり正直ホッとしたマンションに着くとまずはソファに横になるアタシ。慧十はすぐに

着替えアタシにシャワーを先に浴びるように伝えた。こんな日常も今年限りになってしまう。院麗クラスに転進すれば自由はない。それまでにアタシは慧十と思いつきり楽しむと決めていた。12月と1月上旬は冬休みになる。それは夏休み同様に宿題などはない。アタシは冬休みにも慧十と過ごすことにした。少し、危ないかけただ。

思いは永遠に

冬休みになり今日から1ヶ月と半月これから学校には行かなくていい。慧十とアタシはアタシのプライベートな別荘に向かっていた。海辺の別荘よりも規模は小さいがアタシにとっては充実した造りになっている別荘だ。それにそこは実は慧十との思い出の場所でもある。アタシのプライベートだから家族や使用人さん以外はここに来ることは滅多にないし事実、アタシもここ三年は来ていないためかなり久しぶりな感じがする。

「クスクス……。慧十はさアタシと再開してから何ヶ月経ったか覚えてる？」

「4月4日。俺の誕生日から8ヶ月つてどこか？」

「そうそう。思えばいろいろあったよね。最初はなんて几帳面なやつだ……。って思ったけど今はその人が一番大事な人……。あんまり深い意味は無いけどさ、アタシも慧十と一緒に隣で戦ってたいってことは覚えててね？」

「ああ、無事でいてくれれば何をしたらって守ってやるよ。まあ、聖が雲英と暴走した時は完全に騙されたけどな。守ろうとしてた相手が逃げるってけっこう切ないもんだぜ？探しても探してもいないからかなり混乱したんだぞ……。まったく……」

「エヘヘ……。アタシ、そういうときだけ悪知恵働くんだよねえ。」

でも、なんで車に引かれたの？そんなに焦ってたの？」

「言っておくがさっきのは誉めてないぞ？事故の原因は相手が無灯火だったからで、けして俺が飛び出した訳ではないぞ」

そこで会話が途切れアタシはバイクを運転している慧十にもたれかった。山路は起伏や傾斜が激しくアタシは車で登るのは好きではない。バイクなら慧十にいつも乗せてもらっているからあまり体に

負荷がかからないので気分もいい。山の途中のに町よって休憩がてらに昼食を取り、その後も同じペースで山を登っていく。

「そこを右側に入るとすぐだよ。この辺りはお父さんの第2の故郷だからほとんどの土地が清名家の土地らしいよ？」

「おお……。経緯は知らないがやっぱり長い歴史と友好関係があると思うよな。これだけ沢山の土地が……」

「多分違うよ……。お父さんが言うには綺麗な土地が寂れるのがいやらしいの。それに関連して過疎化を防ぐためなんだって。仕事があれば若い人はおのずと残るし。それにお父さんもアタシもここが好きだから来れる時は来ることにしてるの皆が頑張ってるのを見にね」「そつえば今思い出した。俺達の荷物が異様に少なくていいのか？」

「うん、お父さんをお願いしといたから。使用人さん達が運び込んで今頃は部屋の模様替えをしてくれてるかな？」

別荘の門をくぐり慧十がバイクを車庫に入れる前にアタシはバイクを降りて山の上に向かう歩道を指差し先に歩いて行く。慧十はアタシの別荘の車庫にバイクをおさめてすぐに追いついてきた。歩道は整備されていてよく見ると周りには沢山の人が草刈りやゴミ拾いをしている姿がある。それはお年よりや中年層、主婦の方々だけではなくアタシ達くらい年齢の人達も作業着姿で多く見受けられる。その中の数人がアタシ達に気付いたらしくこちらに手を振っている。

「この下の街の人達なの。お父さんが大好きな町だからって自治会に席を置いててね。その提案の一つにこの町を綺麗にしようって言うのがあってさ。皆で手入れしてくれてるんだよ。凄いいねえ」

「ああ、だけど……さつきから皆さんの目は地面のゴミじゃなくて全部俺達の方を見てるが？」

「それはアタシが清名財閥の令嬢で慧十が緋皇財閥の現社長だから

だと思っけど……。あ、そろそろ頂上だよ！早く早く！」

よく晴れた天候の中で下には街が数箇所あるのが見える。ここの地名は“クモの寝城”といわれ綺麗に区画された街が山を中心に八角形に並んでいるのが一部からでもよくわかる。そんな町の発展の度合いは人々の活気でわかるらしい。噂が立つのが早ければ早いほど町の人々の社会性が強く交流も深いと慧十がアタシに囁くようにして教えてくれた。

「聞こえた？今、お嬢様が言っただこと……」

「うん！バツチリね。彼のことはどつかで見たことあると思っただけどまさか緋皇財閥の緋皇 慧十社長って高校生だったなんてねえ」

「びつくりだよねえ。でもさ、そうするとけっこうお似合いじゃない？お嬢様は中学生ぐらいまでは男勝りでそういう空気はなかったけど今は……すごい色気だよねえ。二年半でよくあれだけ成長したわね」

「確かに。あれだったら普通の家柄ならどこの男子もほっとかないわよ」

最近竹華の影響が更に増し慧十とイチヤ付くのにも抵抗は全くなかった。手を繋いだり腕をくんで歩くのにも慣れてきた。

「言われてるぞ？中学の時は男つ気も色気もなかったっさ」

「まあ……。事実なかったけどね。慧十が最初で最後だと思うよ？色気は自分じゃわかんないよ」

「ハハハ。流石、聖だな。じゃあ別荘に行ったら渡さなくちゃな」

「何を？」

「秘密」

「ええ……！」

慧十の趣味は独特であまり柄の入った服は好きではないようだ。大

きなマークや単調な文字が入った物は着るが鮮やかな模様や派手な色の服、補色を使っている服などはアタシがいくら勧めても着ようもしない。

「実はねえ……、アタシも有るんだあ渡すもの」

「サイドに入れてあるアレか？」

「うん、今回は自信作だよ。なるべく慧十の趣向に合わせて作って見たし。プリント物も正装もね」

「服……ありがとな。俺も物だけ教えるよ、不公平になるしな」

「ヤリイ！で、なに？なに？」

「時計だよ。腕時計」

「うわぁ……。慧十ってそんなことも出来るの？」

「一応な」

頂上の少し平坦になった公園のような場所にある小屋で話をしていると小さな男の子が近くで泣いているのに慧十が気付いた。アタシにその話をし直ぐに周りを見回して探し始めた。

「泣き声？」

「ああ、多分近くだと思うぞ。ん？雪か？」

「そうか……。この辺は豪雪地帯だから少しの雪でも皆警戒して直ぐに家に帰るのよ」

「なら、俺達もその子が居るのを早く探した方がいいな。何とかして見付けないとただでさえ寒い雪山だ……」

「探す必要はないみたいよ」

男の子がブランコの近くで泣いているのをアタシが既に見つけておりすぐになだめて泣き止ませた。

「僕？大丈夫？なんて名前なの？」

「お姉ちゃん……誰？」

「お姉ちゃんは聖って言うの。で、このお兄ちゃんが慧十っていうのよ。お母さんかお父さんは？」

「僕は鎧人。美紀姉と一緒に来てただけで途中ではぐれちゃって」

「わかった。お姉ちゃん達と来ない？これからどんどん寒くなるしもう日が沈むしね」

「うん……」

慧十は怖がられているらしくアタシが抱っこした状態で道を降りていく。確かに慧十はハーフで日本人では一般的な黒髪ではなく白に近い銀髪に加えて白っぽい瞳なので何も知らない小さい子供には怖がられても仕方がないだろう……。彼は少しシヨックだったらしくうつむきかげんだがちゃんとアタシのすぐ後ろについて来てくれている。

「よし、荷物も確に中にあるようだな。とりあえず飯にしよう」

「うん、賛成！サイドアタッシュからも取り出したしあとはこの子を預かっていることをどう町の人に伝えるかだね」

「それはぬかりない。俺のノートパソコンでこの町のホームページに書き込みをしておけばいいだろ？」

「あ！それ名案だよ！」

「それにこの町の人達はいいい人ばかりみたいだしすぐに探しに来るよ」

アタシ達は直ぐに軍士、慧十の作戦を実行に移し街のホームページを検索書き込みをし直ぐにメールの受信画面に切り替えた。そのあとは慧十が鎧人君でも食べられそうなメニューを用意してくれた。オムレツなら小さな子供でも食べられるだろう。父親の性格は用意周到、完全確実だ。全てをぬかりなくやらなければ気が済まない完璧主義者だ。そのため慧十がこれまでアタシ達家族に振る舞ってく

れた料理のレシピから必要なものは全て用意しているのだ。

「鎧人君、美味しい？」

「うん！とっても！」

果敢におおぶりなスプーンで掬い上げては口に運ぶ鎧人君を慧十は黙って眺めていた。慧十は意外と少食であり沢山口にはしない。

「よかったね！慧十！」

「ああ、喜んで貰えてなによりだよ。でも……」

鎧人君の皿の隅にはグリーンピースの小山が出来ていた。確に苦手な人が多い緑の豆に鎧人君も苦戦しているようだ。

「鎧人君？……実はねえ。お兄ちゃんもグリーンピースが大っ嫌いだったんだ」

「え？ホントに？でも今は食べれてるよ……」

「お兄ちゃんが大きく成れたのはね。グリーンピースとかピーマンとかのおかげなんだよピーマン嫌いでしょう？」

「うん」

「お肉は好き？」

「うん」

「お肉はね。野菜と一緒に食べると力を発揮してくれるんだよ。お肉だけ！魚だけ！少ないと思うけど野菜だけ！なんて人は大きくなれないんだ」

「ホントに？」

「ああ、お兄ちゃんもお兄ちゃんのお母さんに教えてもらって食べれるようになったんだ。鎧人君も大きくなりたいよね？」

「うん。なりたい」

「なら、勇気を出して食べてみな？確にあんまり美味しくないけど

体にはとてもいいから」

いつもとは別人のような慧十を頼杖を突きながら眺めていると玄関の呼び鈴が鳴った。アタシが玄関を開けると中学生くらいの女の子が息を切らしてアタシに鎧人君のことについて聞いてきた。

「鎧人がここにいてるって本当ですか？」

「はい。美紀さんですか？」

「はい……。姉の荻原美紀です」

「寒いですし取りあえず中に入ってください。今、いい感じで鎧人君とアタシの連れが和んでるところですから」

「は、はあ……」

迷子の鎧人君事件はその日の夕方幕を閉じた。姉の美紀さんがホームページを見て雪の中ここまでたどり着き、鎧人君を引き取って帰って行った。アタシとしては慧十の別の顔が見れて少し満足した夜だった。その後もアタシと慧十のやり取りは続き12時を回った辺りで寝室で静かな夜を迎えた。

………
次の日

「慧十っ！慧十っ！起きて！早く！」

「んん？何だ？」

「外凄いよ！雪で一面真っ白！」

ジャージで寝るらしい慧十の腕を引っ張り窓辺に立った。辺りは一面の銀世界だ。傾斜も丁度よくリフトがないがスキーやスノーボードをするには持ってこいだった。

「一つ聞いていいか？」

「なに？」

「聖は滑れるのか？」

「無理だよ」

「……………」

「何よ……。その目は」

「いや、絶対滑れるようにしてやるよ……と思ったただだよ」

慧十のスパルタぶりはかなりの物だ勉強もその他の物も全てやるなら完璧にやらなくては意味がない。……と言うような感じで春から料理を教えてもらいかなり上達した。アタシとしてはもう少し優しさをもって教えてもらいたいと思ってしまう。その時に玄関の呼び鈴がなり慧十がでて行った。

「はい……。お、鎧人君じゃないか、どうしたの？ ああ、ええと……」

「昨日はありがとうございました。海外の両親も感謝の気持ちでいっぱいだそうで、お礼にうちのスキー場に来ていただけませんか？」

「あ、美紀さん。鎧人君も！今日はどうしたんですか？」

「美紀でいいですよ。昨日のお礼に私たちのスキー場に来ていただけませんか？」

「ちょうどいいから行こうぜ」

「え、うん。アタシホントに滑れないよ？」

二人の家は近くのスキー場らしい。昨日の騒動で両親にも連絡が回って騒ぎはかなり拡大したが街の掲示板に『男を預かっています。名前は鎧人君と言うそうです。保護者の方は明日か今日の十時頃まで清名家の別荘でお待ちしてます。音沙汰無い場合は公民館に届けます』という言葉が書き込まれていたことが電話で連絡として伝わ

り姉の美紀さんが無事に連れて帰ることが出来たようだ。一時、騒然とした迷子事件はそうして幕を閉じた。今は雪が降って路面が濡れているため車両での走行は危険だ。そこで街のいたるところを走る小さな列車のような荷物を移動させるための乗り物を利用して動いていく。速さは観覧車のゴンドラよりも少し速い程度だが元々は荷物用の運搬車なので馬力はある。アタシ達四人が乗ってもさほど変わらない速度でゆつくりと進んでいく。

「いい彼氏さんですね。清名さん」

「聖でいいよお。そうかなあ？アタシにはよく意地悪するけどね」

「それも愛情表現の一つだと思いますよ？鎧人は人見知りが激しくてあまり人にはなれない性質なんですけど慧十さんには心を許せるようでああやって笑っています」

事実上、鎧人は慧十に遊んでもらい楽しそうに笑っている。慧十も優しい笑みを浮かべ相手をしている。幼稚園の年中らしい鎧人は姉と年が離れすぎていて相手をしてもらえていなかったのだろう。再び美紀ちゃんが口を開き質問を繰り返してくる。

「慧十さんと聖さんっていつ頃から付き合い始めたんですか？」

「正しく言えばまだ付き合っていないよ。慧十が目標を達成して余裕が出て来たらかな？」

「へ？てつきり付き合つてるとばかり……。じゃ……。じゃあ、アドバースとか出来ますか？」

「うーん……。慧十なら出来るかも知れないけどなあ」

「何か解るきがします……。それ」

列車は二つの山の谷間に差し掛かりスキー場に着いた。そこには先客が一人滑っていた。途中でターンしこちらを見上げてくる。

「雪夫！連れてきたよ！」

「サ〜ンキュ〜！」

既にスキーウェアに着替えていた慧十がスノーボードで滑り始めたそして、下でスキーのストックを片手に持っている少年の目の前に止まった。

「初めまして……かな？ただお互いのことはよく知ってるよな？

柊 雪夫君」

「はい、折り入って話がしたくて。実はお願いしたいことがあります」

「わかってるよ。好きな人についてだろ？」

「流石は慧十さん。お願いしたいことは美紀についてで相談したいことは家のことです」

慧十には雪夫という少年が相談しに行っているようだ。アタシのところでは美紀ちゃんがアタシにアドバイスを求めてくる。アタシとしては解りきったシチュエーションなので少し意地悪したくなる。

「慧十の方はどうだった？」

「そっちと同じさ。葛城 美紀、柊 雪夫か。葛城さんはこの近くの大地主。対する柊は……。面白いな」

「は？何か知ってるの？」

昼間はスキー場で慧十に手を取られながら滑り続け美紀ちゃんの憧れの眼差しを背中に受け続けていた。夕方になり慧十が帰ろうという。

「いっ一緒していいですか？」

と逆に問われかなりビックリした。そこでアタシは慧十にも相談せずにいると企てはじめ今、別荘の前にいる。

「入って」

「お邪魔します」

「お邪魔しますね」

「只今」

慧十がアタシが用意していた部屋に向かった時に。

「ごめん慧十！二人が来たからアタシの部屋に荷物を置いてくれな
い？」

「ああ、問題ない。いつもの生活に戻るだけだしな。移動しとくよ」

慧十が一通り荷物をアタシが使っている部屋におくと何やら不振に
思っただけ二人の声が聞こえ階段を上って来る音が聞こえた。そ
の雰囲気からして美紀ちゃんのような。アタシはとっさに慧十を引
き寄せ身構え美紀ちゃんが上って来たであろう瞬間を見計らい慧十
の首の後ろに手を回し顔を近づけキスをした。それを見てしまい後
ずさって階段を急いで降りて行く美紀ちゃんは見れなかったが効果
はあった気がする。少し荒い方法だがアタシも慧十に甘えたかった
し、その後の変化やアタシのいじめめ攻撃をまともに受けている
正直な二人。特に美紀ちゃんは……。

「美紀ちゃん……。さっきアタシと慧十がキスしてたの見てたでし
よ？」

「え、……ええと、その、み、見てないですよ？。やだなあ！」

「じゃ、もう少しいじめるかな？」

慧十はやっぱり料理が上手い。種類も様々、手早く、手際もいい。

美紀ちゃんはアタシににこやかに見つめられずと下を向いている。そして、とどめとは行かないだろうが食べ始める前に再び抱きつき二人の見えるところでキスをした。早くも慧十はこの主旨に気づいたらしく。アタシに同調してくれている。雪夫君はあまりわかっていないようで『派手だなあ』というように少し顔を赤らめて見ている程度だ。アタシとしては美紀ちゃんに効果があればそれでいいのだ。

「オイシイ！」

「ホントだ。慧十さん！勿体無いですよ。こんなにいい腕してるのにどこの店にも出入りしてないんでしょ？」

「ああ、この際だから宣伝しとくが、俺はこの町から少し離れた街にあるnight-knightのオーナーだ。二人ともよければいつでも来てくれ。歓迎するよ」

その後もアタシの美紀ちゃんへの猛攻撃が続く。ついに美紀ちゃんと二人きりになるチャンスの風呂の時間帯になり慧十にそのことを告げこの別荘で一番金がかかっているらしい温泉の大浴場に二人で向かった。

「聖さん！絶対ちやかして楽しんでるでしょう！」

「うん、美紀ちゃんが可愛くてつい……」

「やめてくださいよ。恥ずかしくて死にそうなんですから」

「それくらいがいいと思う……あんまり鈍いのもだめなのよ。これからする話は事実だし気をつけて欲しいことなの。だからといってあせっちゃダメより？アタシはそれで慧十に傷つけちゃったし」

「へ？」

今となつては懐かしい思い出だけど結局はアタシの暴走によって慧十が車にはねられてしまいけっこう大きな騒動となつたあの事件だ。

それを美紀ちゃんに話すと真剣に聞いてくれた。

「まあ、そんなことも沢山あったのよ。だけど、今はもと通りだし一緒に手を繋げるくらい親密になったの。アタシが美紀ちゃんにアドバイスできることは『自分に正直になること』。でも！あせつちやダメ。暴走すればいいことは一つもないからさ」

「は、はい！頑張ります」

「それからキスはアタシ達が図ったことだからあんまり人前ではない方がいいと思うよ？」

「え……あ、はい」

その頃の慧十たちは。

「かたをつけるなら早めにつけた方が良いぜ？俺はこう見えてあんまり恋愛ことは得意じゃないのさ。普通の事業を遂行したり第三者として関与するならまだいいが。恋愛つてのはマジでガラスみたいな物で手際よくかつ心配りをしながら磨けばキラキラ宝石みたいに光り出す。だけど力を入れすぎたり間を開けすぎると落したり、傷をつけちゃう。俺も一回落としてかけてすんでのところでなんとか止めた部類だからな。頑張れよ。もっとも、向こうのことを理解しよとするよりも感じ取る方がいいかもな？」

「ありがとうございます。聖さんとそんなことがあったんですか……。慧十さん必ず成功させます」

アタシ達が温泉から帰ってきて入れ替わりで慧十と雪夫君が向かった。四人揃って居間で少し談笑したあとアタシと慧十、美紀ちゃんと雪夫君の組み合わせで寝室に向かい就寝した。

「慧十は何を雪夫君に言ったの？」

あたしは慧十の腕を枕に抱きつくような形で寝ている。まだ目が冴えていて寝付けないアタシに慧十が答えてくれた。

「空気を読めって言うていたよ」

「フフフ。慧十らしい遠まわしな言い方ね。アタシもアタシが体験したことを教えてあげたわ。寝れないのはお互い様みたいね？」

「これだけ密着してるのは初めてだろ？まあ、寝ようと思えば寝られるがそれで終わらせる気はないんだろ？」

「うん。アタシだってもう我慢する必要はないわけだしね。前みたいに誰かさんが一番重要なことを秘密にしてたせいでアタシがどれだけ気持ちを押し込めてたかわかる？」

「悪かったな。けどな、俺もそうとう押し殺してたんだ。今からでも遅くないと思うが？お互いが同じ気持ちなんだから」

「うん」

その夜はアタシにとって忘れられない夜になった。慧十もそれは同じだと思う。冬休みの前半はお互いに思いを伝えて朗らかに話している二人を見ているとこちらも暖かくなる。二人はすぐに帰って行ったがアタシ達はその後数日間アタシは美紀ちゃんにアドバイスしたことで少し自分のことにも目を向けることが出来有意義だったことには変わりないと思う。クリスマス数日前までにはアタシ達のアパートに帰りアタシは父親にある計画を話した。実は今、清名家は大きく揺れていた。その理由は大坂財閥だ。アタシにも大きな決断の時が迫っていた。

動き出すレジスタンス！

家族と友人だけでクリスマスを迎えたアタシ達。聖なる夜はやっぱり慧十と二人きり。この時間だけは誰にも渡さない。雪もちらつき幻想的な夜になった。慧十からのクリスマスプレゼントは慧十特製のクリスマスケーキだった。アタシが好きなチョコレートを使った食べきりサイズのものでいつもより気を使ったように几帳面に綺麗に仕上がっていた。アタシからのプレゼントは新しいnight-knightのマークを入れシンプルで動きやすく機能性に富んだ自信作だ。クリスマスが過ぎた今日、大晦日の夜にアタシと慧十は近くの神社にいた。あと三分程で新年を迎える。

「ねえ、慧十。冬休み最初のこと覚えてる？」

「沢山ありすぎでわかんないな」

「もう、アタシねまだ完全に決めれた訳じゃないけど慧十と一緒に戦うことにしたの」

「聖に危険がなければ俺は敷いてくれたレールの上に行くよ。それに助けに行く」

「ありがと。来月、慧十が勝てば相手の中枢は崩れる。まだ図って作戦をすべて使った訳じゃないけどね。アタシはアタシの未来を慧十に託すのだから絶対勝ってね」

周りから元日へのカウントダウンが始まった。気づくと小柄な竹華が魚街に抱きつきながら右手は上に突き上げてるのが見える。その後ろには慧十の妹の雲英ちゃんと婚約者の正純君。笑いながら腕を組みいつも物静かな二人なのだが柄にもなく飛び上がっている。アタシの妹の那流と慧十の弟の剣一君は遠目の場所で手をつなぎながらこちらを見ていた。最後に姉の成果とその旦那さんの松さんはは

しゃいでいる面々を見ながらやれやれと眺めながら微笑みを浮かべて周りのテンションに合わせている。

「3!!」

竹華と魚街が叫ぶ。

「2!!」

続いて雲英ちゃんと正純君。

「1!!」

ここぞとばかりに那流が叫ぶ剣一君がそれにビックリしているのはつきりみえた。

「A H A P P Y N E W Y E A R ! ! ! !」

慧十の綺麗な発音の後にアタシと姉が声を揃え。日本語訳で叫び松さんがさらに呆れていたが顔は笑い楽しそうだ。

「あけましておめでとう!!」

すぐに初詣を皆で済ませ長い石段を降りて行く。アタシの首にはダイヤの指輪一緒にそれと同じデザインのエメラルドの指輪が揺れている。慧十がアタシにくれたものだ。エメラルドは預けてくれる。

「はぁ、やっと自由って感じかな?」

「確かに、俺たちは慧十にはめられて冬休みの半分を無駄にしたか

らな」

「赤紙ギリギリの連中がよく言っぜ」

「そっなの？」

「痛いところ突くわね……」

「言葉も出ないな」

「なら文句言っな」

クリスマスが明けたある日に私は大坂 環に会いに行きやつ度肝を抜いてきた。ひとりで邸宅の環の部屋まで乗り込みすぐに帰って来た。

「失礼します」

「お！ ついに来よったか！ 入りや」

「環さん。お久しぶりです。今日はお伝えしたいことがありまして

……」

「勿体ぶらんでええ…… 『これであのキザな男の泣き顔が……』」

「では、私は緋皇財閥の側につきます」

「なに？」

「アナタの悪行、スキャンダルネタなんかを消すためにこの会社かなり無理してますよね？」

「貴様！ わいをおちよくつとるのか！」

「あなたに言われたくないですね。人の周りを引つ掻き回してなおも迷惑をかける……。そんな人物には誰も付きませんよ」

扉の裏側に慧十が待っていてアタシを迎えてくれた。そして、アタシの作戦の第一段階が発動されたのだ。

「竹華…… ありがとう」

「ん？」

「海外の両親にまで……」

「いいの、いいの！ どうせ小さな会社だし私にも協力させてよ。だけど……彼の手腕は恐ろしいわね」

慧十がアタシの作戦の要だ。この一週間に大小三十社以上がこちらの傘下に動いた。正純君の動きや雲英ちゃんを加勢で更に力をつけた。

「あのさ……こんなことしていいの？ 慧十……」

「何が？ 相手を挑発したのはいいけどさ。これで戦線布告はしちやった訳だしもつとこう……緊張感を」

「聖……。俺は負けないし今回の勝負は社長の手腕を求めるだけのさしにするのが目的なんだぞ？ ここで焦ったところで動かないさ」

経済界でこの動かない戦争をただ触る程度にみている大企業や重鎮もいる。アタシの読みが当たれば大坂の動きは八方塞がりになる。そして……慧十の敵を……。

「雪か……」

「ん……。慧十、今……いやらしいこと……」

「何でそうなる！？ 関係なくないか？」

「じゃあ何でアタシを見たのよ。“雪か……” って言ったよね？ 今！」

「悪い……何で“外に行こうか”と続けようとした奴に“いやらしいこと”なんだよ」

「うん……。そだね。ごめん」

「なんか今日はやけに素直だな」

「いつも素直ですう！！」

『え〜！？』といったげな顔をしたが二人で笑い出した。今日は慧十から許しが出て三が日休みをもらった。アタシは赤紙をもら

つていないためあまり関係ないが……。竹華と魚街は結構ギリギリらしくかなり驚いた。

「覚えてるか？ ここの交差点」

「にゅう……」

「やっぱり覚えてるんだ」

「意地悪いよお」

「でもさ、この一年はこっから始まったんだぜ？」

「確かに……不思議な出会い。いや、再会だったね」

「まあ、引きかけた俺からすればかなり罪悪感だったが……」

「その割にはへらへらしてなかった？」

「だって可愛い子だったからさ。結果的に聖だったから俺としては万々歳だったけどな」

そう、今を思えばアタシと慧十が再会してからだいたい一年の四分の三が過ぎた。1月……師走を思わせない緩やかな時間の流れに流されるままアタシ達の空間や時間は広がる。今はバイクの後ろに乗りNIGHT-KNIGHTに向かう。始まりの場所へ。

「いらつしゃいませ！！」

「みんなしつかりやってるか？」

「オーナー！」

「みんな列べ列べ！」

「楽にしてくれよ。みんな」

「慧十君。お帰りなさい」

「松さん」

竹華の兄の松さんはあたしの兄でもある。姉の成果の旦那さんで優しくおっとりしているがなかなかのイケメン。慧十と並ぶとかなり大きな人だ。

「ようこそ！！ NIGHT - KNIGHTへ。お客様方をビッブルームへお送りしなさい」

「お帰りなさい。オーナー！」

「お帰りなさい。オーナー！」

「……」

慧十に頭を下げる一同を見ながら松さんに視線を移すとウィンクしながら前に進むように導かれた。いつもポーカーフェイスの慧十も今日は少し表情が明るめになり目の光が含まれアタシが握っていた手が少し強く握られた。

「慧十？」

「さあて！ 今週の週末は忙しくなるぞ！ あの家を引き払って……」

「……もっと大きな家に住み替えだからな」

「へー？」

「いきなり悪いな。俺も躊躇ったんだが爺さんの勧めで断りきれなくて」

「う、うん」

ビッブルームに入ると待っていたのは見知った面々だった。アタシの家族を始め慧十の家族、協力者の家族が集まり戦前の志気を上げるために集まっているのだ。

「聖…… ちょっとごめん」

「あ……、まっ……て」

アタシの父親に話しているが何を話しているかはわからない。そして、アタシもまだ知らなかったが思わぬ人が次期清名財閥を継ぐことが決まった。アタシや姉の成果や那琉などは声も出なかった

が周りに集まっていた同年代と見える少年達が集まり次から次へと羊皮紙に万年筆でサインをしている。

「皆さん！　これより我々は大坂財閥や他のが利権を振るい取り仕切る社会を変えるために動く同盟を結成しました」

慧十の声とともに皆静まり返りそちらを見た。その後グラスを高らかに上げ乾杯の声明は剣一君がしそこからは親睦会に近い形になった。アタシの横に慧十が来てアタシの父親に頭を下げてすぐに上げた。

「僕に……娘さんを。聖をください」

「慧十！？」

「ははは！　ついにとられたか。君は信用に足る男だ。君なら幸せにできるだろう」

「もお！　お父さんったら強がりを！」

「ホントは後継ぎいなくなるの寂しいんでしょう？」

那琉と成果姉が茶化しに入るが真剣な顔で慧十が呟いた。

「その件に関しては大丈夫ですよ」

「へ？」

「兄貴……また誰にも知らせずに！」

「松さんがそちらに養子に入ることと同意してくれました」

「まさか……」

タキシードに身を包んだ大柄な男性が父親に頭を下げ慧十からの動きを伝えた。確かに成果姉は駆け落ち同然に結婚していて父もその時はそうとう怒っていたが今はそうでもないらしい。

「成果が認めたなら本物だろう！　これからよろしく頼むよ」

「で、お父さん……　なんかお姉ちゃん達ののりに流されて言うけど」

「剣一君はまだまだ未知数の實力を持っている。お前は見極めなさい」

「それっていいのかわかんないじゃん！」

「いいのよ、那琉」

成果姉が口をはさみ周りを見回した。アタシもつられて見てみたが何か格別変わっている訳ではないいつも通りの皆がいるだけ。

「慧十君……。君にかかっているんだからね」

「解ってます」

「兄貴……頼んだ」

「何言ってるのよ！　剣一！　あんたはお兄ちゃんの最高の信用を保持してるのよ？　いざとなればアンタも協力するの」

「そのいきだな。もう私から君たちにいうことはない」

慧十の腕をつかむとこちらに向かってやさしい目つきで視線を送り返してくる。するとまわりの仲間になるであろう人たちが集まってくる。アタシの方も興味深そうに見られた。そして、アタシの作戦が敵になる大坂　環に対し効果を上げ始めた。

「どういうことや！　お宅んとこの会社は……　ちよっ！　こちら！

まちいや！」

「どうされました？　環様？」

「珠樹お前は知る必要はない」

「かしこまりました」

ここにスパイを送り込んでいたのだ。アタシの先輩で最近友人になりこちら側に歩み寄って来た人だ。この人のことはアタシも完全

に信用している訳ではないがいまのところは二重にスパイされている心配はなかった。

「何故や……。何故……。！ 清名 聖！ あの女か……」

冬休み最後の日に二人で家に居た。勉強はもはや気にならない。竹華や魚町と一緒に慧十の鬼のような学習計画を受けていたからだ。ソファにかけてノートパソコンをいじっている慧十の横に並び何をしているか見ていた。英語の長文がかなり長く連続で打たれていて気持ち悪くなりそうだったがメガネをはずしてこちらに向き直った慧十がそれを閉じ一応は解消された。

「うげ……」

「大丈夫か？ 聖」

「うん、それよりさ。明日から普通科クラスにはいられないんだよ？」

「大丈夫。俺と聖の教室は隣だからいつでも会える」

「そうなの？」

憎き大坂 環のせいでアタシと慧十は普通科クラスには明日からいられない。だが、慧十とは一緒に居られるらしい。院麗クラスの上院は一人に一つの部屋が支給され家を継ぐための学習や経験を積む。

「でも……竹華や美雪と会えないのはちょっとさびしいかも」

「それは仕方がないことだ。だが、あと一カ月だ。一か月でそれも変わる」

「……………」

掛け布団をかぶり明日のことについて考えていた。あまりいい予

感はしないがいざとなれば経済界屈指の天才がアタシを守ってくれる。彼は壁を挟んで隣に寝ている。そのまま目を閉じ眠りについた。

「ふえ……。広い。落ち着かないかも」

「まあ、もともと爺さんの土地だしな。あの人がここまで寛大に土地を譲るとはな。しかも……。雲英や剣一にまでな」

「さ、いくぞ」

「うん」

上院の征服はレースや絹が使われているが私はあまり好きではない。慧十も着心地が悪いらしく同じで少しご機嫌斜めだ。それでも慧十はアタシに優しくしてくれる。授業は午前中で終わり慧十と合流し作戦の第二段階に移行をするため引越した家に向かった。

「聖……。これはすればお前にも本当に被害が出るかも知れない」

「うん。大丈夫だよ」

「……」

「アタシもそんなにアホじゃないのよ？」

第二作戦はかなり危険な部分も多いが正攻法としてはかなり有効な作戦だ。アタシの考えた作戦はこう……。まずは敵の外郭を落とし利益を吸収する。それをじわじわと続け向こうが音をあげるのを待つのだ。それがなくても既に大坂財閥は窮地に立っている。

「環！ これはなんだ！」

「済まん親父」

「ここまでやられて何もできんとは……。何故対処をしないのだ！」

「図られたんだ！ 清名財閥に！」

「秀造か……」

「いや……。娘のほうだ」

「何？」

「社員が次々に辞表を提出し他社に流れてる。その後は運送、薬品成果なんか他の会社に次々に吸収された」

「仕方ないな。ここまで追い詰められたなら奴らを始末するしかないか」

本性を出してきた。その頃の敵の心中では珠樹が内部の極秘資料を探っていた。母親がこの家につかえていてその関係から彼女は自由にとまではいれないが簡単に機密などに触れることができる。

『TO KIYONA

極秘資料のデータを抽出。そちらに転送するのでお願いします。

FROM TAMAKI』

メールでの交換はリスクを伴うが敵はそこまで注意が向いていない。それに今は流通の情報などを流しこすれどそれを利用してはおらず珠樹さんがスパイをしていることは知られていないのだ。

「来たよ。慧十」

「おう……。暗号解析つと……。これだ。時をみてこいつを警察に送ってやる」

「見つかったの？」

「ああ、あれは本当にあったんだ。親父とお袋を機内で殺させ……そいつも始末した。なんでこいつが残ってるか知らないが……。そうか！ 爺さんか」

アタシには解らないが慧十の真剣な顔から解って来た。アイツの親子の悪だくみが……。そこで、慧十の提案した作戦が動くことに

なった。動く人員は六人だ。このメンバーがそろえば敵はいない。その夜行動に出た。慧十が過去に引かれた地点に雲英ちゃんが配置されその近いエリアんはさらなる増援が複数きている。最後に剣一君と那流がおとりをしあらかじめ正純君が呼んでおいてくれた警察が動くのだ。

「聖……今日はいつもみたいな安全運転はできない。だから……」
「しっかりしがみつくのね？」
「解ってるならよし」

バイクで外に出るとバイク二台に黒い車が一台……そのほかにもいるらしいが暗くて見えない。

「さあ！ 楽しいチエイスの始まりだ！」

上手いが速い。前が見えないほどスピードを出している。その後ろには必死についてくる車がいたが途中で道を変え曲がって行った。

「チツ……挟み打ちでもする気だな。聖。絶対腰を浮かせるなよ？」
「へ？」
「いくぞ！」

前輪が浮きあがり後輪も続いて浮きあがる。直線の道路で助かった。黒い乗用車をタイヤをかすめたが飛び越し増援が追い付いた。

「アンタが銀鬼の兄貴か？」
「ああ、雲英の兄だ。手筈通りたのむ」
「了解したよ」

十代ほどの二人乗り大型バイクが後ろからきたバイク二台を足止

めした。その後ろに居たのはワゴン車が二台だ。その後ろからパトカーが現れた。その頃の剣一君と那流は……。

「アンタ大丈夫なの？」

「大丈夫だ！ ほら見えた！」

雲英ちゃんが引き連れているのは警察のバイクだ。位置関係からいえば前方には雲英ちゃんの怖い友達数十名が抑え真ん中に黒いワゴン車がいる。その後ろから白バイが現れ退路を断たれたのだ。

「君が緋皇くかな？」

「はい」

「捜査協力ありがとう。これは極秘で当事者にしか言えないことないことなんだが……容疑者親子はその時期から海外へ三年間わたっていてね。まだ時効は成立していないのさ」

「本当ですか？」

「君が提供してくれた証拠とこいつらを逮捕したおかげで証拠はつかんだが……奴は警視總監の弱みを握ってる。奴の金銭的な権威を地に落とさないと奴はまだ捕まえない。私も長年奴を追ってきたから悔しくて仕方がなかったんだ」

警察官と何かを話していた慧十をよそに私たちは次の作戦に着手した。剣一君と正純君が動き大坂財閥に協力している会社をつぶしにかかったのだ。

「くそ！ ここまでされて……」

「親父……。まだ手があるで、俺がこの後にあるイベントでアイツを事故に見せかけて殺せば」

「ふむ……。だがな、それはリスクが高すぎるぞ」

「もう四の五の言える状態じゃないんや！ もう、俺しか動ける奴

もらん！」

切羽詰まった敵の山は経済相が企画運営し開催する財界の若い社長やその子息の日本一を決めるといふざけた内容のイベントだ。これは経済界の大御所にして今生きている財閥系の社長が干渉し無理やり開かせた大坂財閥の死刑台であり。海外からも大勢のゲストが訪れる。優勝者には多額の報奨金がでるうえ海外からの取り引きなどにも幅を利かせるだけの知名度が手に入る。ここで力を付けて一発逆転を狙いたいのだろうかが無駄なことだ。これをしている間に次々に仲間は消えアタシの減流操作で社員や土地を削られていくのだから。

「内容は運動能力、既知、洞察力などらしい。お題までは解らないが出るのは俺、剣一、正純、泳だ」

「なんで泳君も？」

「笹瀬家の推薦で……だ」

「理解しました。他には？」

「協力してくれている連中はみんな出場する」

「誰か一人が勝てばいいと……」

「剣一！ 正しいことだが言い方を直せ」

「解ってるよ。一番勝ってほしいし勝てるのは兄貴だろうしな」

そこにメモリースティックを持った竹華が現れパソコンに挿入した。彼女のハ○カー自慢が火を噴いたのだ。

「どんなもんよ！ これぐらいチョコチョコイのチョコイってね！」

「足はついてないよね？」

「抜かりはないわ！ ほら！ 二人とも確認して！」

「全く……いい大人が小学生のお遊戯会みたいなこと考えやがって」

「一日目……迷宮のスタンプリー、二日目……大人の障害物走、三日目……ロードレース!？」

「面倒だな……三日もある上にかなり人数も多いはずだ」

「大丈夫ですよ。兄さん」

「正純」

「こちらの手勢は敵の十倍以上まかり間違っても勝てる訳が……」

「いい事教えてやるよ。戦に絶対はないんだ。お前らは関ヶ原の合戦でどうして西軍が負けたか知ってるよな？」

「裏切り……」

「俺も皆を疑っているようなことを言うのは正直心苦しい。だが、これは安全策だ」

「了解」

「わかりました」

「敵を疑う前にまずは味方が……策士様は大変そうよ。奥方様」

「そういう竹華姫にも殿がおいでになってるけど？」

二月の27、28、29日に開催されるこの大がかりなイベントはめんどくさいらしい。慧十はもつと大人な競技を期待していたがアタシでも思う……誰がこんなことを……。

「環、これで本当に勝てるのか？」

「確かに経済的な手腕では奴の方が数段上かも知れないが運動に関しては……俺には勝てない」

最後までスパイを続ける珠樹さんが今、密かにアタシと会っている。彼女がアタシに協力してくれる理由をついに打ち明けてきてくれたのだ。彼女はバトラークラスの三年生で来年はどこかの家に奉公しに行くらしい。

「聖さんってホントに面白いわね。普通なら私みたいなものは警戒

するべきなのに」

「慧十が安全と判断したので」

「やっぱり彼には筒抜けだった？」

「あなたの過去は誰にも知られていませんよ。もちろんアタシにも慧十にも」

「じゃあ、慧十さんと貴女にだけ話しておくわ。伝えておいてね」

彼女のお母さんは大坂財閥の現在の代表である環の父によって殺されたらしい。強欲なその男のせいで二歳になる彼女がいたお母さんは必死に抵抗したが……ストレスと過労で倒れそのまま帰らぬ人となってしまったのだ。そして、それは息子と自分の代にも引き継がれ耐えかねていたらしいがいつか、報復するために期を見ていたらしい。

「そんな……」

「そう、そういう心ない男が財界のトップって信じられる？」

「虫唾が走るな」

「慧十……」

「ちょうどいいので頼みがあります。私をこの件が終わったならNIGHT-KIGHTに入社させていただけないでしょうか」

「問題ない。アンタには大分世話になったしな」

「慧十さ。アタシはうちのメイドさんやつてもらったらいいかなど……」

「それもいいな。ま、何にしてもあんたにはまだ大仕事が残ってるぞ？」

「あの……それは？」

「あんたも証言してくれ。あのクソから暴力を受けていたんだろ？」

「はい！」

アタシの味方達がコツコツためたチャンスを利用するべく私や慧

十、そのほかのメンバーも覚悟を決め徐々に指揮も上がって行く。アタシは慧十に言われ出場しないことになった。昔の大名の奥方様はこんな感じだったのだろうか。とてもアタシに耐えられそうもない。慧十に内緒で考えた作戦を実行すべきか考えていたが……今はまだまとまらないから……。これから、天下分け目の合戦が再び起こるのだ。皆が心を一つにして戦う。男ばかりに任せられない。女にも戦う力はある。アタシにも……。

戦いは……

二月の最終の三日間でそれは行われる。アタシ達女の子は運動能力抜群の雲英ちゃん以外は誰も出ることができない。慧十は真剣だがあまり乗り気ではなかった。そして、その日になる前にはかなりの会社の息子や志を同じくした経営者などが集っていた。その力で敵の会社自体には回復のしようがない程のダメージを与え憎き大坂を追い詰めている。

「なあ、兄貴。……」

「緊張ならしてるぞ。後悔もな」

「後悔？」

「ああ、聖を巻き込んだことは今でもつつかえてるんだ」

「兄貴だって人だしな。それくらいあるさ。その点、雲姉は凄いな
え」

最初の彼の顔ではない。しかし、吹っ切れたように彼は召集場に弟の剣と共に入っていった。一日目の一つ目のお題は題して『大人のスタンプリー』だ。内容は普通のスタンプリーとそこまで変化はない。問題はそれのどこに企業手腕に関する点が含まれているかだ。それは……。

「起業家たるもの自らの足と労力で新天地を見つけ己の力で内容を決めてなんぼ……そして、それを探すのも自らの手腕だ。よって、今からは誰の手助けもなく自らのみを信じ内容から最良の土地を探してポイントを稼ぐこと!!」

説明を入れればこの街の外郭はまだ開発が整ってはおらずその関係から空き地や廃屋が多々残されている。最初に引いたお題からス

タートに必要な項目を埋めて再びスタートに帰ってくる。これがゲームの内容だ。ただし、携帯電話やポケベル、パソコンの使用は原則的に禁止（アタシ達からの連絡は可）で彼らは人の伝聞やアナログの紙の地図や市役所経由で動くのだ。勿論チームを作り動くのも可だがポイントは人数分割られて計算されるのであまり効率的ではない。と……慧十から貰ったメモには書いてある。……意味分らない。彼はゲームの分析までしていたのだ……。

「俺のお題は……また、面倒な……工場か……しかも詳細明記してやっとポイントか……兄貴は」

「ほお……舐めたことを……」

「や、ヤバい。怒りモードの兄貴だ。近寄らないようにしよ」

アタシ達はずっと控え室にしているテントか外に出て見ることにできない。慧十は正直心配ないが正純君や剣一君の方が心配だ。一番の心配の種は乗りで参加しているに近い泳である。泳はアタシと同じくらい頭が悪い。そういえば雲英ちゃんもスタートラインにシルエットを見つけた。彼女は実力はあるはずだから同じ女性としては頑張っしてほしい。

『さあ！！ スタートしました！！ 最初から飛ばす二人は！？ 緋皇財閥の慧十さんと大坂財閥の環さんだあ！ おっと、お題が違ったらしく別れていったようだぞ！ カメラ追跡！』

カメラに映る慧十は不機嫌そうな顔で走る……。アタシは慧十の運動能力を知っているからわかるが彼は人間ではない。速い……。そして、彼が無性にイライラしていた理由がわかった。確かに職種やジャンルではあるが彼は真面目に……真剣にこの競技を始めたのだ。それなのに……。この企画はどう考えても彼の精神を逆なでするような企画になっている。ここに企画の責任者がいなくて助かつ

たとアタシは心の中で呟いた。

『おおつとお！ 一位は緋皇財閥の緋皇 慧十さん！ 期待の新星は格が違うのか！？ だが、審査員の顔が曇ったぞお？ どうしたあ？』

堂々の満点通過をし第一チェックポイントを通過した。次の第二のスタート地点に慧十が走っていく。その後ろからいきなり……紫色の長髪……雲英ちゃんだ。スケートボード！？……反則ではないらしい。バイクや原チャリ、車などの原動機付きはアウトらしいが……。そう言えば慧十も妙に速かった。何故だろう？ 遠巻きにしか見られないのが悲しいけど今は仕方がない。

『三位は大坂財閥だあ！ ん？ おお、東雲財閥の代表も来ている！』

慧十は第二チェックポイントに到達し次のお題を引いた。彼もインラインスケートを使っていたのだ。よく見れば他の皆さんも同様に何かしら乗り物や機材を使っている。次々にスタート地点に帰ってくるが内容不十分で突っ返される人達も少なくないらしい。その中で私たちの主戦力達は全員が第一をストレートで通過した。驚いたのは泳が一応一回で通過したのだ。

「スツゴいねえ……聖の旦那様は」

「え？」

「『え？』じゃないよ。ホラホラ応援してあげなきゃ！ あ、ひつたくりを殴り飛ばした……相当気が立ってるね。あれは」

「仕方ないわよ……。彼の第一チェックポイントのお題は『メイド喫茶』だったんだから」

「成果姉……。それホント？」

「うん、審査基準はオールクリアなんだけど……審査員さんの話だと凄く憎悪の混じった表情だったらしいわ。確かに彼はこの勝負にかけてるし……イライラするのもわかるけど」

「慧十……」

慧十は次々にお題をクリアしていく。一位で第三チェックポイントを余裕で通過し後は後続を待つのみだった。大坂 環は気づいていない。徐々にアタシの術中に経済的は意味ではまり自分から破滅へ向かって居ることに……既に彼の中樞は崩れたも同然だった。アタシの攻撃はそこまで浸食を続けていたのだ。レースに視点を戻すと、二位は流石は兄弟だった。剣一君がギリギリで二位を獲得し、ほぼ同率で三位が雲英ちゃん。四位が……なんと同率で正純君と泳だ。これは驚いたけど……。総合順位の中でもアタシ達の側についた味方はほぼ予選を通過し初戦の本当のステージに突入する。自分で決めたパートナーと手錠で繋がれ迷宮でサバイバルを行うのだ。これには私も驚いたが迷宮とはある富豪の敷地内にある庭園と屋敷……。屋敷に早く生き残った状態で入った組みが次の審査への出場権を得るのだ。

「け、慧十……」

「どうした？」

「あ、あの……足引っ張ったらごめん」

「バーカ！ 言っただろう？ 俺はお前を守る」

ここで仕掛けて来たのが大坂 環だ。ヤツは本人の武装だけをかなり本格化させて……実銃を手に参加をした。それでも……慧十は強かった……。アタシを『守る』その言葉は正しかったのだ。

「しかし、相手の玉が触れたらアラームが上がる接触式のセンサーか」

「お金がかつ……」

「聖！ 伏せる！」

いきなりヤツの襲撃ではない。フリーの参加者が混ざっているし大坂の手によつて動いている奴らもいる。それに攻撃を受けたのだ。慧十は拳銃以外にもそれようなグローブをつけている。それにルールではそれぞれに打撃系の自由武装が一つだけ許されていた。アタシは慧十の勧めで盾だけつど……竹華はヌンチャク……魚街はトンファー。剣一君は模造刀……那琉はアタシと同じ盾。他にも知り合いいも皆本気で屋敷を目指していた。

「聖……盾を前に構えていてくれよ」

「あ、うん！！」

慧十は……恐ろしい勢いで詰め寄り腕に防具付の特殊な鋼拳を振るい三人を軽々としとめてしまった。その地点から始まりアタシ達だけでも九組みを倒したからかなり減った気がする。そんな時だ。やつの襲撃は……。アタシが安心したところを付け狙ったらしい。それも慧十に助けられた。大坂は初めて持つ訳ではないらしいがまだ慣れきった手つきでなく慧十にやられたのだ。慧十が過去に何をしていたのかは知らないが0距離に詰め寄り相手の頬骨の下側から潜り込ませた拳を斜め左上に抜きアッパーのように大坂を吹き飛ばした。アタシは呆然とみているとパートナー……扇華が現れアタシに向かってマシンガン向け玉の雨を降らせた。銃器は……反則のはずだ。倫理的に！これも彼が防弾加工された盾をとっさに掴んで難をしのいだ。悔しそうな顔をするが……次の瞬間に猛然と彼女を攻め立てる人間が現れた。あの子のあんな顔は見たことがない。妹的那流が扇華に噛みついた後に剣一君がマシンガン蹴り上げて慧十がつかむ。それを水の中に……正しくは氷の張った水の中に落とした。それからアタシと慧十は走り続ける。そう言えば慧十は何

やら不安げな顔をしていた。

「慧十？」

「どうした？」

「う、うん。さっきから難しい顔ばかりしてるからさ」

「いや、嫌な予感がしてる……それだけだよ。聖は気にしないでくれ」

そう、珠樹さんにも探れないことはある。親子二人で造られたらしいこの計画にはさすがに手出しはできなかったようなのだ。アタシと慧十はその術中にはまった形になる。しかし、私達もこんな所では……負けられない。屋敷に入る。やはり一番乗りらしい……。そして、……。

「待つてたで。緋皇」

「やはり、替え玉のそっくりさんか。あんなんじゃないはずだ」

「ま、もう、関係ないさ。見事にはまってくれて嬉しいよ。両手をあげな」

「くっ……」

扇華はれっきとした本物のようだがアイツは違ったらしい。どうやらアタシ達は引き込まれたのだ。アタシと慧十は前方にいたらしい二人を追ってこちらに来了。扇華本人はおそらくダミーをより精巧に見せるための罠だ。……それに、慧十でもここまでイレギュラーが重なれば簡単に覆せはしない。アタシ達は素直に突きつけられた銃に圧されるように壁際に追いやられた。そして、……。

「この！ 成り上がりの……糞が！ お前みたいなのがいるから勘違いやろうが増えるんやー！」

「ぐ……、勘違いか……どっちがどうだかな」

アタシに向けて拳が飛んで来たが慧十の手がアタシを守る。そして、大坂はなおも執拗に慧十をいたぶり続け口の中はおそらく切れていたのだろう。慧十が血を吐いた。……絶体絶命……、そう、絶体絶命。動けない慧十を嘲笑いながら大坂はアタシに話し掛けてくる。やはり、耳障りで嫌な声だ。

「最後のチャンスや。清名 聖……いま、ここで選び、このどアホと心中するか……俺と生きるか……」

「……わかったわよ。それで、慧十が助かるの？」

「ええやろお、それなら……な」

こういう奴はこの後に慧十を撃つだろう。そして、アタシもその後に関わらず嫌な仕打ちを受ける。なら、いっそのこと……こんな奴の手にかかるのは嫌だけど……慧十と死んでやる！！

「環様！」

そこに珠樹さんが現れた。どうにかしてアタシが暴走するのを押さえようとしたらしい。しかし、……。

「いいわ、この際だからはっきりさせる。アタシが……あんたみたいな下種野郎に服従すると思うなよおお！」

アタシが叫ぶと一瞬だけ怯んだ大坂……。しかし、段々と笑いに変わる。アタシの顎を抑えて壁に押し付け……額に拳銃が……慧十が脚を抑えるが……。

「往生せいや！」

「ぐあ！」

その瞬間、驚くべきことが起きた。大坂の拳銃が弾け飛んでいく。発射される前に何か奴の拳銃を吹き飛ばしたのだ。環さんが胸元を裂いて隠していた一発打てる小型の拳銃を手に握り弾を放つたらしい。大坂が手を抑え……憎々しげに彼女を見ている。そして、奥の部屋に入るとヘリコプターのプロペラの音がした。逃げたのだ。珠樹さんはすぐにアタシを立たせ慧十を背負い……屋敷をでる。

「何とか……間に……あい……ましたね」

「ま、まさか時間で放火される仕掛けだったなんて……」

「動いてはいけません！ 酷いけが何ですから。奥様、泳さんが剣一さんに連絡を」

「え？ 今……」

「もう、私の使える人はお二人です。これから、末永くよろしくお願いします」

慧十の怪我と大坂財閥の銃器使用のせいで大会自体は無効となり慧十の有志と珠樹さんの献身的な態度は一躍この地域では有名になっている。そして、慧十の起こした経済界を一新する大乱は大成功し……これまで不正をしていた財閥系の企業はほとんどが検挙されその中でも大御所と言える大坂や他の数社は厳罰が下された。

「お帰り、聖」

「只今、竹華」

私は……慧十のお陰で普通科クラスに再び返り咲き、楽しい生活をしている。彼は……。

『聖がいいならそれでいいさ。俺はこの先にお前を幸せにしなくちゃいけない。俺は院麗クラスに残るよ、どうしても言うなら俺

も普通科に戻るけど」

『慧十が決めたなら私は……何も言わない。さびしいけどね。私には竹華や美雪もいるもん。家に帰れば慧十と二人……あ、珠樹さんもいたか……』

そんなこんなでアタシと慧十はまた少しの間離れ離れだ。でも、嬉しさはその分だけ増えたりする。珠樹さんは実は昼間の掃除や洗濯が終わると楽しいらしくNIGHT-KNIGHTに向かい慧十とアタシの世話をしてくれる。もちろん、チーフは松さんで彼女はサブチーフの感覚だろう。最近は慧十も本社の経営の方で手いっぱいになっているらしくここは実質的には松さんの店のようになっていく。その松さんも来月、この店を珠樹さんに任せ私の家に養子として入り清名財閥に婿入りすることになっていた。この一年で目まぐるしい変化があった……アタシは……。

「奥様……」

「珠樹さん……その『奥様』っていうのは家でだけにできない？」

「いけませんか？」

「俺は構わないぞ。旦那様でも奥様でも呼んでくれるのはな」

「えー……。アタシはまだ嫌だよ。結婚してからがいいもん」

「そうか？ まあ、そうだな。なら、結婚の話も出たし。少し早いが」

そこに竹華や魚町、剣一君と那流など、皆が集まってしまった……アタシとしてはやはり……少し恥ずかしい。慧十の指輪をアタシは既に返している。その代りに今日この場で細めで金製の指輪をケースと共に手渡されたのだ。その瞬間に姉と那流がアタシに抱きつき泳など……やっとかあ……などつつばやいている。剣一君は悪ふざけなのか真面目なのか……。

「これからよろしく頼むよ。姉さん」

「剣一君……」

「お姉ちゃんも遂にけっこんかあ。……あれ？ お姉ちゃんは結婚出来てもお兄ちゃんはまだ無理じゃない？ だって、女の子は16歳でもいいけど……男の子は18歳でしょ？」

そう、アタシたちは法律の壁に悩まされていた。別にそこまで深刻に悩んでいる訳でもないがこうも長く同棲しているにも関わらずアタシたちはまだその先に段階を進めてはいない。付き合っているだけで……それ以降には踏み入れていない。いや、同棲してるから既にその域に入ってるかも。

「ああ、そのことか。とりあえず、まずは……気休めかもしれないが、婚前のセレモニーみたいなことをしたいんだよ」

「あ、それ名案じゃん！ 慧十君さすがだね……。抜かりないというか」

「そうか、それなら、いいか。聖は」

「え、あ、うん。……とっても恥ずかしいけど……」

「解った。今週末に手配しておくよ」

そう、その式……アタシはあれから進展しない自分が少し悔しかった。何においても先にいかれてしまっている慧十と自分の立ち位置や精神というか考えというか……。それに、アタシを包んでくれるのは嬉しいけれど慧十はアタシに柔軟過ぎて……どうしようもないぐらい優しくして……。少しはアタシを頼ってくれてもいいじゃない……。

「珠樹さん……慧十に勝つ方法ってないんですか？」

「え？ ああ、解りますよ。旦那様は奥様に対して全身全霊の愛をそそいでいますから。少しさびしいですね。女としてはお相手の

殿方に頼ってほしいと思うこともあるのも解ります。あのイベント以来、旦那様の奥様への抱擁的な動きは周りの群を抜いていますから」

「え、あ、そうなんだけど……なんというか……。慧十を困らせちゃうのは少し気が引けるのだからできればアタシも正攻法で慧十を助けていきたいの」

「……、これはこれは仲睦まじい事ですね。ですが、それならばもう十分ではありませんか？」

アタシには少し解らない。あと四日後に慧十とアタシの式が執り行われる。まあ、結婚式はちゃんとその年齢でするし、まだ、高校に在学してるからアタシも慧十も……それがゴールでありスタートでもある本当の『結婚式』だとは考えていない。周りはいろいろとからまわりしてるメンバーも多い。だけど……。ああ、アタシは何を考えてるんだろう。最近……解らない。慧十のことはたまらなく好きだしこれからの未来に希望が持てることもアタシは既に肌で感じている。アタシは初期のアタシが感じた……。『釣り合わない』を今頃本当の意味で深く心で感じているのだ。その時は恋愛小説のページでありアタシは慧十とここまでなるとは考えていなかった。でも、……。

「そうですねえ、まずは旦那様に少しでも喜んでいただいてはどうでしょうか？」

「どういう意味？」

「はい、最近の奥様のお料理の腕は目に見張るものがございます。この勢いなら、旦那様が帰宅するときや御夜食などに温かい手製のお料理を御出しできるのでは？　旦那様は奥様と一緒に過ごされることに幸せを感じているようですし」

そうかもしれない。考え過ぎだろう。うん、やっぱり考えすぎの

アタシはアタシじゃない。その日は深く寝付くことができ慧十のバイクに乗せてもらい学校に入る。先輩の方々が最近では挨拶をすると返してくれる。院麗クラスで暴拳というか勝手に横暴な事をしていた上院や中院ランクの生徒が父親の失脚で多く退学に追い込まれたからだ。この学校も膿を出したと言えよう。そして、教室にアタシが入ると一足早い祝いの席が用意されていた。担任がまだ若い先生と言ったこともあり彼女の監視というか参加の許でアタシと慧十を祝ってくれたのだ。

「でも、よかったあ……、事故のこととかこの前の事件とかあったからどうなるかとひやひやしたけど、落ち着いてくれて嬉しいなあ」
「竹華はどうするの？ 泳君とは……」

「それは抜かりないもん。泳のご両親は『こんな不肖の息子にも好いてくれるお嬢さんが居たなんて。どうぞどうぞ、養子にでも……あ、お嬢さんが嫁入りでも二人の幸せを考えてください』だって」

「うわあ、泳君酷い言われようだね」

「仕方ねえよ。俺、水泳しか頭になかったし」

「そういえば慧十君はどうしたの？」

「え？ 居ないの？」

「あ、慧十は理事長に用があるんだって。生徒会のことらしい」

「そうだねえ、慧十君……このまま三年間全期の会長しちゃうのかなあ」

そこに示し合わせたように慧十が入ってきた。少し表情が明るい……何があったのだろうか……アタシには解らない。でも、慧十が入ると皆が……特に男子が彼をつきまわしながら祝いの言葉を告げている。彼もそういう空気が肌に好ましく少し歪んだ笑顔になっているが泳に小突かれながら周りのメンバーに答えている。

「へえ、業績あがってるんだなあ」

「ああ、聖の服を題材にしてそろそろファッション関連の部署の開設をしようとしてる。その時はよろしく頼むよ。聖」

「え？」

「夢……なんだろう？」

「う、うん……ありがとう」

慧十は覚えていてくれた。少しの間、封印していたアタシの夢……。慧十の横に居るために少しの間だけ封印していた服飾デザイナーの夢を彼は忘れずにその温めた会社の図案に乗せていてくれたのだ。

「いいの？ アタシが仕事しちゃうと。子供の世話とか……できないし。あ！……、う~~~~~……」

自分で言って赤くなるようではダメダメだ。慧十は少し驚いている。アタシの口からそんな言葉が出ようとは思ってもよらなかったというところだろう。額にキスをされ顔をさらに赤くしているのが自分でも解る程にアタシは赤くなっているのだろう。

「聖のしたいようにすればいいよ」

その時、先生が咳払いをした。周りは顔を赤くしたりはやし立てるように口笛を吹くものや呆れているが笑ってくれている者、反応は人それぞれだが……皆、温かに対応してくれる。穏やかに朝の時間を過ごし、慧十は院麗クラスに帰って行った。昼休みにもなるのに皆はやはりアタシの話題で持ち切り……。

「でも……、私は少し興味がくなあ。慧十君と聖ちゃんの娘か息子。どんな子になるんだろうね？」

「頭がいいのは確実じゃない？ だって聖ちゃんはSクラス並の学

力あるし」

「ま、それも旦那様仕込みなんだけどねえ？ 聖い？」

「こ、こら！ 竹華！」

「でも、慧十君も幸せ者じゃない？ こんなに気建てもいいし可愛
いし、胸もあるし頭いいし…… オール5の優良物件の女の子をメロ
メロにして…… 子供の事まで考えてるんだもん」

自分では解らないけれど慧十はそういうことは口にしない。慧十
の初恋はアタシでアタシも慧十が初恋だった。それから幾年もの年
月が経過して不思議な出会いをした。いや、再会だった……。女の
子の友達はアタシの外面や人に見せるそぶりを評価の対象にしてい
るが…… それは違う。それは…… あの時の約束から始まっている。

…… あ！ 竹華！ 暴露しないで！

「へえ……、慧十君も一途なんだねえ」

「私、その話を初めて慧十君と聖から聞いた時、涙ボロボロ流した
もん。何年越し？ えーと、五歳からだからだいたい十年くらいか
な？」

「確かに、いいなあ。私にも幼馴染でカッコいい男の子…… いたら
なあ」

うん、アタシは恵まれている。本当に。慧十という信頼できるパ
ートナーが居るのだから。たまに策士で何を考えているか解らない
ところもあるけれど。彼はアタシにとってとっても大切な人。そう、
アタシは恵まれているのだ。そして、迎えた週末。アタシには……
とっても大きなサプライズプレゼントが待っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8318k/>

シーフ&プリンセス

2011年10月6日20時50分発行